鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(60)

鹿児島城二之丸跡(遺物編)

—鹿児島県立図書館・鹿児島県立視聴覚センター建設に伴う発掘調査報告書—

1992年3月

鹿児島県教育委員会

序　　文

この報告書は、鹿児島県教育委員会が県立図書館並びに県立視聴覚センター建設工事に先立って実施した鹿児島城二之丸跡の発掘調査記録です。

ここに、「鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（60）鹿児島城二之丸跡（遺物編）」として本書を刊行することができました。

出土遺物では地元の薩摩焼きをはじめ、古伊万里や青磁・瓦器・土師器等が大量に発見されました。

鹿児島の江戸文化の解明に貴重な手掛かりを提供する本書が、広く文化財の保護と、学術研究のため、活用されることを願っています。

発刊にあたり、発掘調査と報告書作成に御指導、御協力をいただきました関係各位に対し心から感謝いたします。

平成４年３月

鹿児島県教育委員会
教育長　大　田　　務

例　　言

1　この報告書は鹿児島県立図書館、ならびに鹿児島県立視聴覚センター建設に伴う鹿児島城二之丸跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、鹿児島県教育委員会が実施した。

3　本書は、鹿児島城二之丸跡の遺物編である。

4　本遺跡は鶴丸城と通称されているが、文献にある「鹿児島城」を使用し、二之丸の位置にあたるので「鹿児島城二之丸跡」とした。

5　発掘調査にあたっては下記の先生方の指導助言を得た。

河口貞徳（鹿児島県文化財保護審議会委員）、五味克夫（鹿児島県文化財保護審議会委員）

(故)村野守次（鹿児島県文化財保護審議会委員）、沢村仁（九州芸術工科大学教授）

6　出土遺物にあたっては、佐賀県立九州陶磁文化館の大橋康二氏の指導助言を得た。

7　出土遺物は一連番号としたので、挿図、図版番号は一致する。

8　本書の執筆・写真撮影・レイアウトは弥栄が行った。

目　　次

序　文・例　言
第１章　調査の組織と調査範囲……1
第１節　調査の組織……1
第２節　調査の範囲……2
第２章　出土遺物……3
第１節　陶器……3
1　竪野系窯……3
(1)　白薩摩……3
(2)　灰色もの……6
(3)　象嵌……8
(4)　蕎麦釉……8
(5)　宗胡録写……5
(6)　黒薩摩……7
2　龍門司系窯……14
(1)　二彩および鮫肌……14
(2)　黒薩摩……18
3　元立院……19
4　苗代川系……20
(1)　黒薩摩（小型）……20
(2)　黒薩摩（大型）……21
(3)　黒薩摩（摺鉢・捏鉢）……22
(4)　黒薩摩（徳利）……23
5　その他の薩摩焼……28
6　琉球系……28
7　肥前系……29
8　瀬戸・美濃系……30
9　関西系……32
10　摺鉢……33
11　土管……33
12　土錘・陶錘……34
第２節　磁器・陶錘……41
1　白磁（白薩摩系）……41
2　青磁・白磁器……41
3　染付……43

(1) 中国系……43
(2) 肥前系……43
(3) 肥前佐波見系……47
(4) 明治以降の肥前系……47
(5) 平佐系……53
(6) 苗代川系……55
4 色絵……55
(1) 肥前系……55
(2) 明治以降の肥前系……57
(3) 瀬戸・美濃系……57
第3節 土師器……58
第4節 瓦器……59
第5節 瓦……59
1 軒丸瓦……59
2 鳥衾瓦……59
3 軒辺瓦……59
4 丸瓦……59
5 軒平瓦……59
6 平瓦……59
7 桟軒瓦……59
8 鎌瓦・桟瓦……59
9 専瓦……74
10 鬼瓦……74
第6節 石製品……83
1 鬼瓦石……83
2 硯石……83
3 砥石・4 鋳型・5 石栓・6 仁王像の腕……83～88
第7節 ガラス製品……88
第8節 その他の特別品……92
1 木製品……92
2 洗面具……94
3 髪止め……94
4 馬蹄……94
5 銃弾類……94
6 キセル……94
7 砲弾……94

8　古銭……94
第9節　縄文・弥生・古墳・奈良時代の遺物……96
第10節　出土遺物の計測……97
第3章　まとめ……105

挿図目次

第1図　調査グリット図……2
第2図　竪野系白薩摩(1)……4
第3図　竪野系白薩摩(2)……5
第4図　竪野系灰色もの……7
第5図　竪野系象嵌……9
第6図　竪野系蕎麦釉……10
第7図　竪野系宗胡録写(1)……12
第8図　竪野系宗胡録写(2)……13
第9図　竪野系黒薩摩(1)……15
第10図　竪野系黒薩摩(2)……16
第11図　龍門司系二彩……17
第12図　龍門司系黒薩摩……18
第13図　元立院黒薩摩……19
第14図　苗代川系黒薩摩(1)……20
第15図　苗代川系黒薩摩(2)……23
第16図　苗代川系黒薩摩(3)……24
第17図　苗代川系黒薩摩(4)……25
第18図　苗代川系黒薩摩(5)……26
第19図　苗代川系黒薩摩(6)……27
第20図　苗代川系黒薩摩(7)……28
第21図　苗代川系黒薩摩(8)……29
第22図　その他の薩摩焼……30
第23図　琉球系陶器(1)……31
第24図　琉球系陶器(2)……32
第25図　肥前系陶器……33
第26図　瀬戸・美濃系陶器(1)……34
第27図　瀬戸・美濃系陶器(2)……35
第28図　瀬戸・美濃陶器系(3)……36
第29図　関西系陶器……37
第30図　摺鉢……38
第31図　土管……39
第32図　土錘・陶錘……40
第33図　白磁（白薩摩系）……41
第34図　青磁・白磁……42
第35図　中国系染付……43
第36図　肥前系染付(1)……44
第37図　肥前系染付(2)……45
第38図　肥前系染付(3)……46
第39図　肥前佐波見系染付……47
第40図　明治以降の肥前系染付(1)……48
第41図　明治以降の肥前系染付(2)……49
第42図　明治以降の肥前系染付(3)……50
第43図　平佐系染付(1)……51
第44図　平佐系染付(2)……52
第45図　平佐系染付(3)……53
第46図　苗代川系染付(3)……54
第47図　肥前系色絵……55
第48図　明治以降の肥前系色絵(1)……56
第49図　明治以降の肥前系色絵(2)……57
第50図　明治以降の瀬戸・美濃色絵……58
第51図　土師器(1)……60
第52図　土師器(2)……61
第53図　土師器(3)……62
第54図　土師器(4)……63
第55図　瓦器(1)……64
第56図　瓦器(2)……65
第57図　瓦器(3)……66
第58図　瓦器(4)……67

第59図　軒丸瓦(1)……69
第60図　軒丸瓦(2)……70
第61図　軒丸瓦(3)……71
第62図　鳥衾瓦・軒込瓦・丸瓦(1)……72
第63図　丸瓦(2)……73
第64図　丸瓦(3)……74
第65図　平瓦(1)……75
第66図　平瓦(2)……76
第67図　桟軒平瓦(1)……77
第68図　桟軒平瓦(2)……78
第69図　鎌瓦・桟瓦……79
第70図　塼瓦(1)……80
第71図　塼瓦(2)……81
第72図　鬼瓦(1)……82
第73図　鬼瓦(2)……83
第74図　石製鬼瓦……84
第75図　硯……85
第76図　砥石・鋳型・石栓・仁王像……86
第77図　ガラス製品……87
第78図　木製品……88
第79図　洗面具・髪止め・耳掻……89
第80図　馬蹄……90
第81図　銃弾…薬莢・キセル……91
第82図　砲弾……92
第83図　古銭……93
第84図　縄文～奈良時代の遺物……95

表　目　次

出土遺物の計測　1……97
出土遺物の計測　2……98
出土遺物の計測　3……98
出土遺物の計測　4……99
出土遺物の計測　5……100
出土遺物の計測　6……101
出土遺物の計測　7……102
出土遺物の計測　8……103

図　版　目　次

図版1　白薩摩1……107
図版2　白薩摩2・灰もの……108
図版3　灰もの2・象嵌1……109
図版4　象嵌2・蕎麦釉・宗胡録写1……110
図版5　宗胡録写2……111
図版6　竪野黒薩摩1……112
図版7　竪野黒薩摩2・龍門司二彩・黒薩摩……113
図版8　元立院黒薩摩・苗代川黒薩摩1……114
図版9　苗代川黒薩摩2……115
図版10　苗代川黒薩摩3……116
図版11　苗代川黒薩摩4……117
図版12　苗代川黒薩摩5……118
図版13　苗代川黒薩摩6・その他の陶器1……119
図版14　その他の陶器2・琉球焼1……120
図版15　琉球焼2・唐津焼・瀬戸・美濃焼系1……121
図版16　瀬戸・美濃系2……122
図版17　関西系・肥前系・備前系……123
図版18　土管・土錘・陶錘・薩摩白磁1……124
図版19　薩摩白磁2・青白磁・青磁・白磁……125
図版20　染付1……126

図版21　染付２……127
図版22　染付３……128
図版23　染付４……129
図版24　染付５……130
図版25　染付６……131
図版26　染付７・色絵１……132
図版27　色絵２……133
図版28　色絵３……134
図版29　土師器１……135
図版30　土師器２……136
図版31　瓦器１……137
図版32　瓦器２……138
図版33　瓦器３……139
図版34　軒丸瓦１……140
図版35　軒丸瓦２……141
図版36　鳥衾瓦・差込み瓦・丸瓦……142
図版37　軒平瓦・平瓦……143
図版38　軒平桟瓦１……144
図版39　軒平桟瓦２・桟瓦……145
図版40　塼瓦１……146
図版41　塼瓦２……147
図版42　塼瓦３……148
図版43　塼瓦４・鬼瓦１……149
図版44　鬼瓦２……150
図版45　石製鬼瓦……151
図版46　石製品……152
図版47　ガラス製品……153
図版48　木製品・洗面具……154
図版49　髪止め・金属品１……155
図版50　金属品２……156
図版51　縄文・平安時代……157

第1章　調査の組織と調査範囲

1　昭和52年度における発掘調査の組織

調査主体者	教育長	国分正明
調査責任者	文化課長	島元牧雄
	課長補佐	荒田孝助
調査企画	専門員	本蔵久三
調査担当者	文化財研究員	諏訪昭千代
	主事	弥栄久志
	文化財調査員	西田茂
事務担当者	係長	中条亨
	主事	伊知地千晴
	主事	天達京子

2　平成3年度における発掘調査報告書作成の組織

調査主体者	教育長	太田務
調査責任者	文化課長	向山勝貞
企画	課長補佐	濱松巌
	主任文化財研究員兼係長	吉元正幸
担当者	主査	弥栄久志
事務担当者	主幹兼係長	濱崎琢也
	主査	批杷雄二
	主事	新屋敷由美子

3　直接の担当ではなかったが発掘調査や報告書作成に参加した文化課の職員

平田信芳，出口　浩，戸崎勝洋，新東晃一，立神次郎，池畑耕一，青崎和憲，吉永正史
牛ノ濱修，長野真一，中村耕治，中島哲郎，井ノ上秀文。

4　指導・助言者

発掘調査

県文化財保護審議会委員	河口貞徳
九州芸術工科大学教授	沢村仁

文献

県文化財保護審議会委員	五味克夫

建物

県文化財保護審議会委員	土田充義

遺物

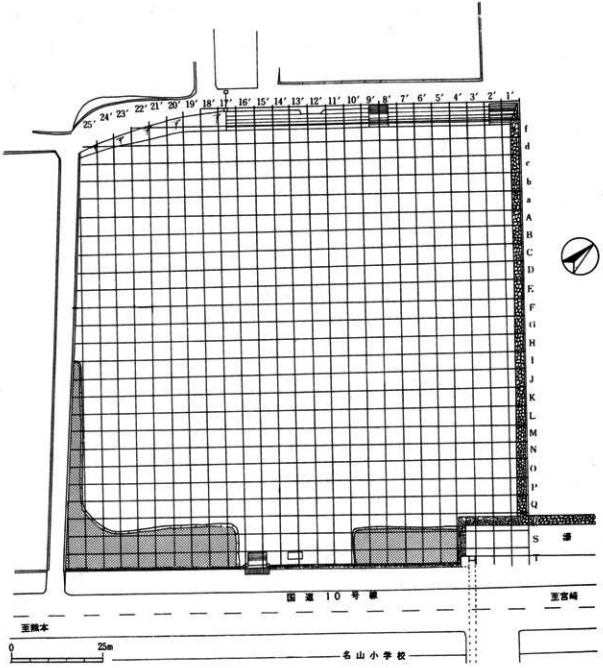
佐賀県立九州陶磁文化館学芸課長	大橋康二

鹿児島県立博物館学芸主事　　諏　訪　昭千代

5　調査の範囲

第１図は調査範囲とグリッド図である。

調査範囲は国道10号線と本丸跡の西側にあたり，約15,000㎡であった。



第１図　調査グリット図

第2章　出土遺物

第1節　陶器

1　竪野系窯

(1)　白薩摩（白色胎土製透明釉無文焼および有文焼）（1～32）

これらは，胎土が白粘土で器面には透明釉が施釉されているもので，この中には江戸期から明治期までのものが出土している。

1から8は碗である。1～5は大型で6～8が小型である。

1は見込みがやや深く，高台がやや高い器形である。器面には透明釉が全体に施釉され，見込み部には，細かい貫入が見られる。2は見込みがやや浅く，口縁部は直線的に広がり，高台が高い器形である。器面には透明釉が全体に施釉され，細かい貫入がある。轆轤調整痕の筋が外器面に見られる。3は口縁が外反する端反の器形である。器面には透明釉が全体に施釉され，細かい貫入がある。4は口縁が外反する端反の器形である。器面には透明釉が全体に施釉されているが，細かい貫入はみあたらない。5は広口の口縁で，やや低い高台を持つ器形である。器面には透明釉が全体に施釉され，細かい貫入がある。6はやや低い高台をもち，器面はやや蕎麦釉に近い透明釉が掛り，底部近くには千鳥印が描かれて入る。7はやや低い高台をもつもので，器面には透明釉が全体に施釉され，細かい貫入が見られる。口唇部を一部欠き，その部分の周囲は黒褐色の焼成痕跡が見られる。使用方法としては灯明皿としての可能性が強い。8は四方4か所に欠いた部分を意図的に作っている。器面には透明釉が全体に施釉されているが，二次的な火気があると思われ，器面が脱色してざらざらしている。

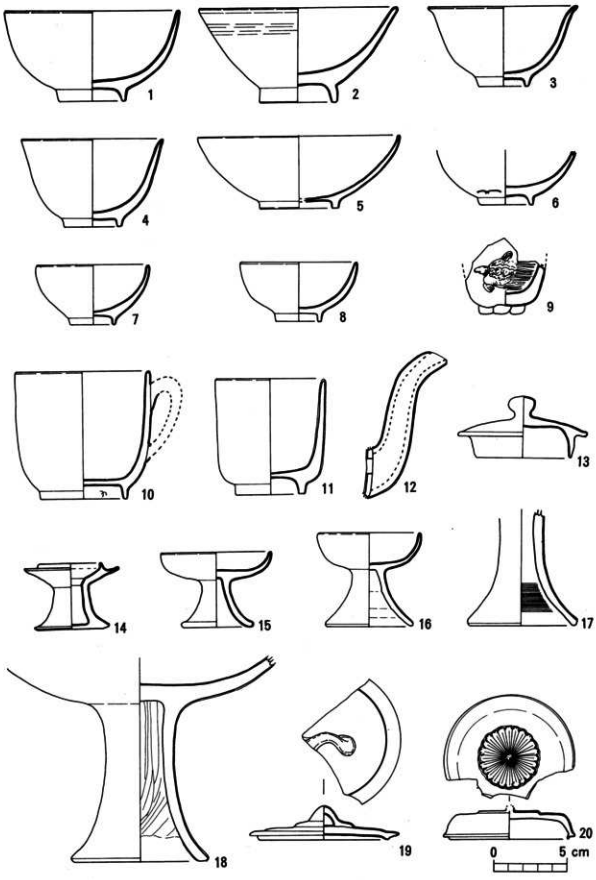
9は三足のもので，用途不明である。器面には透明釉が全体に施釉され，細かい貫入が見られる。このものの底部近くの外面には，亀の飾りを付けている。

10・11は茶碗類である。10には取っ手が付き，底部の裏側には千鳥印が施されている。二つとも器面には透明釉が全体に施釉され，細かい貫入が見られる。

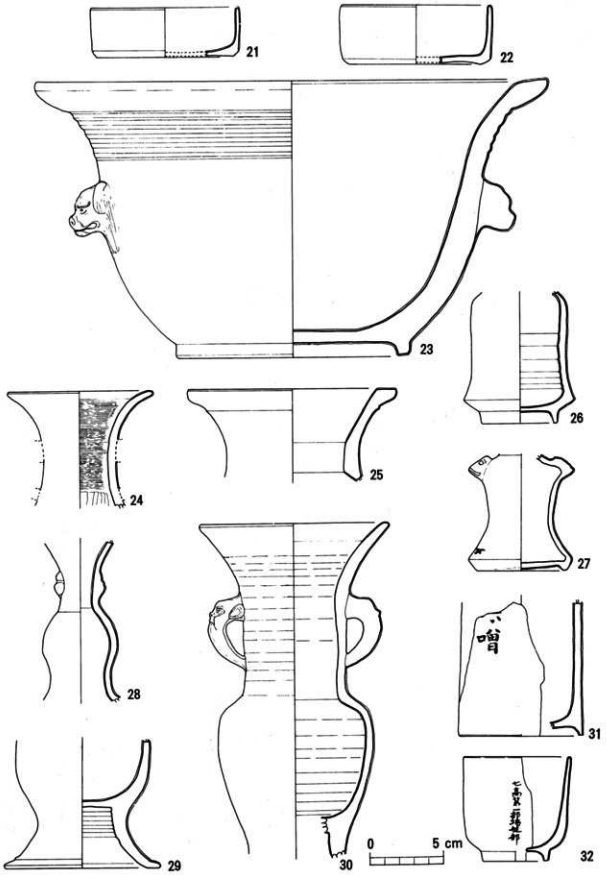
12・13は茶家の蓋と注ぎ口である。器面には透明釉が全体に施釉され，細かい貫入が見られる。

14～18は高坏である。14は用途としては燈明器と考えられ，器面には透明釉が施釉され，細かい貫入が見られる。そしてそれは全体的に汚色化して，貫入が良く表れている。15は小型の高坏で器面には緑がかった透明釉が施釉され，細かい貫入が見られる。16は小型高坏で，器面には透明釉が施釉され，細かい貫入が見られる。皿の底部には千鳥印が付けてある。17は高坏の脚部である。外側器面に透明釉が掛り，細かい貫入が見られる。内側器面は轆轤調整痕が見られる。18は大型の高坏である。外側器面に透明釉が掛り，細かい貫入が見られる。内側器面は篦調整痕が見られる。

19・20は蓋である。両方とも器面には透明釉が全体に施釉され，細かい貫入が見られる。19は，紐状つまみをもち薄型である。20は菊花文のうえに球状のつまみが付けられたと思われ，



第２図　堅野系白薩摩（１）



第３図　竪野系白薩摩（２）

器形は深器形は深みのあるものである。

21・22は小鉢である。両方とも器面には透明釉が施釉され，細かい貫入が見られる。なお，底部には透明釉が施されて無く，糸きり痕が見られる。

23は大鉢である。器面には透明釉が全体に施釉され，細かい貫入が見られる。口縁部は「く」字状に外反し，頸部には6状の沈線が施され，獅子の飾りを付けている。底部は高台が付いている。

24～30は花生である。全て器面には透明釉が施釉され，細かい貫入が見られる。**24・25**は口縁部で，**24**には耳付きである。**26・27**は高縁部が欠損したもので，**27**には獅子の飾りが対にあり，千鳥印が底部に見られる。なお，高台は低い。**28**は青っぽい透明釉が施釉され，頸部には対の獅子が飾り付けてある。また，底部には千鳥印が施されている。**29**は底部で脚付きである。**30**は対の獅子が飾り付けてある耳が頸部に付けてある。器形としては口縁部が外反し，頸部が締まり，胴部で球状に張り，底部は脚台である。

31は小出し用のいれものである。器面には透明釉が全体に施釉され，細かい貫入が見られる。

32は湯のみである。色が若干黄味を帯びて，明治期のもので，器面に「七高第1部端艇部」を書いて入る。なお，器面には透明釉が全体に施釉され，細かい貫入が見られる。

(2) 灰色もの（灰色胎土製無文焼）(33～48)

この類は，白薩摩が白粘土，黒薩摩が茶褐色粘土を使用しているのに対し，灰色の粘土を使用しているもので，三島手のように，象嵌を施さないものとした。

33～40は碗である。

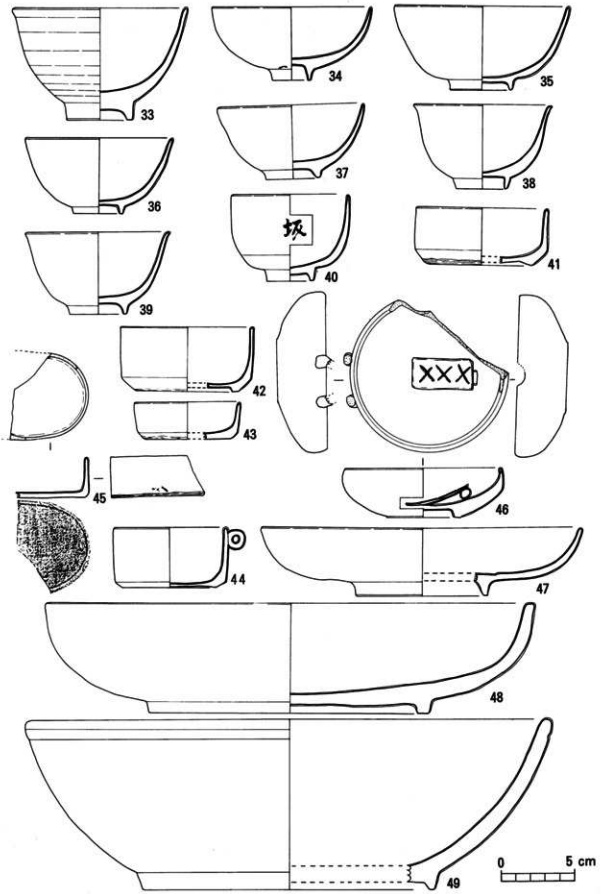
33は深めもので，外面に轆轤調整痕の線が見える。底部は厚いが高台はやや低い。釉の掛りが悪く，貫入は小しみられ，見込みや外面に斑点がある。**34**は浅めのもので，高台が高い器形である。器面には透明釉が全体に施釉され，細かい貫入が見られる。**35**はやや広口のもので，器面には透明釉が全体に施釉され，細かい貫入が見られる。**36**は中型で色は灰色が強い。器面には透明釉が全体に施釉され，細かい貫入が見られる。**37**は中型で色は灰色が強い。器面には透明釉が全体に施釉され，細かい貫入が見られる。**38**は中型で端反口縁で，色は茶色が強い。器面には透明釉が全体に施釉され，細かい貫入が見られる。**39**は中型で端反口縁で，色は茶色が強い。器面には透明釉が全体に施釉され，細かい貫入が見られる。**40**は小型で深みのあるもので直行高縁である。器面には透明釉が全体に施釉され，細かい貫入が見られる。胴部には「坂」を書いている。

41は浅い高台のある小鉢である。器面には透明釉が施釉され，細かい貫入が見られる。

42～44は，小鉢で，3個とも器面には透明釉が施釉され，細かい貫入が見られる。なお，底部には透明釉が施されて無く，糸きり痕が見られる。**44**では竹ひご通しの穴を付けてある。

45は小鉢である。器面には透明釉が施釉され，細かい貫入が見られ，千鳥印を付けている。底部は，布目痕がある。

46は灯明皿である。器面には透明釉が施釉され，細かい貫入が見られる。芯が乗る部分と出



第４図　灰色もの（透明釉仕上げの灰色胎土の薩摩焼）

す部分と持つ部分がある。底部は上げ底である。

47・48は大皿である。器面には透明釉が施釉され，細かい貫入が見られる。**47**の高台の先は外開きで細くなっている。

49は大鉢である。器面には透明釉が施釉され，細かい貫入が見られる。色は灰色が強い。

(3) 三島手（灰色胎土製象嵌有文焼）(50～63)

灰色の粘土に白粘土で象嵌し，その上に透明釉を掛けるものの類である。

50・51は浅い碗と深い碗である。**50**は器面に透明釉が施釉され，細かい貫入が見られず，**51**は器面に透明釉が施釉され，細かい貫入が見られる。文様は２本の枠線に菊花文を横位に連続に施し，暖簾状を横位に連続に施している。

52～56は茶家である。**52**は蓋，**53**は注ぎ口，**54～56**は本体である。文様は菊花文・蕨手文・×に四点を施した文様・梅花文・簾状文様がある。枠線は２本である。**56**の底部は碁笥底風である。器面に透明釉が施釉され，細かい貫入が見られる。

57は器面に簾状文を施したもので，用途不明の器である。器面に透明釉が施釉され，細か貫入が見られる。

58～61は花器の類で，**59**が水盤で他は花瓶である。**58**は底部で，**59～61**は口円部ないし頸部である。文様としては雲文・簾状文・雷文・花菱文等が見られる。器面に透明釉が施釉され，細かい貫入が見られる。

62・63は鉢の類である。**62**は暗灰色の釉に白粘土を使用して，菊花文を象嵌で施したもので，**63**は獅子の耳が付き，同心円文等を施している。器面に透明釉が施釉され，細かい貫入が見られる。

(4) 蕎麦釉 (64～76)

この類は，白粘土や灰色粘土に蕎麦釉を掛けたものである。

64～66は碗である。**64・65**は白粘土に蕎麦釉を掛け，掻落を見込みに施している。掻落の中に重ね焼きの部分が見られる。高台は，低くもなく高くもなく普通である。見込みまでの部分は浅く，高台の高さは普通である。

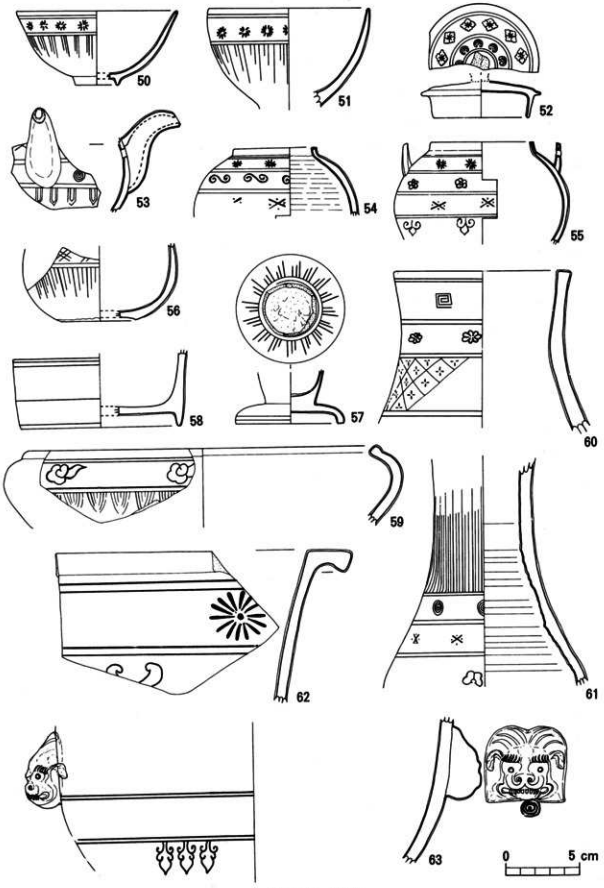
66は白粘土に薄い蕎麦釉を掛けたものである。一見白薩摩に類似している。見込み部分までは浅く，高台までの高さは普通である。

67は皿である。低い高台付きで，灰褐色の粘土の上に蕎麦釉を底部近くまで掛けて入る。器面調整は荒い。

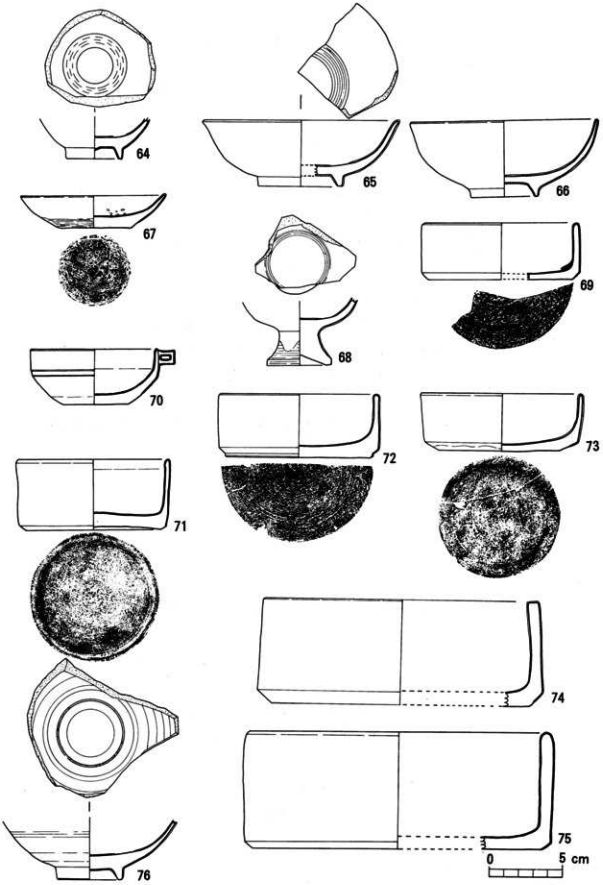
68は高坏である。蕎麦釉は坏部に掛けてあり脚部にはない。見込みには掻落があり，重ね焼きの跡がある。

69～73は小鉢の類である。**70**は小鳥の餌入れで，白粘土に薄い蕎麦釉を掛けて入る。竹ひご通しの部分もある。**72～73**は白粘土に蕎麦釉を掛けたもので，平底の小鉢である。器面調整や施釉は良くない。

74・75は大鉢である。器面は灰色粘土に蕎麦釉を掛けたものである。細かい貫入が見られ，



第５図　象嵌



第６図　堅野系舊麦釉

器面調整は良い。

76は濃い蕎麦釉を掛けて入るもので，碗である。共に灰色胎土である。

(5) 宗胡録写—茶褐色文焼き (77～89)

この類は，白色粘土および灰色粘土に黄褐色の釉を塗り，茶褐色の釉で文様を描いているものである。

77～79は茶家の蓋・本体・注ぎ口である。文様は蛸足蕨手文・麻の葉繋文等が描かれて入る。胎土は白粘土である。

80・81は大鉢の類である。**80**は大鉢の口縁部で，白粘土を使用し，器面に茶褐色の釉で横位に描いている。**81**は口縁部がL字に折れ，頸部が縮まり，胴部が球状になる器形で，灰色粘土を使用したものである。文様は麻の葉繋文と鋸歯を組み合わせた文様を描いている。

82・83は花器の可能性が強い。器面は，黄色釉の上に茶褐色の釉で，蛸足蕨手文と花菱文が見られる。**82**は胴部で，**83**は底部である。

84～83は火舎の類である。**84**は口縁部で，内側に釜等をのせる突起が付き，また，口唇部の一部を切り込んでいる。**85～87**は底部であり，その中の**86**は蛇の目底で抉っている。他は足を付けている。粘土は明るい灰色で，文様は蛸足蕨手文・花菱文・青海波文・編籠状文等が暗茶褐色の釉で描かれている。

88～92は飯櫃である。**88**は蓋の握り摘みで，**83・90**は蓋で，**91**は身の胴部で，**92**は底部である。粘土は明るい灰褐色で，文様は黄茶褐色の上に暗茶褐色の釉で蛸足蕨手文・斜め格子文等を描いている。

(7) 黒薩摩 (93～108)

93は白粘土に茶褐色の鉄釉を掛けている。白粘土の中には，黒点の粒子が混ざっている。釉は畳み付の部分にはない。

94～97は皿である。

94・95は茶褐色の粘土に濃い茶褐色の鉄釉を上面にかけている。**96・97**は茶褐色の鉄釉を上面にかけている。全て，見込みの中に5か所の目跡があり，目跡の目砂は粒が大きい。

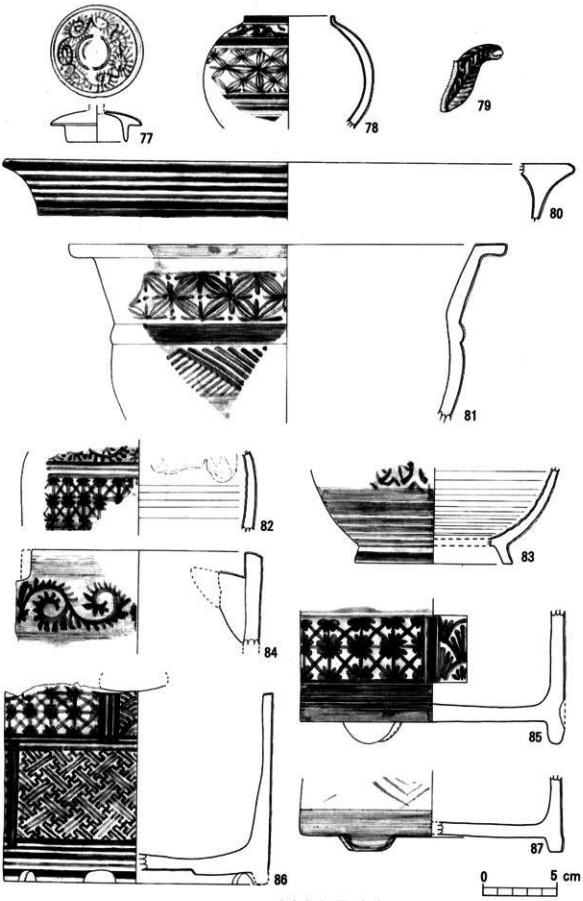
98は高坏である。茶褐色の鉄釉を坏部にかけ，見込みには掻落があり，重ね焼きのあとが見られる。

99～101は燈台である。**99**は淡茶褐色の釉で胎土は明茶褐色をしている。**100・101**は茶褐色の鉄釉で粘土は赤褐色をしている。口唇部に白釉をかけている。なお，底部には施釉されていない。

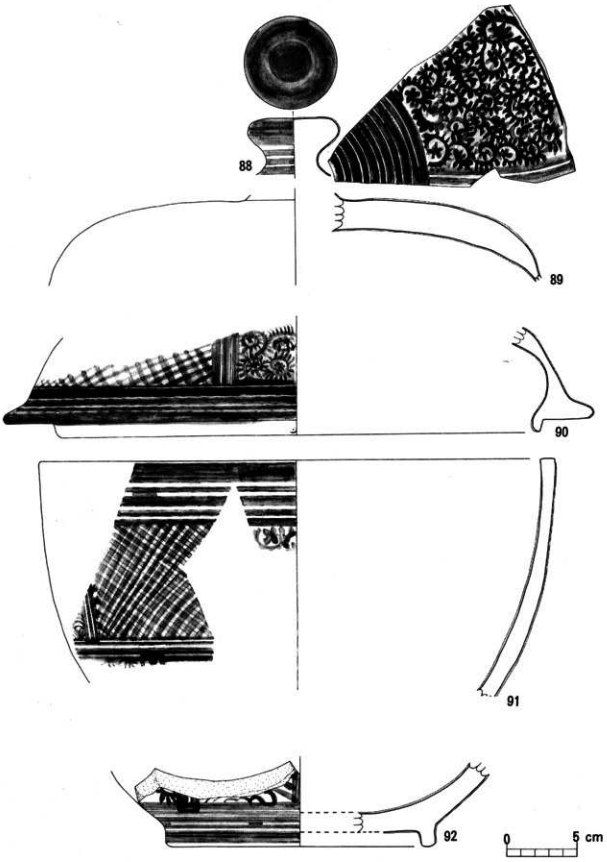
102・106は茶家の蓋である。これらは，蓋の縁を盛り上げている特徴が見られ，釉は艶がある。**102～104**の釉は濃い茶褐色の鉄釉で，**105・106**は緑茶褐色である。胎土は全体にざらざらした茶褐色で**104**は濃い。

107～112は茶家の本体である。

形としては上から押さえ付けられたような背の低いもの**107**と，球状のものがある。釣り手



第７図　堅野系宗胡録写（１）



第８図　堅野系宗胡録写

掛の部分には沈線で縁取りをしている。脚は3か所あり，112が注ぎ口の下を外れ，他は外れていない。釉は107・108が緑茶褐色で，他は茶褐色の鉄釉である。釉は足の部分までかけている。

113・114は小型の釜である。外面は鍔まで茶褐色の釉をかけ，火のかかる部分は釉をかけていない。底部は碁笥底である。内側は薄く茶褐色の釉をかけている。113には釣り下げ用の部分も作っている。

115は醤油差しである。外面は茶褐色の釉をかけている。胎土は茶褐色である。

116は湯のみである。黄茶褐色の粘土に暗茶褐色の釉をかけている。口唇部の内側には黒色のをかけている。底部には⊕の刻印があり，畳み付けの部分にも釉をかけている。

117～119は燈器と思われる。胎土は茶褐色で釉も茶褐色である。脚部には釉がかけていない。器形としては高坏の類にあたる。見込みの中には中央に半円錐形の突起を付け，真中に筒状の穴をあけている。脚部には，中央に筒状の穴をあけている。

2　龍門司系

(1)　二彩灰濁釉（120～125）

この類は灰緑色の釉の上に，白灰色ないし灰色のかけるものである。胎土は灰色と茶褐色の2種類がある。仮に灰濁釉二彩とした。

120・121は碗である。灰緑色の釉はの下部から高台の畳付けまで見られている。見込みには掻落があり，重ね焼きの跡がある。この事は，灰緑色の釉の上から灰白色の釉をかけた二彩の特徴を表している。121の灰緑色の釉は薄い。

122・123は坏で高台付きで浅い。釉のかけ方や見込みも碗と同様で，123には掻落の中に細かい目砂が見られる。

124は高坏である。釉のかけ方は上と同じであるが，坏部にはかかっていない。見込みには掻落があり，重ね焼きの跡がある。

125は小鉢の類である。灰緑色の釉は薄く，灰白色の釉が目立つ。

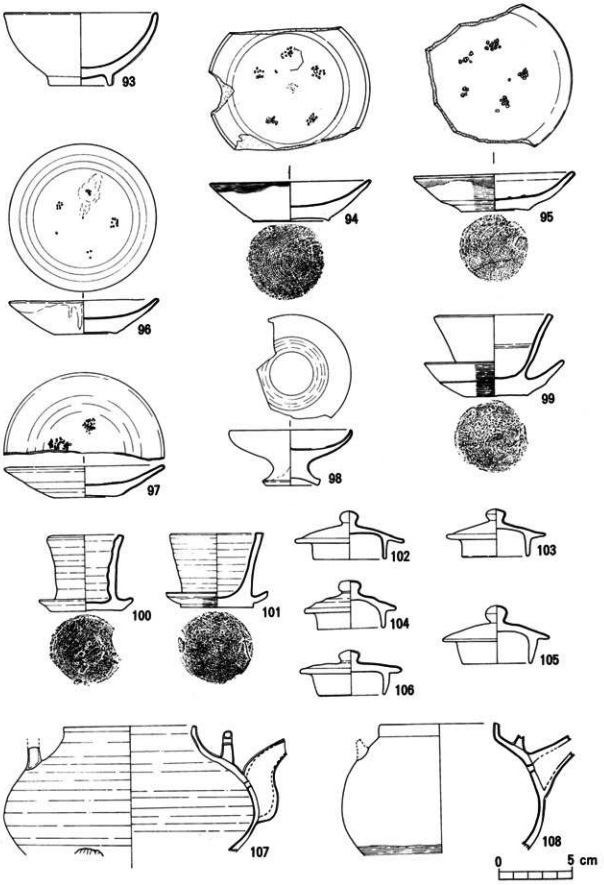
二彩白濁釉（126～133）

この類は白黄色ないし黄色の釉の上に鉄釉の茶褐色の釉をかけるものである。胎土は茶褐色である。126は高坏である。これは茶褐色の胎土に白黄色釉をかけたのである。

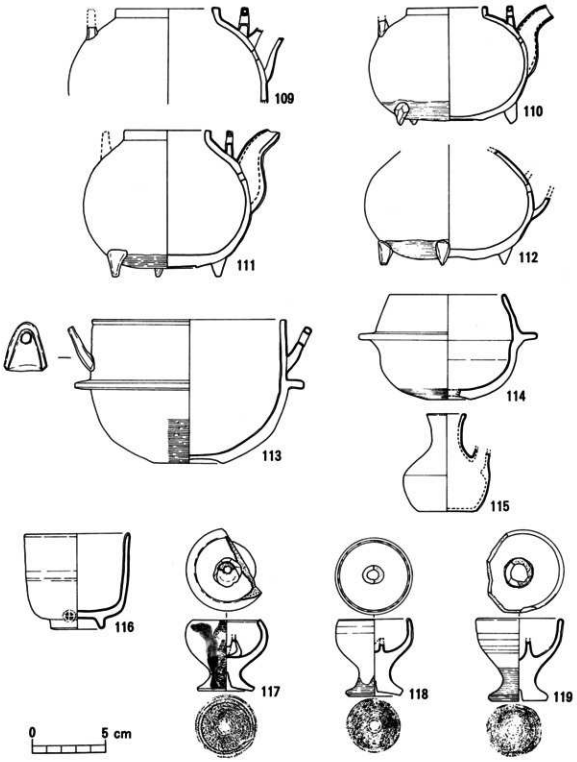
127・128は背の低い129・130は背の高い小壺である。黄色の釉の上に茶褐色の釉をかけたもので，口縁部に茶褐色の釉がかかっている。なお，130には釉がかかってない。低い小壺には高台が付いている。用途としては油壺であろう。

131は高坏である。胎土は茶褐色で器面に黄色の釉をかけている。器面の裏側は施釉していない。

132・133は大鉢である。内面は黄色の釉で外面は茶褐色の釉をかけたものである。胎土は茶褐色である。見込みには目跡が5か所あり，目跡の目砂の粒子は細かい。底部の底面中央には「龍門司芳林」の刻印がある。



第９図　堅野系黒薩摩（１）

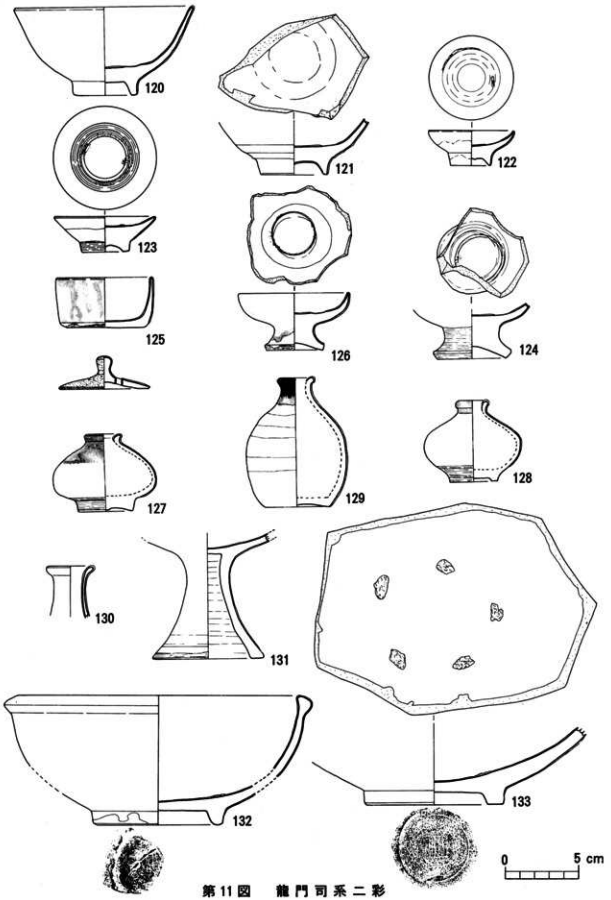


第10図　堅野黒薩摩(2)

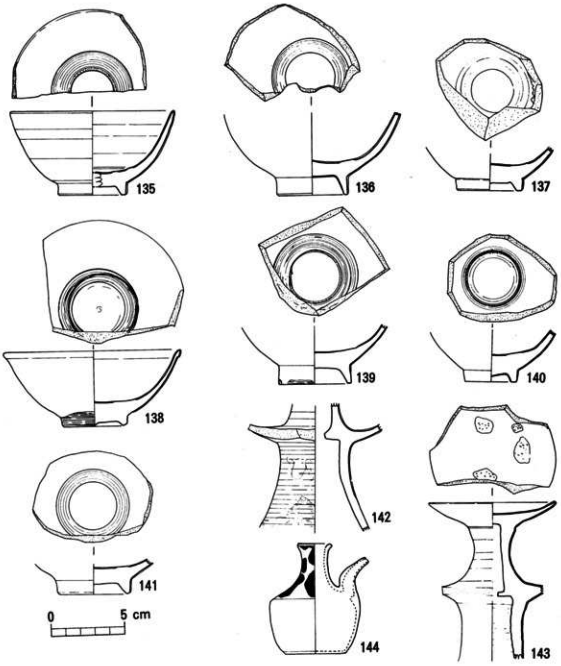
これらは龍門司二彩と言われているものである。

鮫肌 (134)

器面が鮫のぶつぶつした肌に似たものである。器種は壺である。色は灰茶褐色で，鮫肌は上



第11図　龍門司系二彩



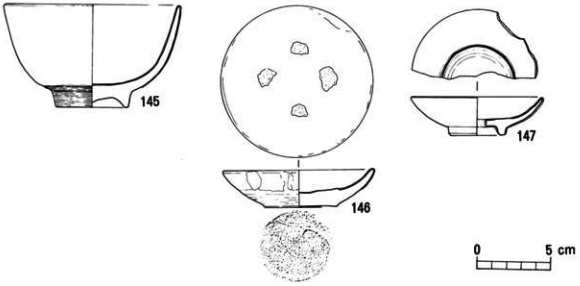
第12図　龍門司黒薩摩

面に見られる。

(2)　黒薩摩（135～144）

この類は灰色ないし明るい茶褐色の粘土に，茶褐色の鉄釉をかけたものである。釉は全体的に堅野系と比べると艶がない。

135・136は碗である。胎土は135・136が灰色で，137～139が明茶褐色で，140・141茶褐色である。135は深目の碗で，高台は低い。見込みには掻落があり，重ね焼きの跡が見られる。136はやや浅めで，高台は高く内面には黒釉をかけている。見込みには掻落があり，重ね焼きの跡が



第13図　元立院黒薩摩

見られる。138はやや低い高台で，見込みには掻落があり，重ね焼きの跡が見られる。畳み付け以外底部全体に釉がかかっている。138には低い高台で，見込みには掻落があり，重ね焼きの跡が見られる。底部全体に釉がかかっていない。139は高い高台で，見込みには掻落があり，重ね焼きの跡が見られる。140はやや低い高台で，見込みには掻落があり，重ね焼きの跡が見られ，底部は畳み付け以外底部全体に釉がかかっている。141はやや低い高台で，見込みには掻落があり。重ね焼きの跡が見られる。底部全体に釉がかかっていない。

142・143は器台付きの高坏と思われる。緑茶褐色の釉がかかり，見込みには目跡が見られる。これらは，加治木町の山元窯の資料と類似している。

144は醤油小出しの入ものと思われる。器面は暗茶褐色の釉の上に，黒色の釉を部分的にかけている。釉は畳み付けの部分には施釉していない。

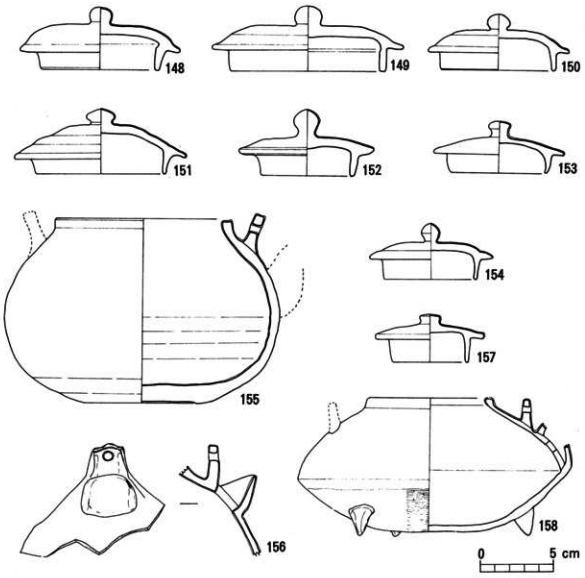
3　元立院窯（145～147）

この類は，艶のある黒色の釉をかけているのが特徴である。

145は碗である。粘土は荒い黒褐色で，器の整形は荒い。釉は厚く蛙の肌に似ている。底部は，中央にへそがあり，釉はかかっていない。

146は皿である。釉は明るい黒褐色で表面の見込みと裏面の口縁部に施釉している。目跡の目砂は細かく，4か所見られる。粘土は茶褐色である。

147は高台付きの皿である。粘土は灰茶褐色で，荒い粒子である。見込みには掻落があり，重ね焼きの跡が見られる。釉は濃い茶褐色で，底部の裏面まで施釉し，高台の畳み付けの内側に細かい目砂が付いている。



第14図　苗代川黒薩摩(1)

4　苗代川系（148～158）

(1)　黒薩摩（小型）

胎土はやや荒いものが主で，色は茶褐色・暗茶褐色・赤茶褐色・明赤茶褐色等がある。

148～154は山茶家の蓋である。全体的に器面が荒く，施釉が薄い。148～150は特に薄く色は緑灰色で，器形は肩が張るのが特徴である。151～154は前三つよりも施釉が濃い。色は茶褐色で，器形はなで肩である。その中で，154は縁近くで段を付けている。

155・156は山茶家の本体である。156は全体的に器面が荒く，施釉が薄い。色は灰茶色で胎土は粒子がやや荒い。器形は口縁部が締まり，胴部では張り，底部は平底である。156は注ぎ口の部分である。胎土は粒子がやや荒く暗茶褐色をしている。釉は黒褐色をして，艶がある。釣り手部には刻線が見られる。

157・158は黄茶褐色の釉を施した算盤玉状の茶家本体と蓋である。3脚で前脚は注ぎ口の直下に付けている。これは，明治以降の長太郎焼の可能性が強い。

(2) 黒薩摩（大型）

159～168は甕である。

159は中ぐらいの甕である。胎土は茶褐色に焼かれ，釉は黒茶褐色の鉄釉をかけて，その上に灰色のをかけている。釉のかけかたは丁寧である。口縁部は「T」字状で，口唇部には3本の沈線がある。160は大甕である。口縁部は，厚く「T」字状で，器面には突帯と梅花文が見られる。粘土は茶褐色に焼かれ，釉は茶褐色の上にさらに黒茶褐色をかけ，文様部は黄茶褐色の釉である。文様のある部分は艶がある。161は大甕である。粘土は茶褐色に焼かれ，釉は黒茶褐色の鉄釉をかけている。釉のかけかたは，丁寧に横位に塗っている。口縁部は「T」字状で，頸は締まり2状の沈線があり，肩部は張り2本の突帯を付けた器形をしている。162は甕である。口縁部は「T」字状で，頸は締まり3状の沈線があり，肩部は張り2本の突帯を付けた器形をしている。口唇部は平坦である。釉は黒褐色の鉄釉をかけて，胴部近くに良く塗り，口縁部にには少なく塗っている。胎土は茶褐色に焼かれている。163は半胴甕である。口縁部は「T」字字状で，頸は締まり3条の沈線があり，肩部は張り2本の突帯を付けている。釉のかけかたは，灰茶褐色を厚く塗り，口縁部には垂れる様に塗っている。また，内面にも垂釉が見られる。164は小形の甕で，植木鉢に利用している。口縁部は「L」字状で，口唇部は平坦である。胎土は茶褐色に焼かれている。器面には，暗茶褐色の釉を薄くかけている。現状では，漆喰が器面に付着している。165は小形の甕である。口縁部は短い「L」字状で，口唇部は平坦である。胎土は暗茶褐色に焼かれている。器面には，黒茶褐色の釉を薄くかけている。166は口縁部が短い「L」字状で，口唇部は平坦である。頸は締まり，肩部は張り2本の突帯を付けている。胎土は黒褐褐色に焼かれ，器面には，茶褐色の釉を薄くかけ，その上に，灰釉が見られる。167は甕も底部である。胎土は暗茶褐色に焼かれ，外器面には茶褐色の釉を薄くかけている。また，植木鉢に利用しているらしく，中央に穴がある。現状では，漆喰が器面に付着している。168は底部である。平底で若干中央部があがっている。粘土は赤茶褐色に焼かれ，器面には茶褐色の釉を上部に荒くかけている。内面には，櫛目が見られる。

169～172は壺である。

169は壺の口縁部である。胎土は暗茶褐色に焼かれ，器面には暗茶褐色の釉を荒くかけている。口縁部は外側に折り曲げて作っている。169は壺の口縁部ある。口縁部は短い「L」字状で，口唇部は平坦である。胎土は暗茶褐色に焼かれ，器面には，黒茶褐色の艶のある釉をかけている。171は壺の口縁部である。口縁部は短い「L」字状で，口唇部は平坦である。胎土は濃茶褐色に焼かれ，器面には，黒茶褐色の釉をかけている。172は広口の小形壺である。口縁部は短い「く」字状で，底部は平底で若干中央部はあがっている。胎土は黒茶褐色に焼かれ，器面には，暗茶褐色の艶のある釉をかけ底部以外にかけている。裏側は，灰釉が見られる。

173～175は陶器質の器台とした。用途は不明である。器形としては円筒である。

173は茶褐色に焼けた胎土で，器面は黒茶褐色の釉をあけている。沈線は5本である。174は茶褐色に焼けた粘土で，器面は茶褐色の釉をかけている。沈線な6本である。174は茶褐色に焼けた胎土で，器面は茶褐色の釉をかけている。下部では釉垂れがみられる。沈線は下部に6本見られる。

(3) 黒薩摩（摺鉢・捏鉢）（176～192）

その中の178～181は底部の広い摺鉢である。

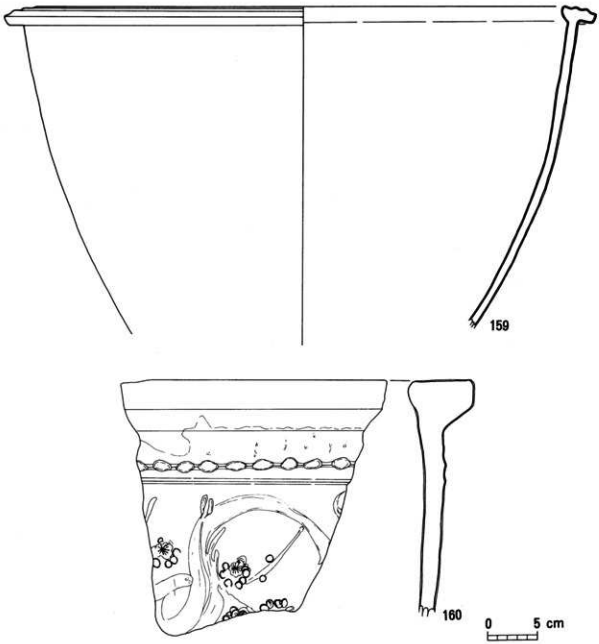
186は粘土が黒褐色焼け，釉は灰茶褐色である。口縁部は「L」字状で，注ぎ口がある。口縁直下には突帯がある。櫛目は4本で，上部は数が少なくなっている。197は胎土が暗茶褐色で，釉は黒茶褐色である。口縁部は「L」字状で，注ぎ口がある。口縁直下には突帯がある。内側の櫛目は3本である。178は粘土が茶褐色に焼け，釉は茶褐色である。口縁部は「L」字状で，注ぎ口があり，口唇部に3状の溝がある。内側の櫛目は6本である。179は粘土が茶褐色に焼け，釉は黒茶褐色である。口縁部は「T」字状で，注ぎ口が口唇部より下にある。内面の櫛目は6本である。底の櫛目は渦を巻いている。180は粘土が茶褐色に焼け，釉は茶褐色であるが，口唇部では暗茶褐色をしている。口縁部は「L」字状である。内面の櫛目は5本である。181は粘土が茶褐色に焼け，釉は黒茶褐色である。口縁部は「L」字状で，口縁直下には突帯がある。櫛目は6本で，上部は数が少なくなっている。

182～185は底部の広い摺鉢である。

182は胎土が茶褐色焼け，釉は外面が黒茶褐色で内面が茶褐色である。口縁部は「L」字状で，底部は若干上げ底である。櫛目は6本で幅が広い。183は粘土が茶褐色焼け，釉は外面が暗茶褐色で内面が茶褐色である。口縁部は「L」字状で，口唇部に3本の溝がある。底部は若干上げ底である。櫛目は7本で幅が広い。184は粘土が茶褐色焼け，釉は外面が黒褐色である。口縁部は「L」字状で口唇部は平坦である。底部は若干上げ底である。櫛目は9本で幅は普通である。185は胎土が赤茶褐色で，釉は外面が暗茶褐色で内面が茶褐色である。口縁部は「L」字状である。櫛目は6本で幅が広い。

186～192は捏鉢である。

186は口縁部が「L」字状である。底部は平底で見込みは浅い。釉は暗茶褐色の上に，灰緑色の釉をかけている。よって，口唇部と底部は地釉の暗茶褐色のが見られる。胴上部には沈線が2本ある。内面には艶があり，調整が良い。粘土は暗茶褐色に焼けている。187は口縁部が「L」字状である。底部は平底で見込みは浅い。釉は暗茶褐色の上に，黒褐色の釉をかけている。よって，口縁部と底部底面は地釉の暗茶褐色のが見られる。胴上部には沈線が3本ある。器面には艶があり，調整も良い。188は口縁部が「L」字状である。底部は平底で見込みは浅い。釉は茶褐色の上に，黒褐色の釉をかけている。胎土は暗茶褐色に焼けている。188は口縁部が「L」字状である。底部は平底で見込みは浅い。釉は茶褐色の上に，灰褐色の釉をかけている。粘土は茶褐色に焼けている。190は口縁部が「L」字状である。底部は平底で口込みは浅い。釉は茶褐色の釉をかけている。内面には轆轤調整痕跡が残っている。191は口縁部が

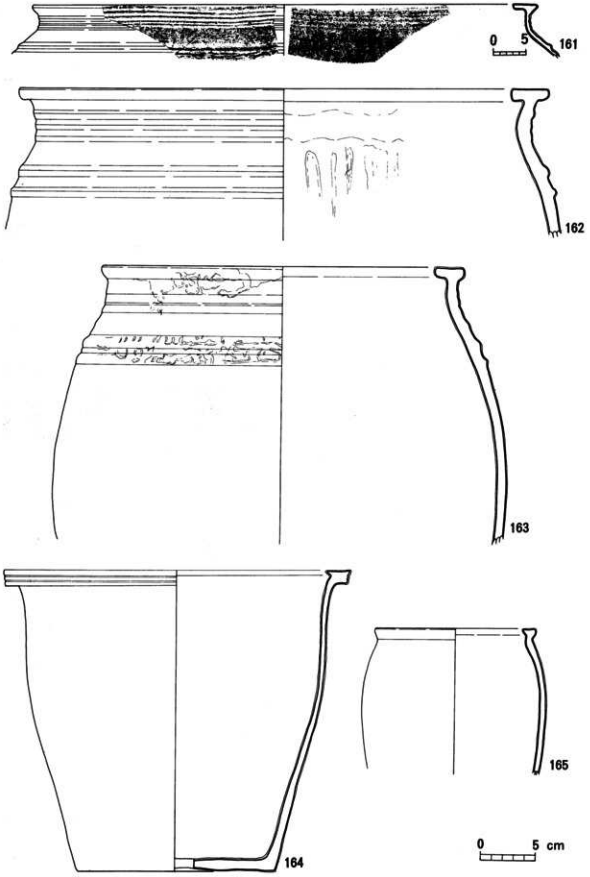


第15図　苗代川黒薩摩(2)焼

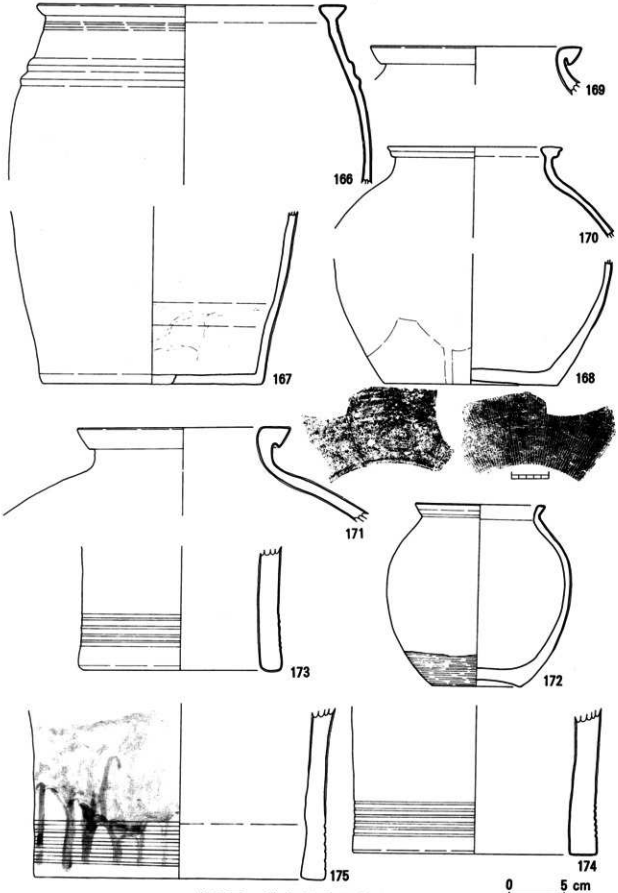
「L」字状である。底部は平底で見込みは浅い。釉は茶褐色の上に，灰褐色の釉をかけている。

(4)　黒薩摩（徳利）(193～199)

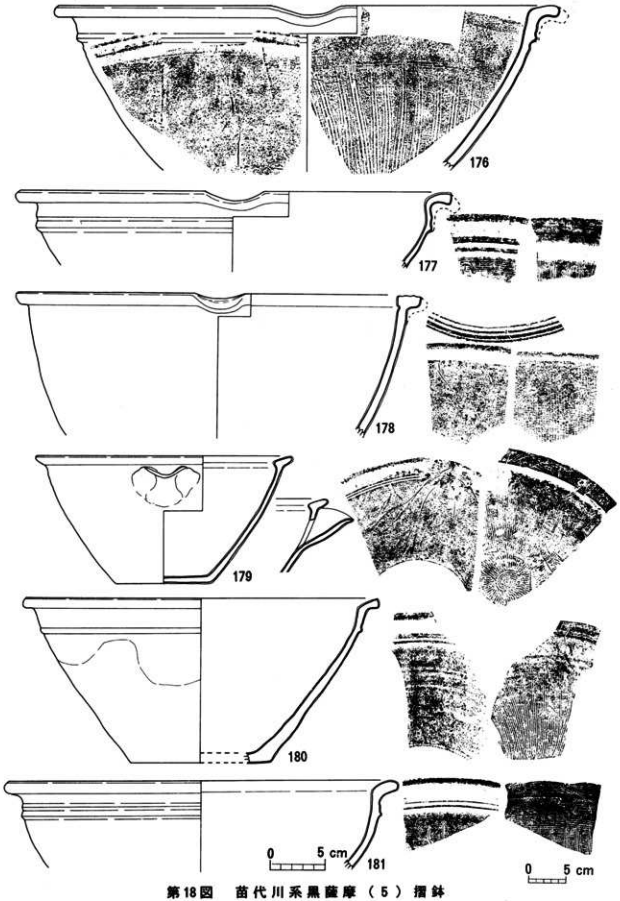
193は口縁部で，口唇部は丸味を持っている。胎土は黒褐色で，釉は暗茶褐色である。器面に白釉で「清」の上半分の字らしい部分がある。194口縁部で，口唇部は丸味を持っている。粘土は黒褐色で，釉は茶褐色である。器面の文字は不明である。195は口縁部で，外開きの口縁である。胎土は黒褐色で，釉も黒茶褐色である。196は口縁部で，外開きの口縁である。胎土は黒褐色で，釉も黒茶褐色である。197・198は頸部から底部である。底部は中央部が上げ底になって



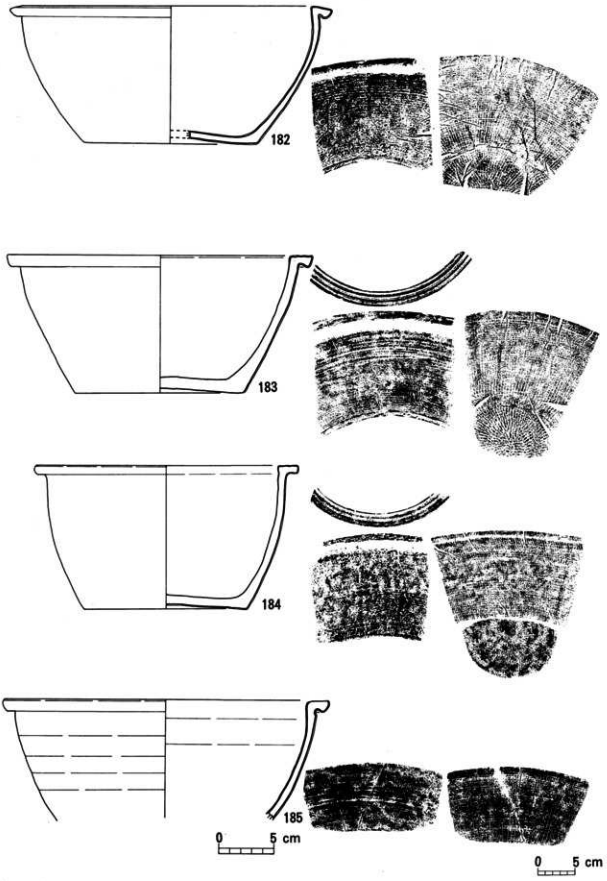
第16図　苗代川系黒薩摩（3）



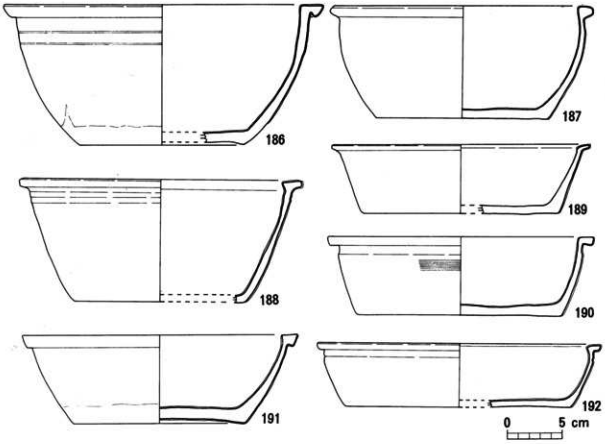
第17図　苗代川系黒薩摩（4）



第18図　苗代川系黒薩摩（5）擂鉢



第19図　苗代川系黒薩摩（6）鉢



第20図　苗代川黒薩摩(7)鉢

いる。粘土は黒褐色で，釉も黒茶褐色である。199は小形のものである。粘土は黒褐色で，釉は暗茶褐色である。裏面には釉がかかっていない。

5　その他の薩摩焼（200・212）

この類は，二之丸跡で焼かれた可能性の強いものである。古文書によれば，二之丸跡ではいろいろな実験をし，ガラス製造，焼き物作り等を行っている。この類はそれに近い。

200～203は壺で，204～208は杯，211・212が徳利である。胎土は茶褐色で，見える部分は黄褐色の釉をかけている。209・210は磁器である。

6　琉球系（213～222）

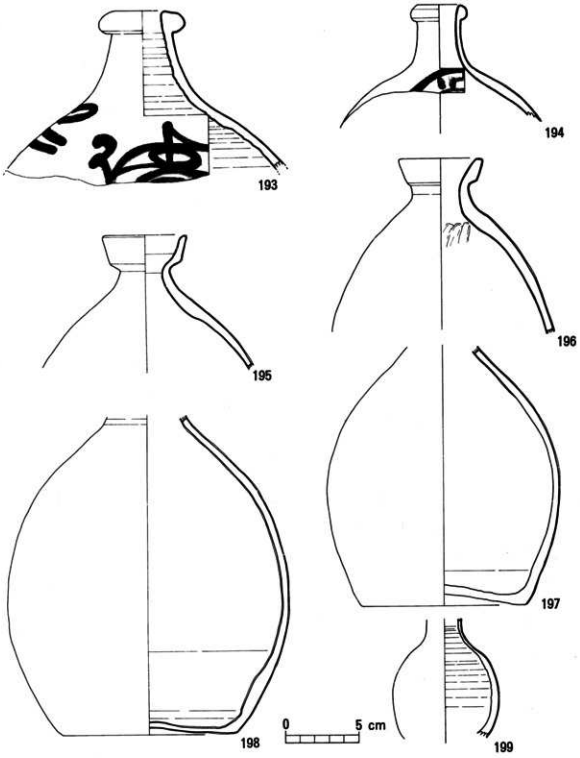
213～216は茶家の壺である。白釉に青と茶の釉を円形と星型の線上に施している。胎土は白色に焼けている。

217・218は無釉の胴長壺である。器面は荒く，暗茶褐色に焼け，表面に灰釉がかかっている。

219・220は甕の口縁部である。頸部は締まり，口唇部は丸味を持っている。肩部には紐通し用の飾りがある。器面は荒く，暗茶褐色に焼け，表面に灰釉がかかっている。

221は甕の底部である。底部の底は平底である。器面は荒く，暗茶褐色に焼け，表面に灰釉がかかっている。

222は鉢である。口縁部は「L」字形で器面に菊を貼り付けている。器面は茶褐色で，口縁部

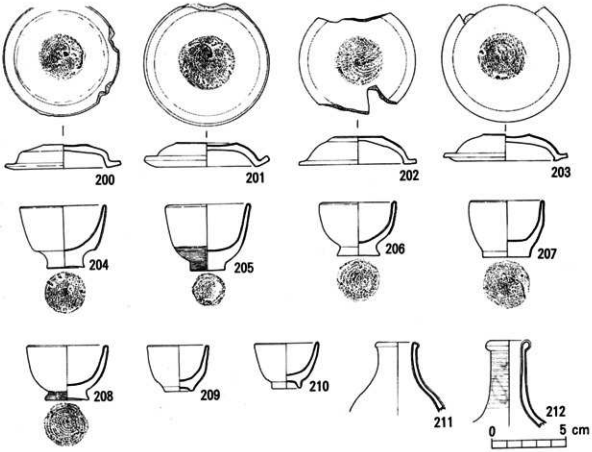


第21図　苗代川黒薩摩(8)徳利

だけがみられる。

7　肥前系（223～281）

223～225は陶器質の染付の碗である。灰色の陶土に灰色の釉を厚くかけ，その上に呉須で絵をかいている。**224**には東屋があり，**223**には山および口縁部の枠内にXの繋文を圏文している。



第22図　その他の薩摩

器面には貫入がみられる。全体として，釉が剝げたりしてできあがりが悪い。なお，畳み付けの部分には施釉されていない。

226は陶器質の染付の皿である。明茶褐色の粘土に白色の釉をかけ，呉須で線を描いて入る。見込みには花文を付け，掻落が見られる。全体として，釉が剝げていたり，施釉されていない部分が底部にあり，技術的に良くない。中国系の可能性が高い。

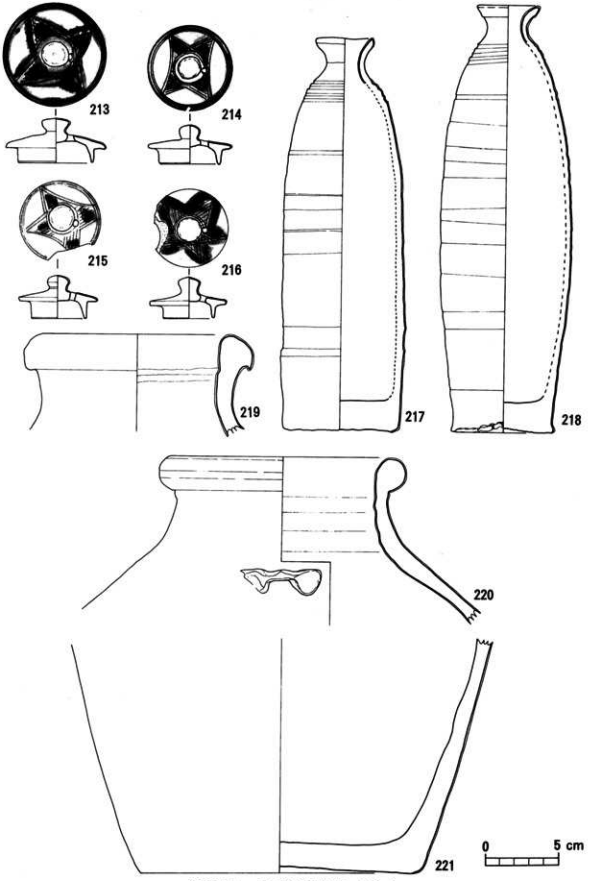
227は刷毛書き文様のある皿である。低い高台が付くもので，胎土は明赤茶褐色で，粒子がやや荒い。釉は茶褐色の釉の上に白釉で見込みの中央部から口縁部に向かって，波状に刷毛で描いている。見込みの部分は，直線的に描いている。なお，5か所の目跡がある。

228は灰色粘土に蕎麦釉を掛けたもので，釉は裏面において雑に掛けている。見込みには，目砂による目跡が5か所あり，目砂の粒子は大きい。

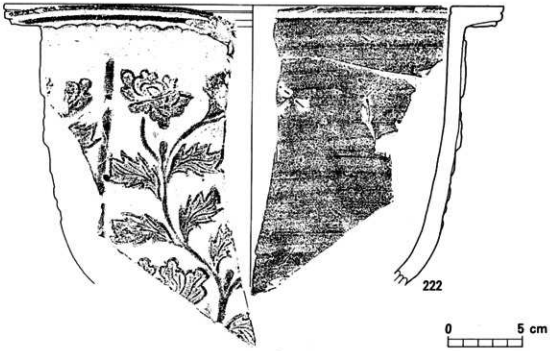
8　瀬戸・美濃系（230・244）

230・231は白色粘土に黄褐色釉を掛け，その上に濃い黄褐色釉で，渦文を描いているもので，器形は皿である。

232は灰色粘土に透明釉を掛けたもので，用途は蓋である。透明釉は縁と裏面には掛けて無い。



第23図　琉球系陶器（1）



第24図　琉球系陶器(2)

233は灰色粘土に灰褐色の釉を掛けた大鉢で，高台が付いている。見込みには，細かい目砂の目跡が見られる。

234は灰色胎土に灰茶褐色の釉を掛けた注鉢である。注ぎ口は口縁部より低い部分にあり，高台が底部に付いている。見込みには，荒い目砂の目跡が6か所見られる。釉は蕎麦釉に類似している。用途としては醤油の小出し用のものと考えられる。

235は口唇部が内側に張出し，低い高台を持つ器形である。胎土は灰色で口唇部と外側の垂直部に蕎麦釉が施釉され，細かい貫入が見られる。

236は白粘土の上に底部を除き黄色釉を塗り，茶褐色の釉で文様を口縁部近くに書いている。器面には細かい貫入が見られる。

237は植木鉢の類と思われる。**238**は火鉢の底部である。釉は青地に白の流れ釉がみられる。

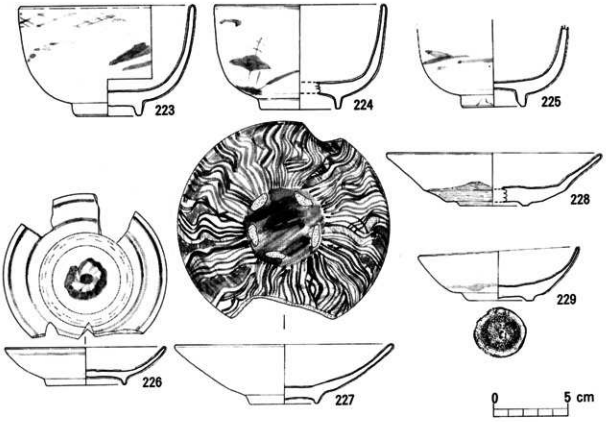
239・240は明治の時期のインク瓶である。これは，小学館の「サライ」によると，明治の初期に外国から輸入したインクを入れて販売した丸善のものに類似している。そして，「TOKYOU　MARUZEN」のマークのあるものもある。**242**は菱形の中に「堀」が刻まれている。**243**は他のものと違い，胎土が白く，密であり，前のものが茶褐色であるのに対し黄茶褐色である。よって輸入品の可能性が強い。

244は暗茶褐色をしたガスバーナーである。胎土は黄茶褐色である。

9　関西系（245～249）

これらは京焼の系統である。

245は急須で薄い暗茶褐色の上に白や赤等の釉によって絵がかかれている。



第25図　肥前系陶器

246は植木で茶褐色の胎土に青の釉をかけている。**247**・**248**は暗褐色の植木鉢で角張っている。**249**は黄茶褐色の角張った植木鉢である。

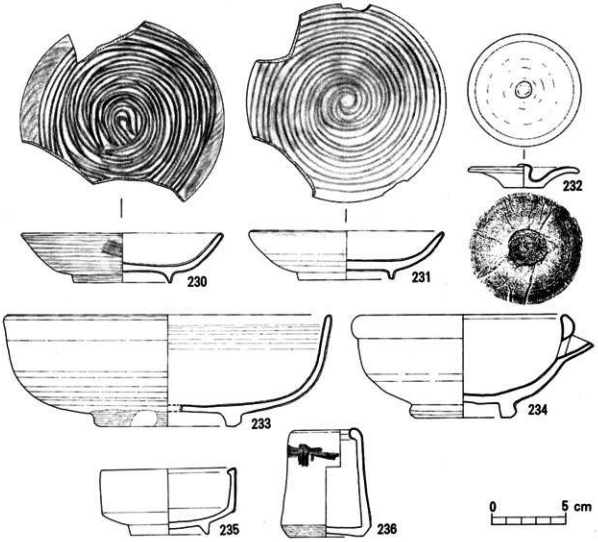
(10)　擂鉢（250～254）

この類は堅野系の他，備前系，唐津系等が出土している。

250は粒の荒い灰色の胎土で，器面には茶褐色の釉をかけている。口縁部の内側はやや肥厚させ，はみでないようにつくっている。鉢の内側はやや斜めの単線の刻みをいれて入る。**251**は，粒の荒い灰色の胎土で，器面外側には茶褐色の釉をかけている。口縁部は断面三角状で，内側には，凹みがあり，溝状になっている。鉢の内側は，７本の櫛状施文具で刻みを入れている。**252**は「く」字状の口縁部を持つもので，口縁部だけに茶褐色の釉をかけている。粘土は茶褐色である。鉢の内側は12本の櫛状施文具で刻みを入れている。肥前唐津系と思われる。**253**は，垂れ下がりのある「く」字状の口縁部を持つもので，器面には釉がかかってない。鉢の内側は11本以上の櫛状施文具で刻みを入れている。粘土は，紫色に焼けている。備前焼と思われる。**354**は底部である。粘土は茶褐色に焼け，やや荒い粘土である。鉢の内側は12本の櫛状施文具で刻みを入れている。切り離しは糸切りである。これは肥前唐津焼系と思われる。

(11)　土管（255・256）

二つとも外側に茶褐色の鉄釉をかけた土管である。結合部分はラッパ状に開き，漆喰が付着



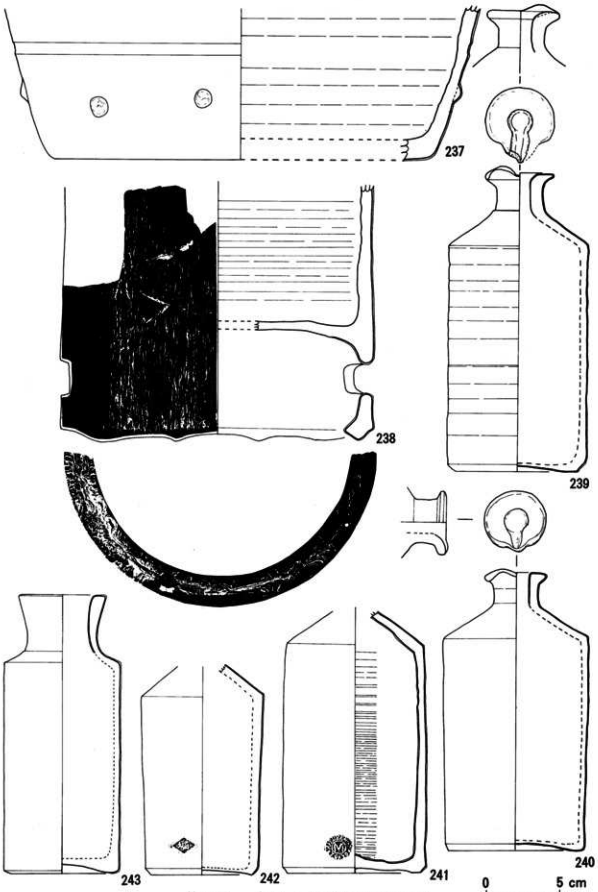
第26図　瀬戸・美濃系陶器(1)

している。

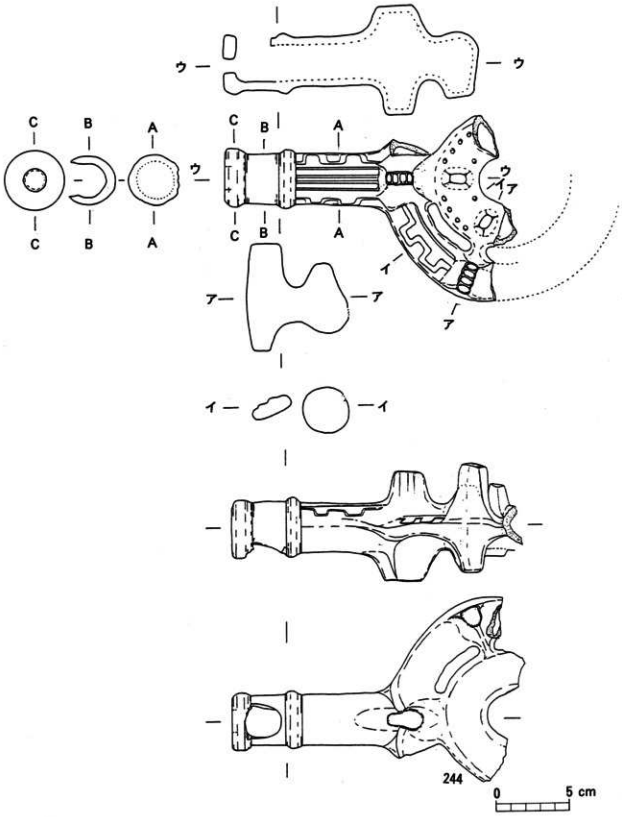
(12)　土垂・陶垂（257～268）

257～267が土垂である。太いものから細いものまで出ている。**268**は黒褐色の釉がかかっているもので，太くて大きい。

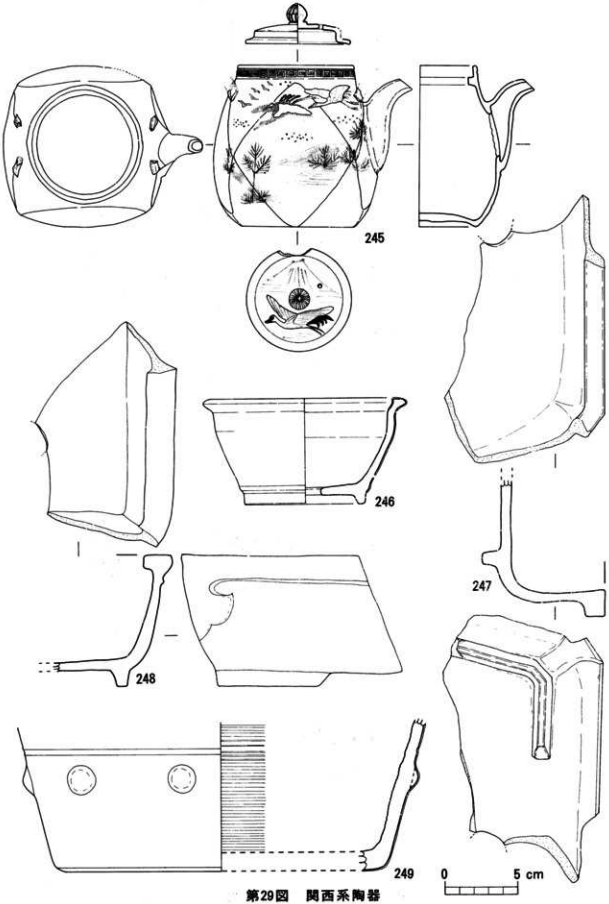
土垂は，小型であり，無釉である。胎土は茶褐色をしている。陶垂は外面に釉をかけているが，端はかかっていない。



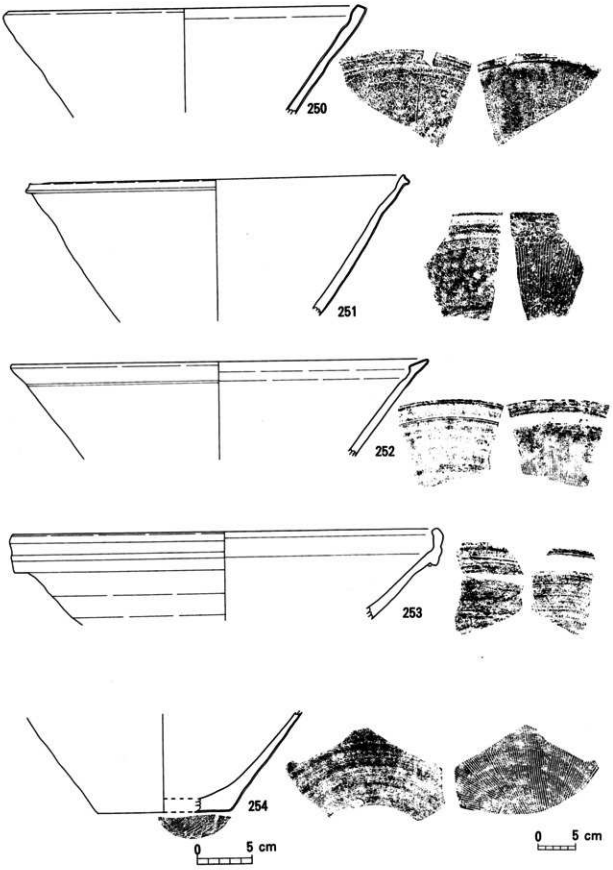
第27図　瀬戸・美濃系陶器（2）



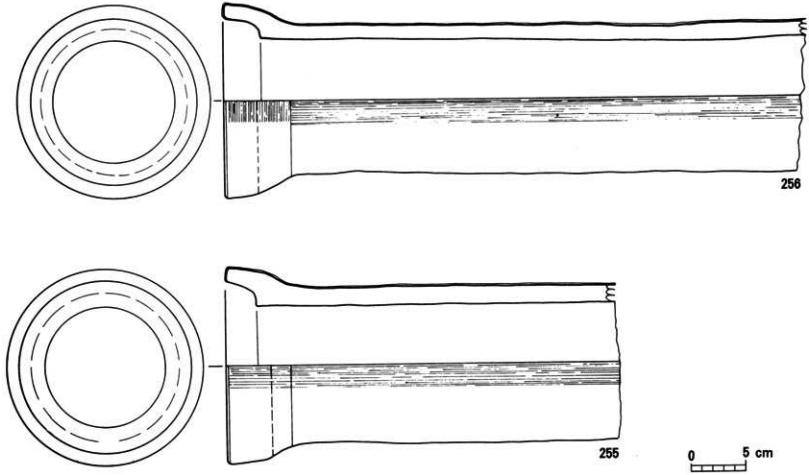
第28図　瀬戸・美濃系陶器（3）



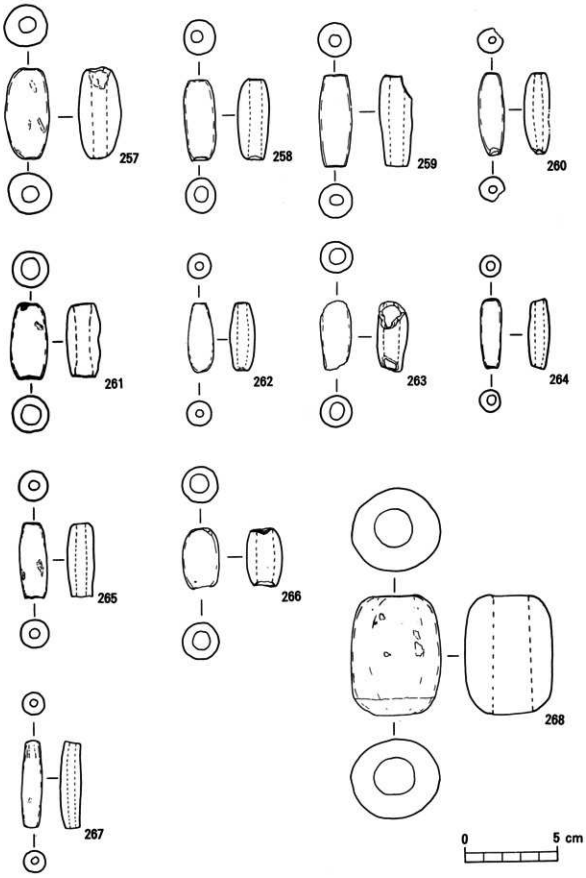
第29図　関西系陶器



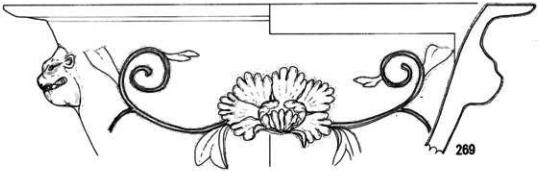
第30図　擂鉢

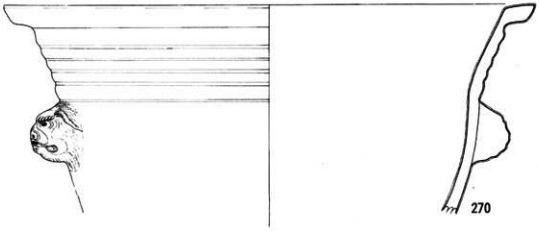


第31図　土管



第32図　土錘・陶錘





第33図　白磁（薩摩系）

第2節　磁器

1　白磁（白薩摩系）(269・270)

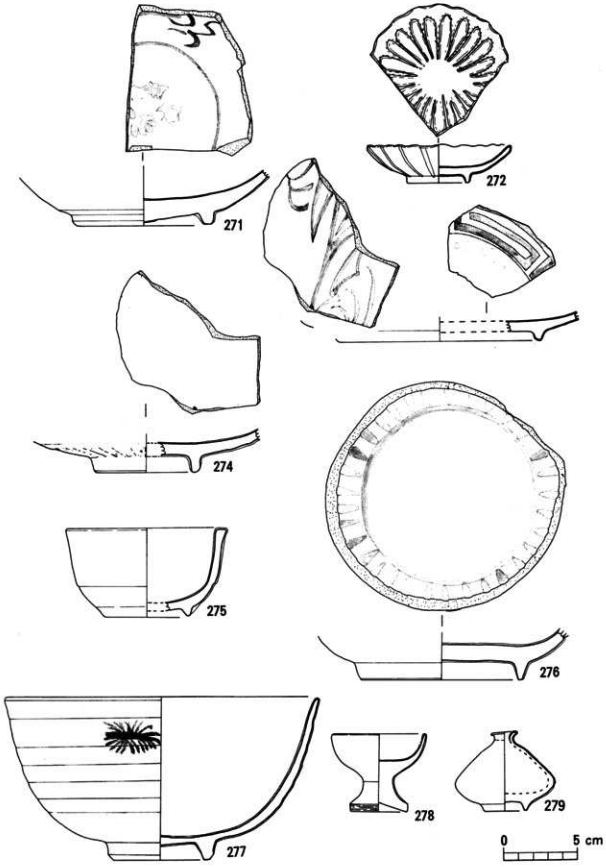
この類は，白薩摩の粘土でつくられているものである。

269は口縁部は「L」字状で，鉢の形態をしている。器面は牡丹と獅子を飾り付け，透明をかけている。**270**は**269**と同形で5本の突と獅子の飾である。

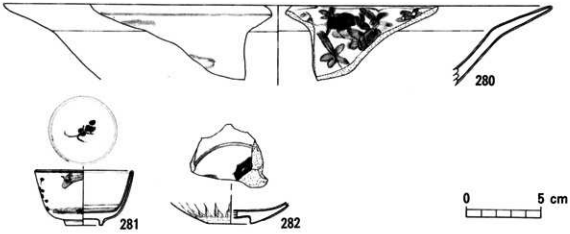
2　青磁・白磁（271～279)

この類は，青磁用の土でつくられたものである。

277は青磁の皿である。中国の竜泉窯系で見込みには花文，内側面には篦彫文がみられる。これは14C末から14C中葉のものと思われる。**272**は中国の白磁の皿である。見込みには連弁があり，口縁部は波状をしている。釉は青味が強い。これは16C中葉から17C前葉のものとおもわれる。**273**は肥前系の青磁の皿である。見込みには雷文帯を巡らし，高台内は蛇ノ目剝ぎがみられる。これは1650～70年代ものと思われる。**274**は肥前系の青磁の鉢で，内面に篦彫文があり，外面に連弁がみられる。これは1630～50年代ものと思われる。**275**は肥前系の青磁の鉢で，これは18C前半ものと思われる。高台内には釉剝ぎがみられる。**276**は肥前系の青磁の鉢で，これは



第34図　青磁・白磁



第35図　中国系染付

18C前半のものと思われる。内面には連弁がみられる。**277**は薩摩系の青磁の鉢で，これは17Cのものと思われる。外面には松文がみられる。**278・279**は平佐窯で白磁で仏壇器と油壺である。これは19Cのものと思われる。

3　染付（280～358）

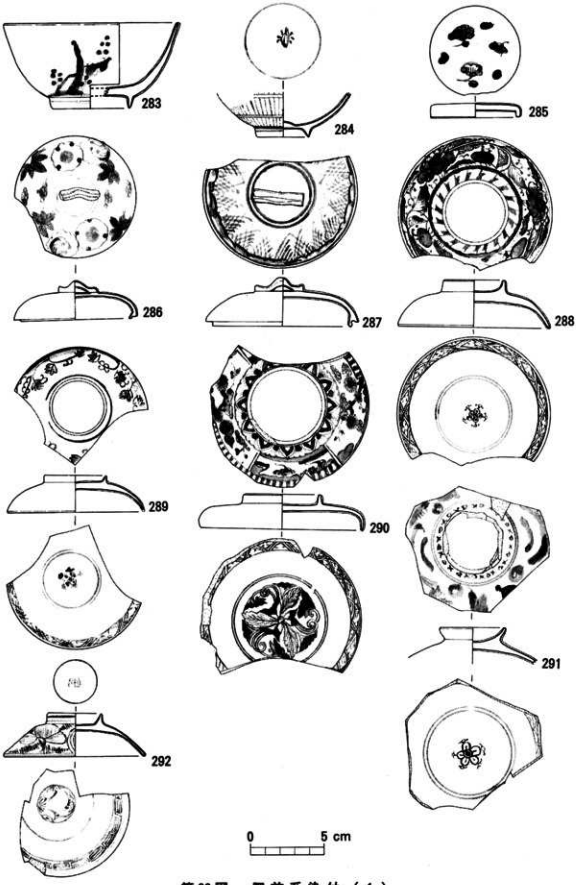
(1)　中国系（280～282）

280は福建・広東系で，染付（呉須手）大皿である。内側は区画内に花弁文がある。これは1590ー1630年代のものと思われる。**281**は景徳鎮窯系で染付小鉢である。外面は花弁文で，見込みにも花弁文がある。これは，1590～1630年代のものと思われる。高台内には釉が施されていない。**282**は染付皿で，碁笥底のものである。外面は芭蕉葉文がある。これは16C前葉から中葉のものと思われる。

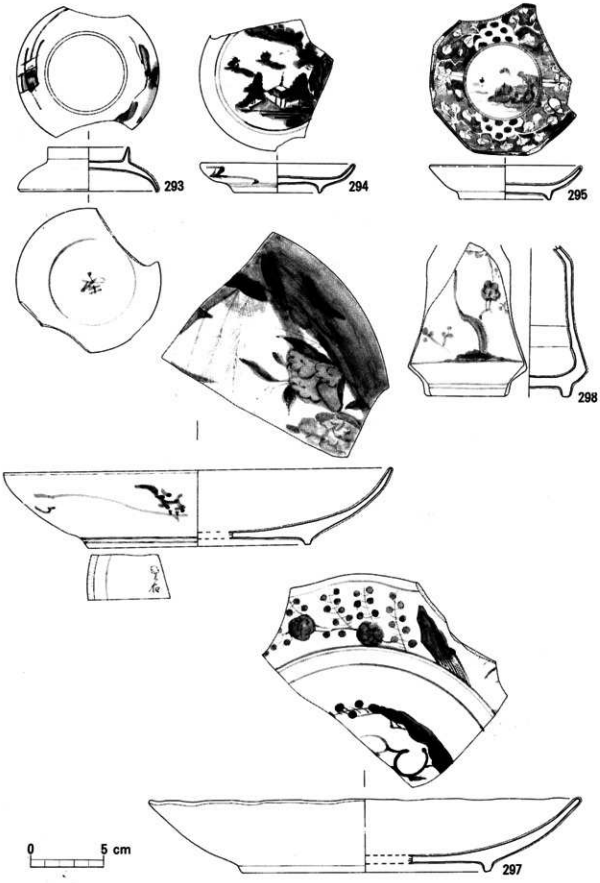
(2)　肥前系染付（283～309）

この類は一般に古伊万里といわれるものである。

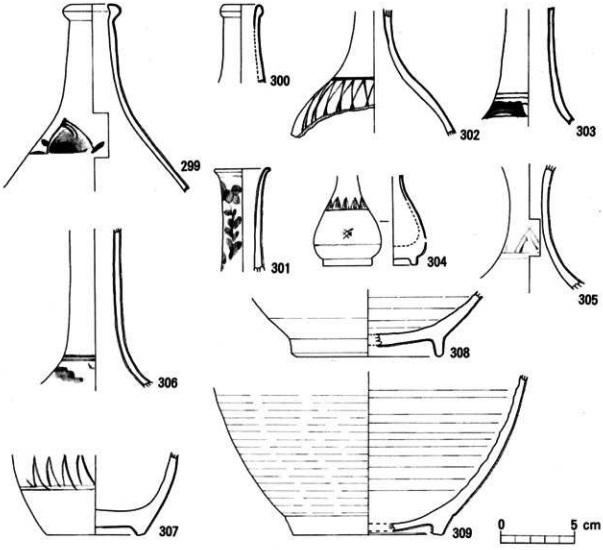
283は外面に梅樹文がある碗である。これは17C後半のものと思われる。**284**は外面に梵字文，見込みに昆虫文崩れがある碗である。これは1780～1810年代のものと思われる。**285**は外面に梅花文がある合子の蓋である。これは18C後半～19C前半のものと思われる。**286**は外面が雪輪と若松・梅花文の蓋物の蓋である。これは18Cものと思われる。**287**は外面に草文がある蓋物の蓋である。これは18C中葉～末のものと思われる。**288**は外面に牡丹文，見込みに五弁花文がある蓋である。**289**は外面にのし唐草文，見込みに五弁花文がある蓋である。これは18Cものと思われる。**290**は外面に区画内に松梅文，見込みに花文がある蓋である。これは18C後半のものと思われる。**291**は外面に○×文，見込みに五弁花文がある蓋物の蓋である。これは18C後半のものと思われる。**292**は外面に瓜文，見込みに松竹梅文がある蓋物の蓋である。これは1820ー60年代のものと思われる。**293**は見込みに昆虫文崩れがある碗の蓋である。これは，広東形で19C前半の時期と思われる。**294**は外面に折松葉文，見込みに山水文がある手塩皿である。これは18Cものと思われる。**295**は側面に人物に果木文，見込みに山水文がある手塩皿である。これは



第36図　肥前系染付（1）



第37図　肥前系染付（2）

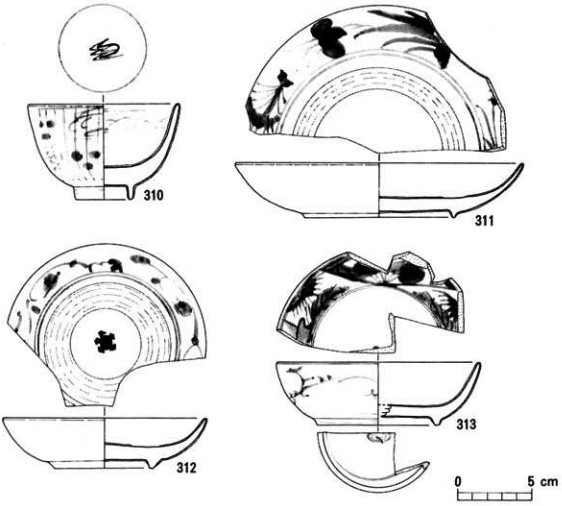


第38図　肥前系染付(3)

型打成形で18Cものと思われる。296は側面に唐草文，見込みに竹・花文のある大型皿である。高台内側にはハリ支えがあり，「知」の字が見える。これは18C後半～19C前半のものと思われる。279は側面に梅文，見込みに松竹梅文のある大型皿である。高台内側にはハリ支えがある。窯としては白化粧があるので表田山が考えられる。時期としては19C後半が考えられる。298は瓶である。外面は梅樹文である。時期としては18Cが考えられる。

299～309は徳利である。

299は明るい呉須で草花文が見られる。ここでは肥前系にしたが，薩摩の南京窯の可能性を持っている。300は口縁である。301は花弁文である。302は網目文で，時期としては1630～60年代と思われる。303は明るい呉須で山水文が見られる。ここでは肥前系にしたが，薩摩の南京窯の可能性を持っている。304は小徳利で肩に連弁文があり，時期としては1630～50年代と思われる。305は暗い呉須で連弁文が見られる。ここでは肥前系にしたが，薩摩の竪野窯の可能性を持っている。306は山水文で1820～1860年代と思われる。307は底部で網目文が見られる。時期として



第39図　佐波見窯染付

は1630～60年代と思われる。**308・309**は底部である。

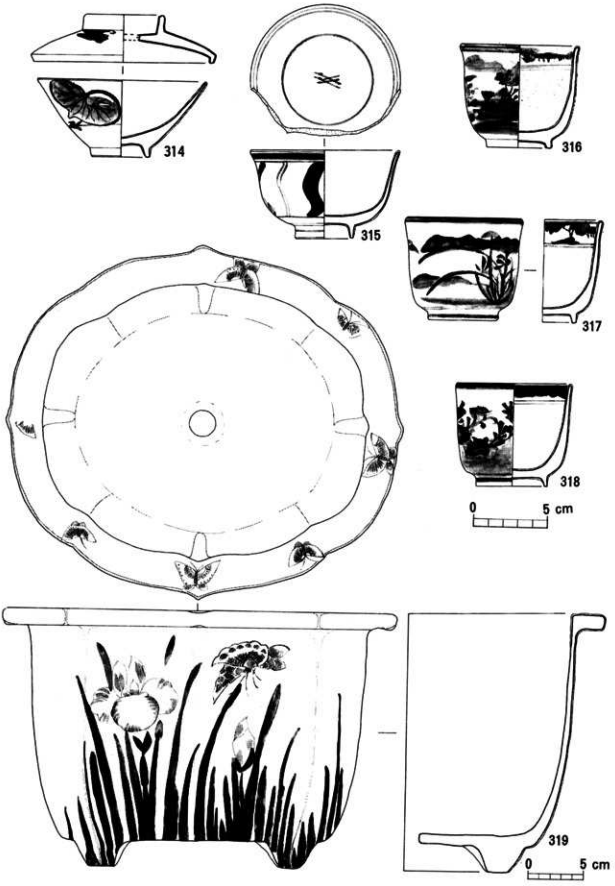
(3)　肥前佐波見系窯（310～313）

310は外面に縦称文のある碗である。1820～60年代のものと思われる。器面の色はやや褐色がかっている。**311**は見込みに五弁花文のコンニャク印判と，側面にアヤメ文があり，掻落しがある。18C中葉～末の時期が考えられる。**312**は見込みに五弁花文のコンニャク印判と，側面に唐草文があり，掻落がある。18C中葉～後半の時期が考えられる。**313**は見込みに五弁花文のコンニャク印判と，側面に扇の竹草文があり，外面に唐草文がある。18C後半の時期が考えられる。

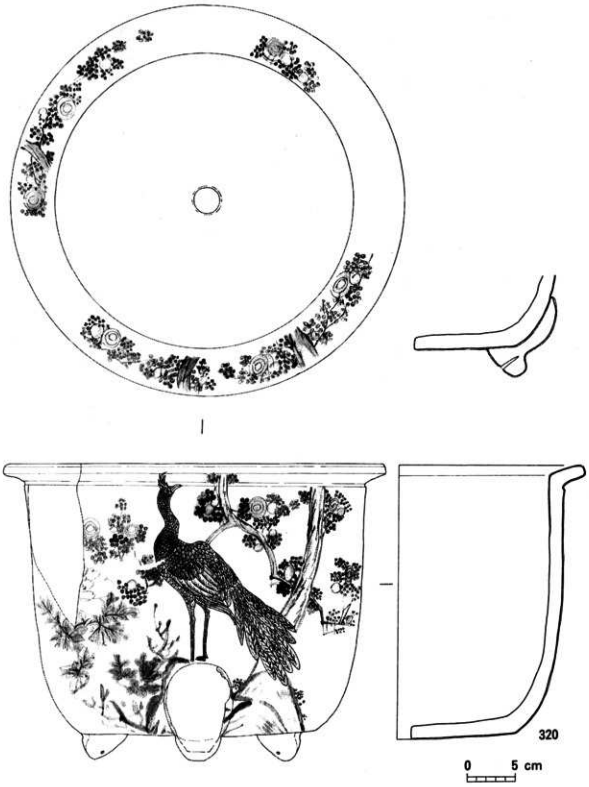
(4)　明治以降の肥前系（314～326）

この類は，明治時代から大正時代にかけてのもので，肥前地区で生産されたものである。

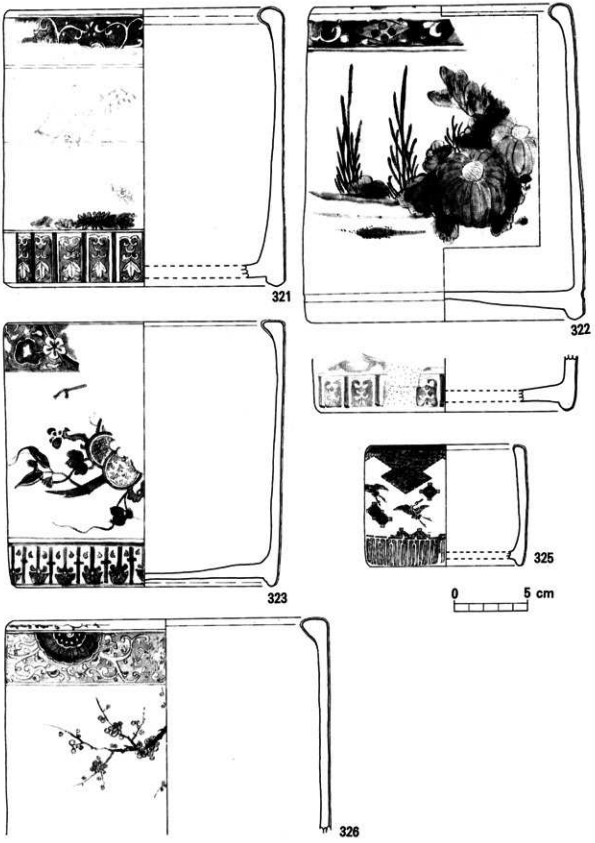
314は大正時代の碗である。その上は蓋である。**315**は明治時代の碗である。口縁部は端反りで，外面は捻花文が見られる。**316**は明治時代の湯飲用の碗である。口縁部は端反りで，外面は草花文が見られる。**317**は明治時代の湯飲用の$_{\text{ゆの}}$である。口縁部は端反りで，外面はランに蝶文



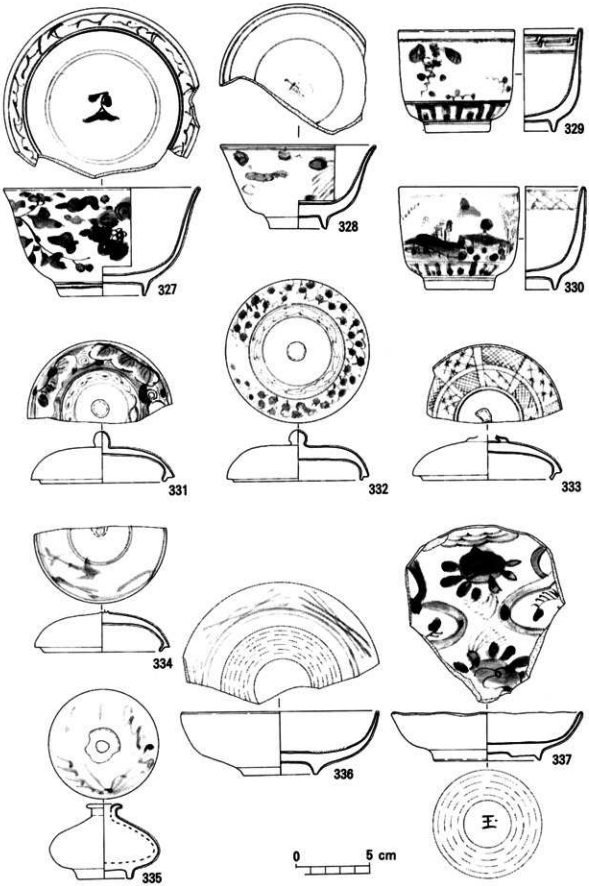
第40図　明治以降の肥前系染付（1）



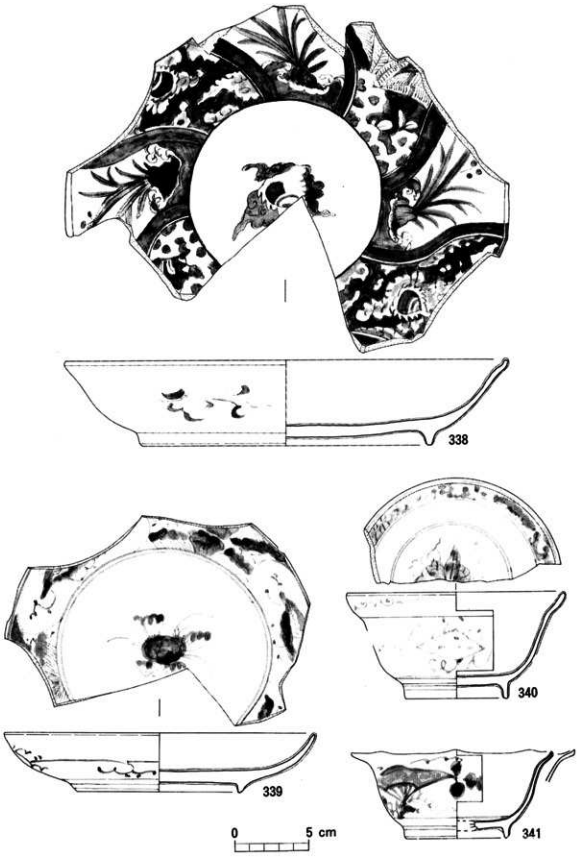
第41図　明治以降の肥前系染付（２）



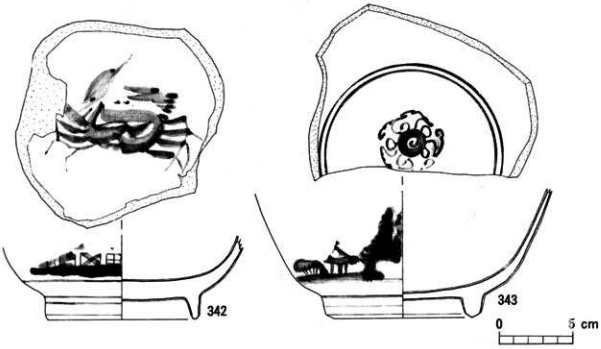
第42図　明治以降の肥前系染付（3）



第43図　平佐系染付（1）



第44図　平佐系染付（２）



第45図　平佐系染付(3)

が見られる。**318**は明治時代の湯飲用の碗である。口縁部は端反りで，外面は菊に岩文が見られる。**319**は明治後半から大正の時期の植木鉢である。口縁部は「L」字形で4弁に分けられている。外器面は釉下彩で茶色の蝶と紫のアヤメが描かれて，その後ろには吹墨が見られる。足は4個である。**320**は明治後半から大正の時期の植木鉢である。口縁部は「L」字形で，外器面は胴版転写の孔雀とアヤメと牡丹と椿が描かれている。足は3個である。

321～325は火鉢の類である。器形は円筒形で底部が上げ底になっている。時期としては明治から大正のものである。**322**以外は銅版転写である。絵は**325**以外は花弁文である。なお**325**は鳥が描かれている。**326**は梅木が描かれている。

(5)　平佐系染付（327～353）

この類は，肥前系の中の薩摩の平佐窯のものである。

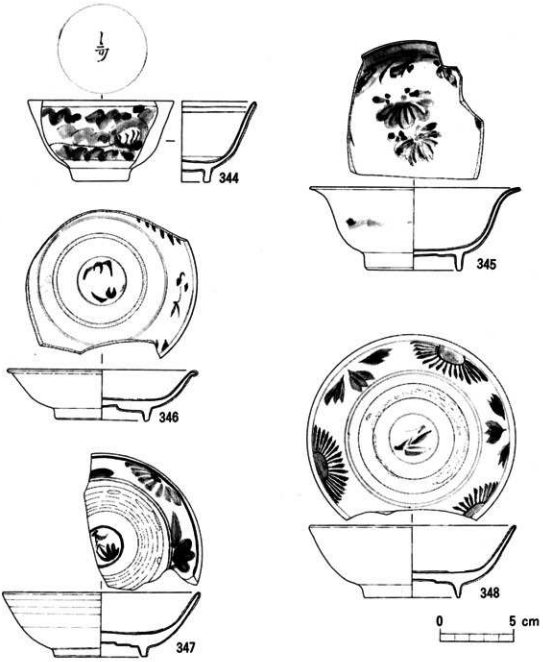
327は口縁部が端反りで，外面が花唐草文，見込みが花弁文のある碗である。これは1820～60年代のものと思われる。やや大形である。**328**は口縁部が端反りで，外面が菊つる草文，見込みが寿字のある碗である。これは1820～60年代のものと思われる。

329・330は湯飲用碗である。外面は**329**がつる草文と連弁文，**330**が山水文と連弁文である。これらは1820～60年代のものと思われる。

331・334は蓋物の蓋である。外面は，**331**がつる草文，**332**が唐草文，**333**が格子に幾何学文。**334**か草文を描いている。年代は19Cのもので，**333**が1860年代と思われる。

335は油壺である。外器面には草文が見られ，19Cのものと思われる。

336・337は皿である。**336**は見込みに蛇ノ目の釉剝ぎがあり，内面に格子目文がある。19C前半のものと思われる。**337**は型打成形の皿で，内面は草花文がある。底部は蛇ノ目凹形高台で「

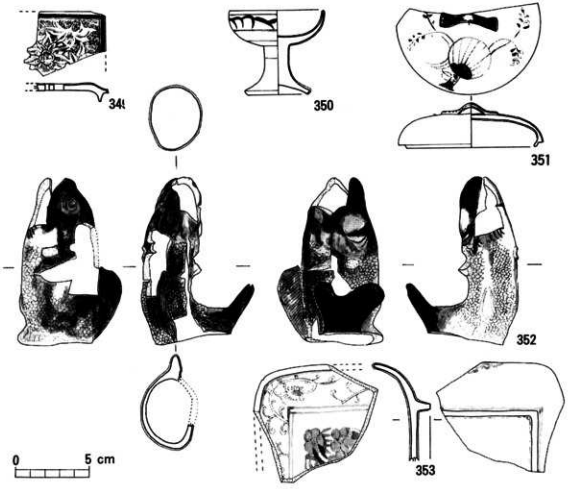


第46図　苗代川系染付

「玉」の字が焼き上がった後から掘り込んまれている。

338・339は大皿である。**338**は型打成形の皿である。絵柄は見込みに火焔宝珠文と周りに草花文，外面にも火焔宝珠文を施している。時期としては19Cと思われる。**339**は見込みに牡丹文，側面に憲絵宝文，外面に唐草文を施すものである。時期としては18C末～幕末と思われる。

340～343は鉢である。**340**は見込みに花文と内側につる草文，外面に宝文を施したものである。時期としては19Cと思われる。**431**は型打成形の鉢であり，外面に宝文を施したものである。時期としては19Cと思われる。**342**は見込みにカニと，外面に山水文を施したものである。時期と



第47図　肥前系色絵

しては19Cと思われる。**343**は見込みに花文と，外面に山水文を施したものである。時期としては19Cと思われる。

(6)　苗代川系染付（344～348）

この類は，薩摩の苗代川の窯でつくられたものである。器面は明るい呉須で絵を書いている。

344は端反りの碗で，見込みに寿文，外面に唐草文を施ものである。また，見込みには足付ハマが熔着している。**345**は鉢である。見込みには草花文があり，底部は蛇ノ目凹形高台である。時期としては明治と思われる。

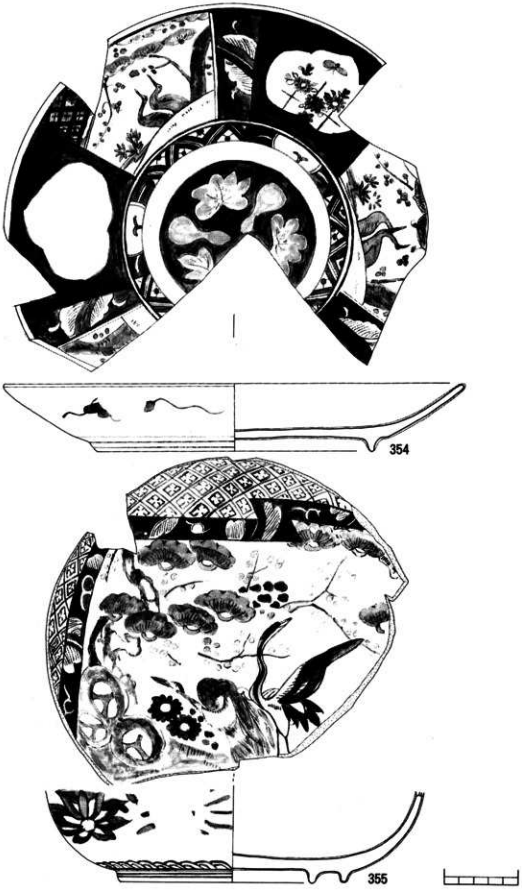
346～348は深皿である。内側は菊文で，見込みに蛇ノ目釉剝ぎがあり，高台は蛇ノ目凹形高台である。時期としては明治と思われる。

3　色絵（349～364）

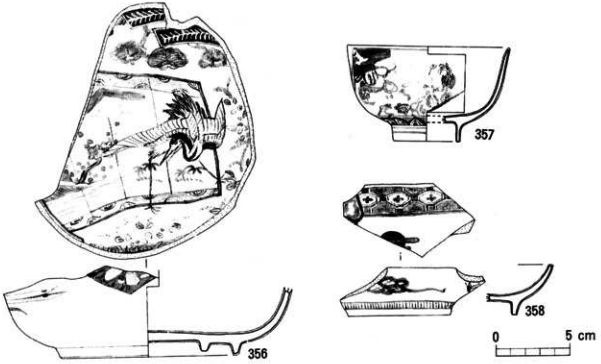
(1)　肥前系（349～353）

この類は古伊万里と言われるものである。

349は肥前系有田で，色絵蓋物の蓋である。文様は型で牡丹唐草を表し，牡丹と縁は茶色の釉を施している。また，牡丹の周りは透かしがある。1650～70年代のものと思われる。**350**はいろ絵仏飯器である。文様は赤絵で草花文である。18C末～幕末の時期である。**351**は色絵蓋物の蓋



第48図　明治以降の肥前系色絵（1）



第49図　明治以降の肥前系赤絵(2)

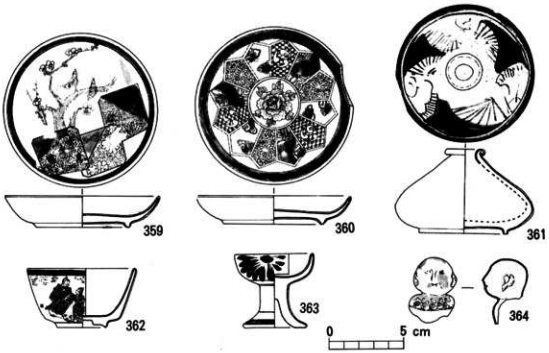
である。文様は赤絵で草花文である。時期は18Cと思われる。**352**は肥前系有田で銹釉掛分鯉置物である。これは透明釉と銹釉を掛け分けたものである。技法は型成形で，時期は17Cと思われる。**353**は色絵角皿である。技法は矛切細工で，見込みには松竹梅文を染め付けている。時期は18Cと思われる。

(2)　明治以降の肥前系（354～358）

354は色絵大皿である。見込みには瓢箪と葉文，内面には6区画の中に窓から見える蝶と菊花文，および鶴と松と草花文が3対みられる。時期は明治から大正にかけてと思われる。**355**は色絵大鉢である。内面には梅・松・鶴等が描かれている。底部は二重高台である。時期は明治から大正にかけてと思われる。**356**は色絵鉢である。内面には梅・松・鶴・屏風等が描かれている。底部は二重高台である。時期は明治から大正にかけてと思われる。**357**は色絵碗である。 区画のある柄で，連弁・花弁文がみられる。器形は若干端反りである。時期は明治から大正にかけてと思われる。**358**は色絵角皿である。器面は亀甲文がみられ，底部は貼付高台である。時期は明治から大正にかけてと思われる。

(3)　瀬戸・美濃系（359～364）

359・360は大正以降の皿で，赤絵に青を一部使用している。**361**は色絵瓶で型作りの油壺である。色は赤と黒で，扇が描かれている。時期は明治と思われる。**362**は色絵坏で赤が基本の毛毬をしている絵である。他に，青・黒・金の色がみられる。底部は蛇ノ目底である。時期は大正以降である。**363**は色絵仏飯器で，菊の赤絵である。時期は幕末から明治の頃と思われる。**364**



第50図　明治以降の瀬戸美濃系赤絵

は色絵人形で赤と緑で彩色されている。時期は明治以降と思われる。

第3節　土師器（365～414）

この類は土師器で，皿(365～391)と坏(392～403)と鍋(404～409)に分けられる。

皿はさらに，底部の径に比べ口縁部が底部の径に近いもので，坏は差があるものである。

前者は，365～391で，後者は392～403である。

全て，糸切りの底で，板に乗せた痕跡があり，丁寧なロクロ調整痕が見られる。365は器面が黒色をしている。368・369・370・371は燈明皿に使用した黒い部分が見られる。また，379には中央に，穴が見られる。

この内に，380～385は小形の土器である。器形では380～385，386～388，390に分けられる。それは，380～385が深みのあるもので，386～383は深みのないもので，391はより深いものである。

用途としては，381・383・384・385が燈明皿として使用されている。

これらは口縁部に黒色のススが付着した跡がみられる。

392～403は口径と底径との差があるものである。

この類は，比較的薄くできている。全て，糸きりの底でを板に乗せた痕跡があり，丁寧なロクロ調整痕が見られる。

これらの中で，398には孔があり，403には赤褐色の塗料が付いている。

鍋は404～414である。

この中で，鍋の本体部は404～408で，409～414が取っ手の部分である。

404・405は底部の部分から丸味を持ち，立ち上がっている。406・407は底部の部分から角張

って，立ち上がっている。これらは口径と底径との差がないものである。

408は口径と底径との差があるものである。

409から414までが取っ手である。

409・412・413は丁寧に作り，広くて大きい。そして，刻印が見られる。410・411・414は篦で調整した跡が残っている。

また，墨書が412・413に書かれているが，薄くて読める状態ではない。よって墨書は削除することにした。

第4節　瓦器（415～434）

415は大鉢である。口縁部は締まり，肩部に突帯が見られる。器面は灰色であるが，外器面は剝げて茶色に変色している。

416は大形の浅鉢である。色は灰茶褐色である。器面は外側が横位と縦位で内側は横位に刷毛で器面調整している。

417・418・419は灰色の薄手のもので，脚台である。

417は高い脚台で丸味の締まりがあり，417は低い台で折れ線でくびれている器形をしている。上部には印版が見られる。419の器形は良くわからない。

これらは，火舎の類と思われる。

420～433は厚手の火舎の類である。

420～443は大形のもので，423は小形のものである。420・421はコンロ内部に，釜を止める突起が付いている。420・432・433はコンロの上面に突起が付いている。425はコンロの底部で脚が3つ付いている。421は七つ穴がある炭受けであり，一つの穴が約2cmである。426には，「勤業課御試験済 筑前博多産物」の刻印がある。422・425の内側中間部には，427を受ける断面三角状の突帯が巡らしてある。これらは七厘と思われる。

428は釜戸と思われる。脚が付き，上部は，二次焼があり燈茶褐色をしている。器面は6本の櫛で沈線をかいている。

429は底部の脚である。器面は白茶色で中が黒色をしている。

430～433は灰色をした角張ったものである。430・432・433は上部で，中は円形に整形されている。431は下部で，脚と窓がある。これらの，器面には「神様・菊・長左エ門」が見られる。

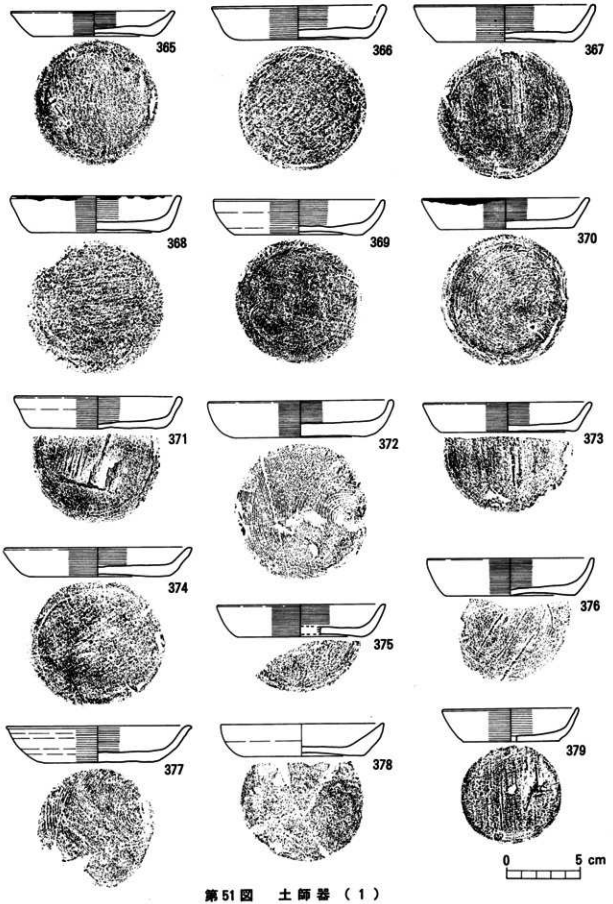
434は台付き皿の類と思われる。色は茶褐色で質が良い。皿の中央部は一段低くなり，脚部は円形の透かしがある。

第5節　瓦

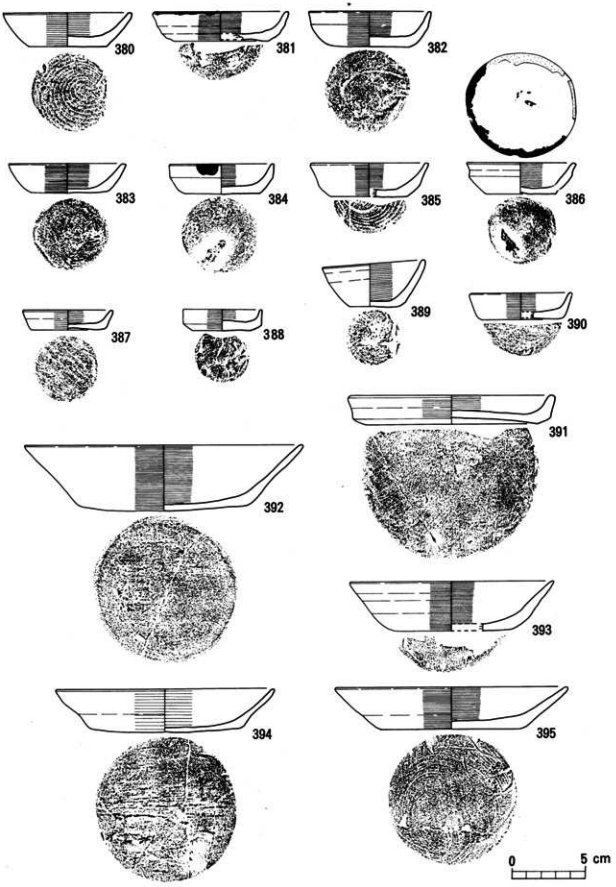
1　軒丸瓦（435～454）

435・436～438は牡丹文の瓦である。径は435・437・438が18cmで，436が16cmである。なお，軒丸瓦の435・436の背には釘通し穴がみられる。製作技術としては436が丸瓦の裏に布が使われている。

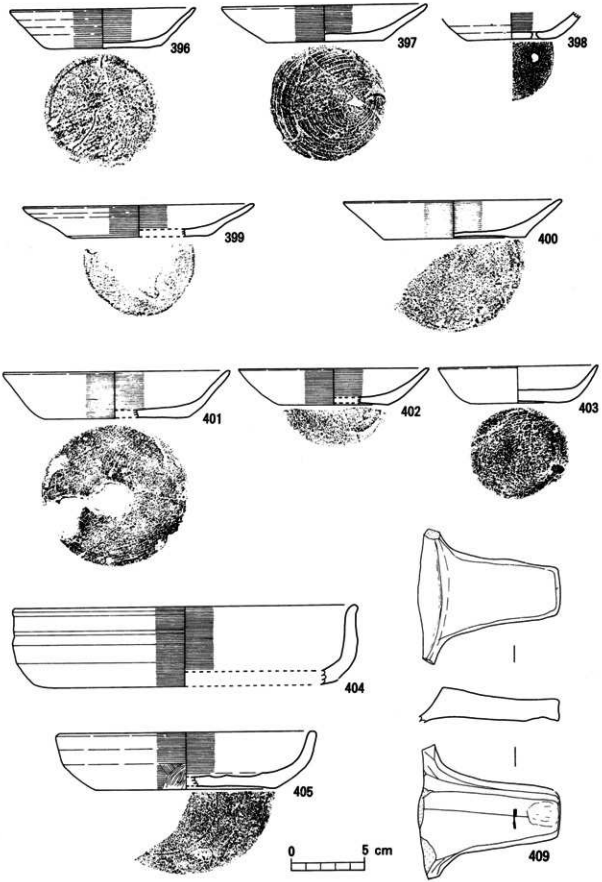
442～453は牡丹文の瓦である。径は439・440が19cm，441が16cmである。この中の441の牡丹



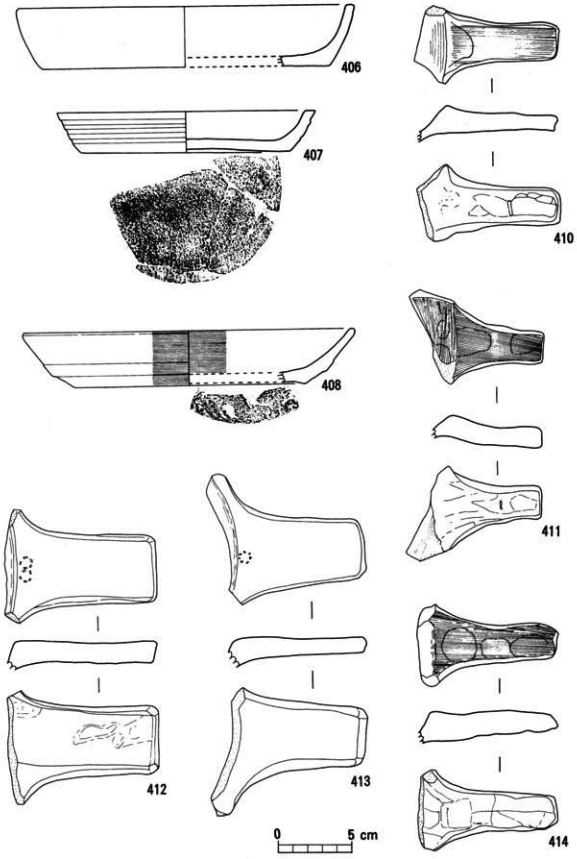
第51図　土師器（1）


380
381
382
383
384
385
386
387
388
389
390
391
392
393
394
395
0
5 cm

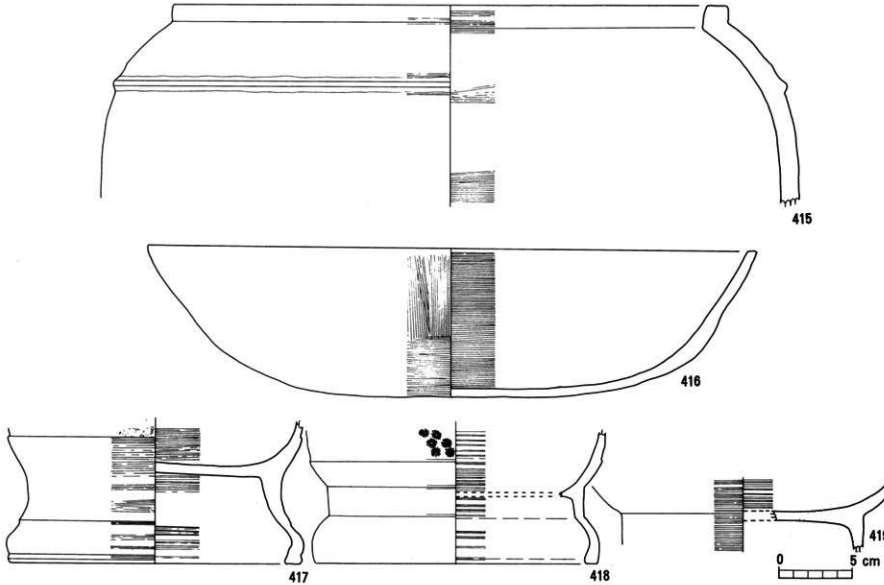
第52図　土師器（2）



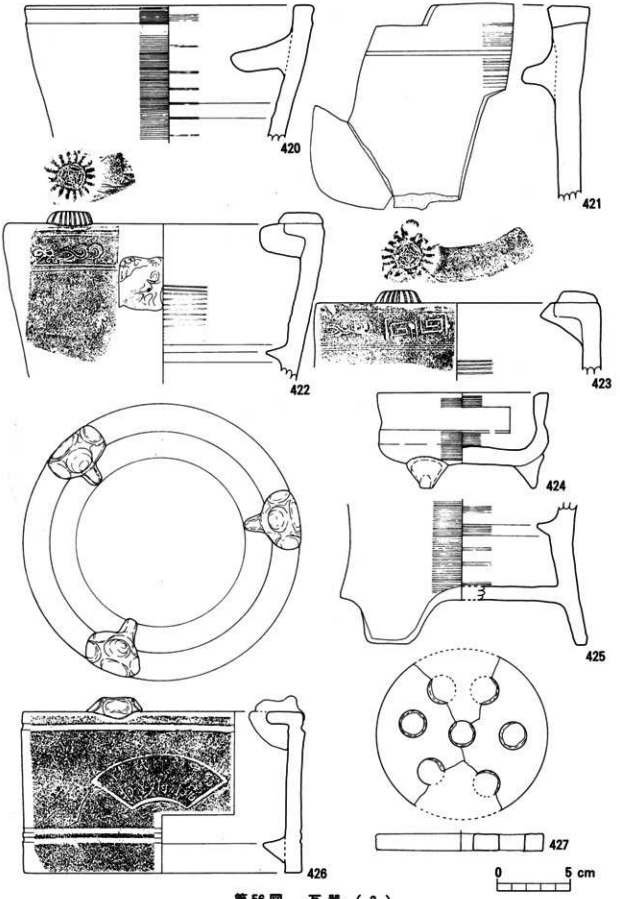
第53図　土師器（3）



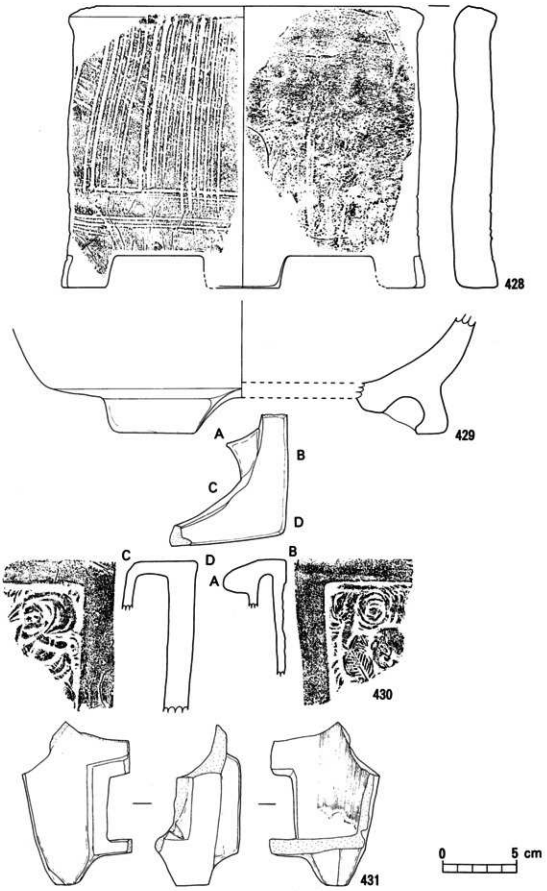
第54図　土師器（4）



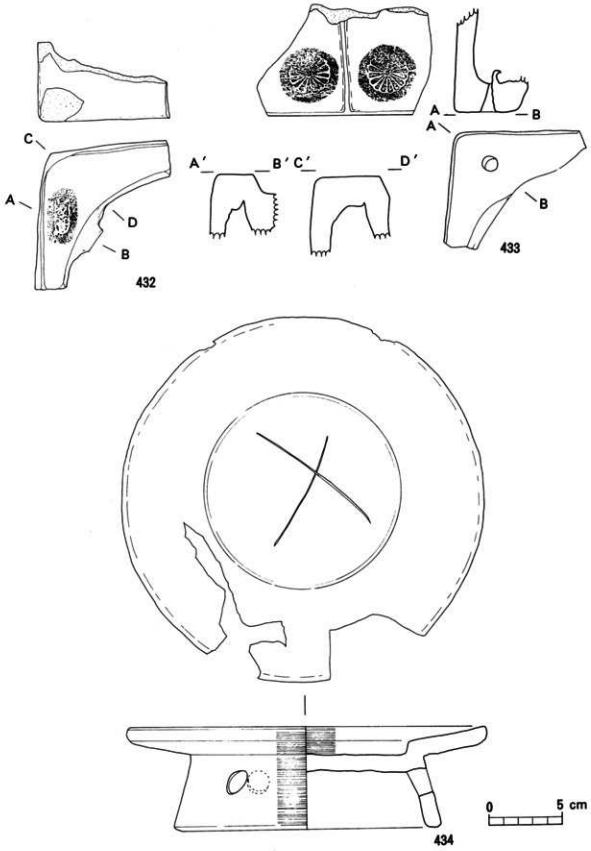
第55図　瓦器（1）



第56図　瓦器（2）



第57図　瓦器（3）



第58図　瓦器（4）

文は前２つと異なる。

442～453は連朱文と巴文の組み合わせである。巴文の形態で巻き方向は**442・443**が太くて右巻きで，**444～451**は細くて右巻きである。**452・453**は細くて左巻きである。なお，連朱文は８・12・15・16個がある。また，**451**には背に窯印がみられる。

径は，**442**が17cm，**443**が17cm，**444**が15cm，**445**が16cm，**446**が16cm，**447**が16cm，**448**が16cm，**449**が14cm，**459**が14cm，**451**が17cm，**452**が15cmである。

317・318は菊花文である。径は**317**が15cm，**318**が15cmである。

2　鳥衾瓦（455・456）

上部が尖り，下部の裏側も後ろに尖っているものである。共に連朱文と巴文の組み合わせである。連朱文は12と16個で，径は13×11cmである。

3　軒込瓦（457～567）

差し込んで使用する瓦である。これらは，菊花文で11弁の花びらである。径は９cmで，奥行きは12cmである。

4　丸瓦（468～471）

468は胴幅14cm，玉縁2.5cmで，表面にたたき目があり，裏面には布目がみられる。

469・470・471は胴長31cm，胴幅16cm，玉縁3.5cm，高さ７cmの大きさである。裏面は板の痕跡と，篦調整痕がある。**470**の表面の背には「大」の刻印がある。

5　軒平瓦（472～476）

472～475は垂れ長が７cmの唐草文である。文様の深みもあり，幅は30cmと思われる。

476は垂れ長が６cmの唐草文である。幅は30cmと思われる。

477は垂れ長が５cmの唐草文である。幅は30cmである。

6　平瓦（478～482）

これらの瓦は，幅約23cm，長さ約27cm，谷の深さ約２cmの大きさである。そして，刻印には「吉」「高」のものがある。また，これらに言える事は二次的に焼けた為，赤褐色に変化している。

7　桟軒平瓦（483～502）

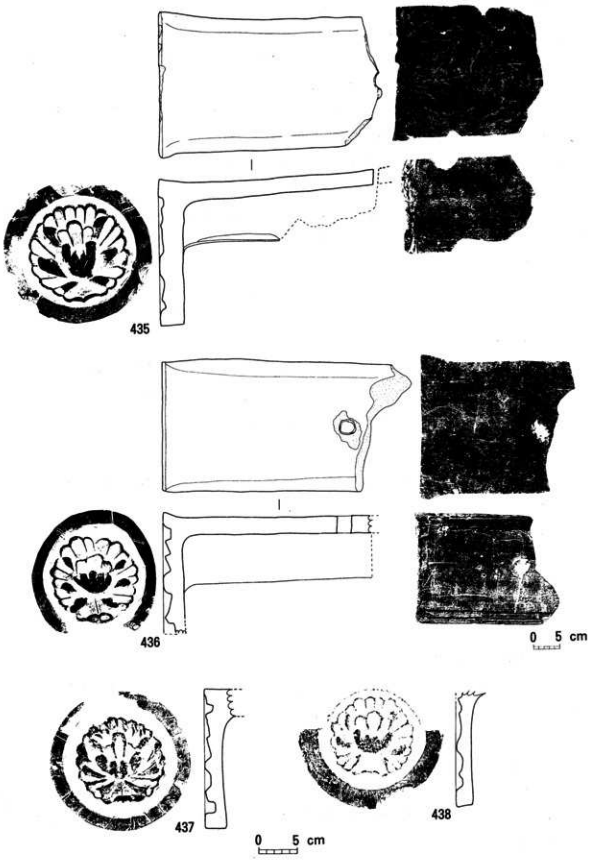
これらは，軒丸の巴文と平瓦の唐草文が一体となったものである。大型**(483～492)**と小型**（493～495）**に分けられ，連朱文は12個が圧倒的に多く，**486**の14個が一つだけである。

また，軒平の無文の瓦**(496～501)**もある。

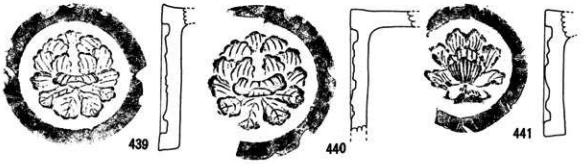
そして，**502**は鎌瓦である。

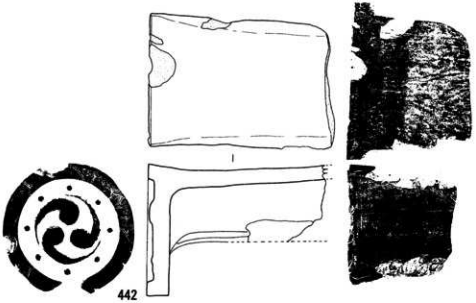
8　桟瓦（503～505）

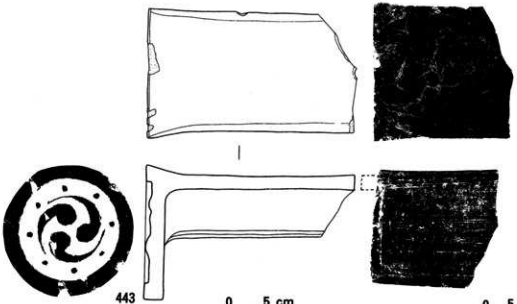
これらは，軒丸と平瓦が組み合わさったものである。長さ28cm，幅29cmの**368**が完形品で他は計測不明である。



第59図　軒丸瓦（1）



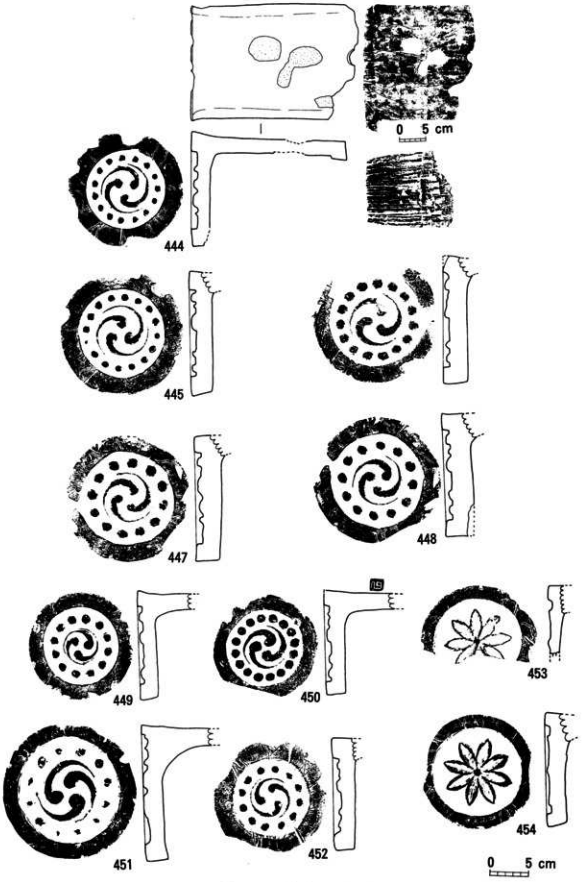




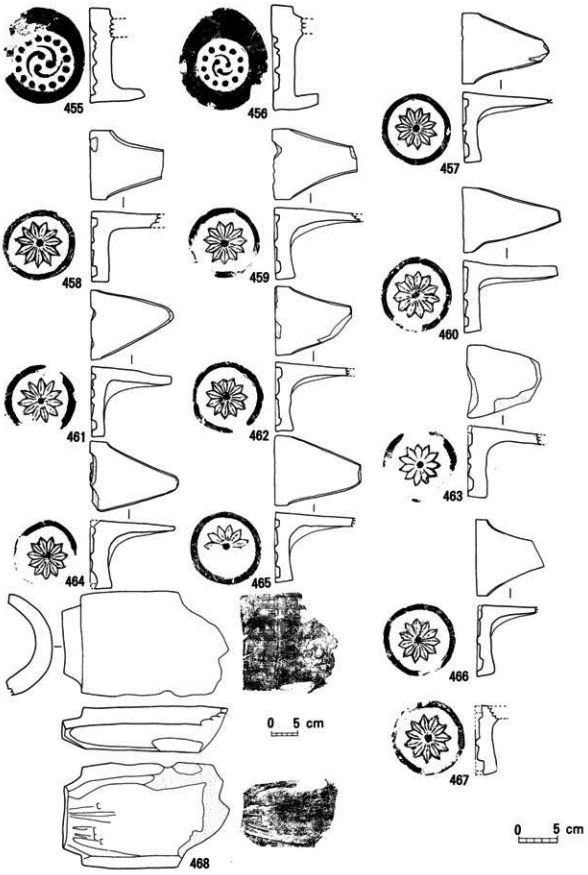
0 5 cm

0 5 cm

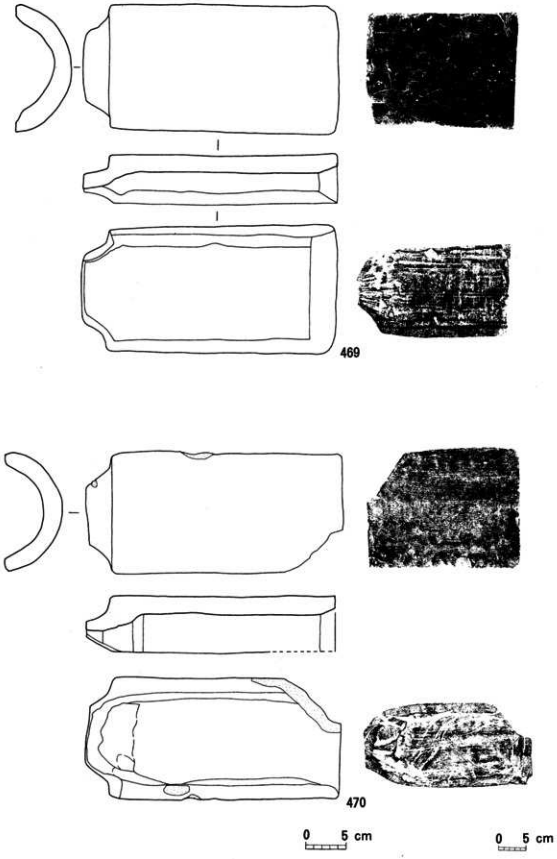
第60図　軒丸瓦（2）



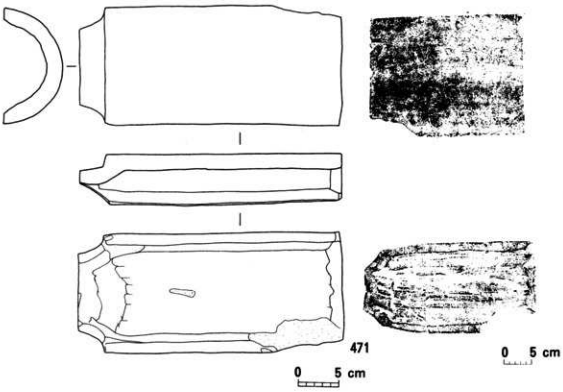
第61図　軒丸瓦（3）



第62図　鳥衾瓦・軒込瓦・丸瓦(1)



第63図　丸瓦（2）



第64図　丸瓦（3）

9　塼瓦（506～513）

これは平坦で厚味のある瓦であり，比較的大きい。506～508は上に重ねる部分が付き，しっ喰が付着している。

510～513は重ねる部分がないかわりに釘を打つ穴が四角にみられる。これは比較的小さい瓦である。なお512・513には刻印がみられる。

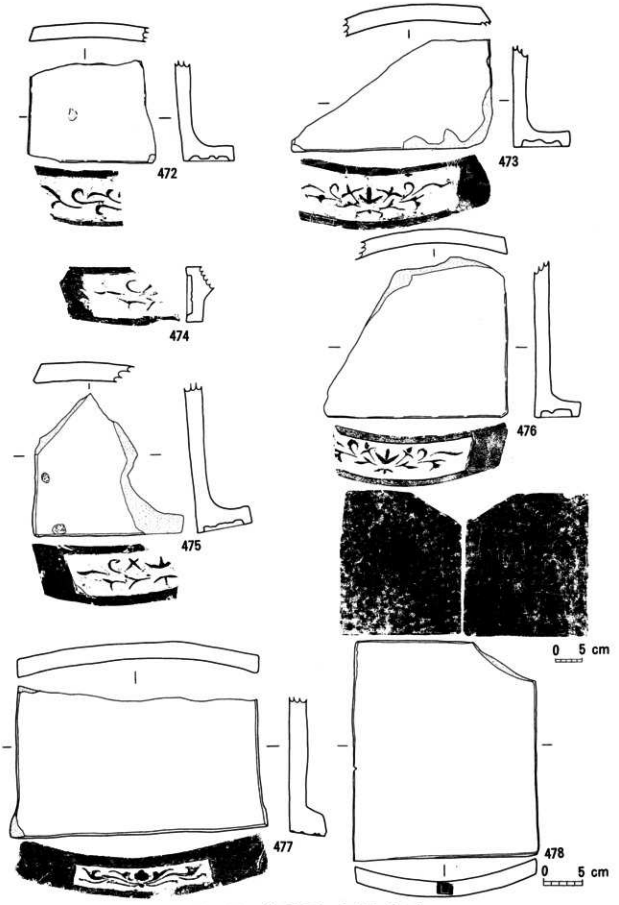
10　鬼瓦（514～522）

514は扁平なものを重ねてつくったもので，中央に扁平な円形の2段重ねがある。また，上部には「日置瓦政」の刻印がある。

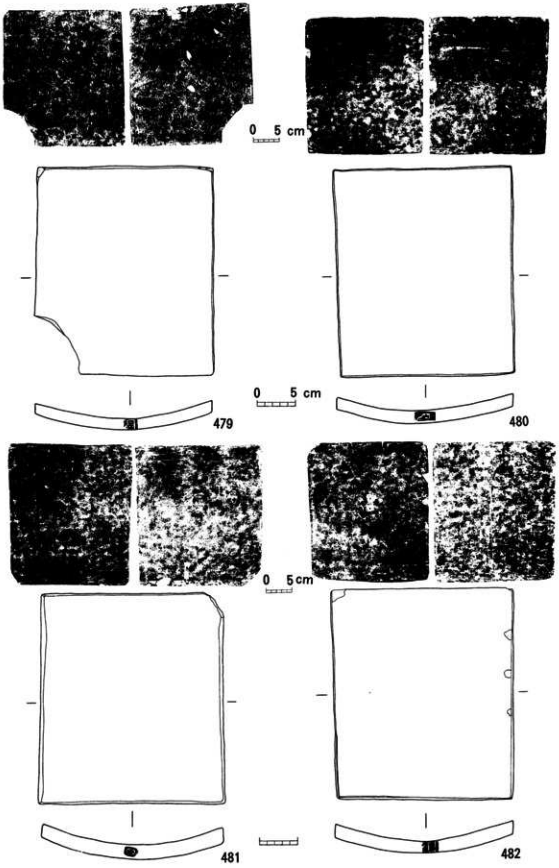
515は深味のあるもので頂上部にあたる。

516は角張ったものである。

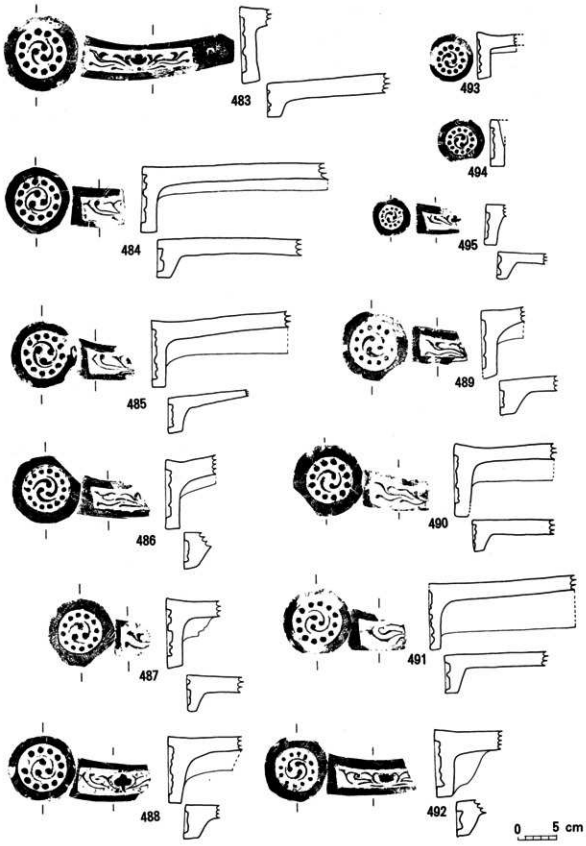
517～522は花弁状の鬼瓦であり，部位ははっきりしない。



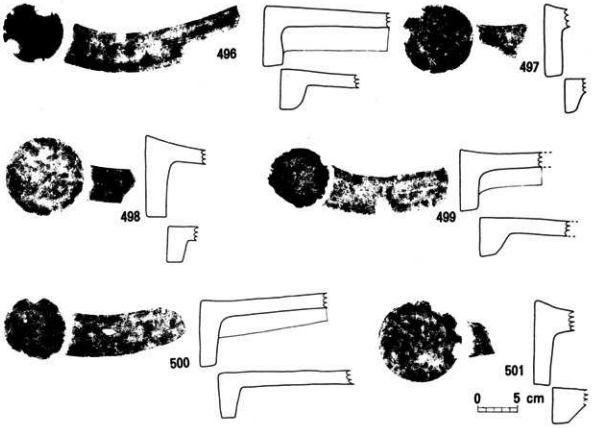
第65図　軒平瓦・平瓦（1）



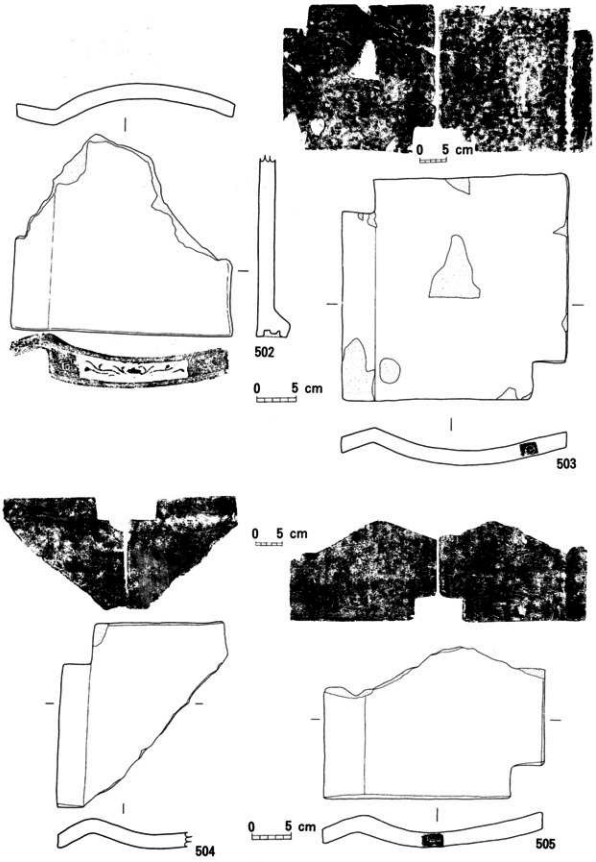
第66図　平瓦（2）



第67図　桟軒平瓦（1）

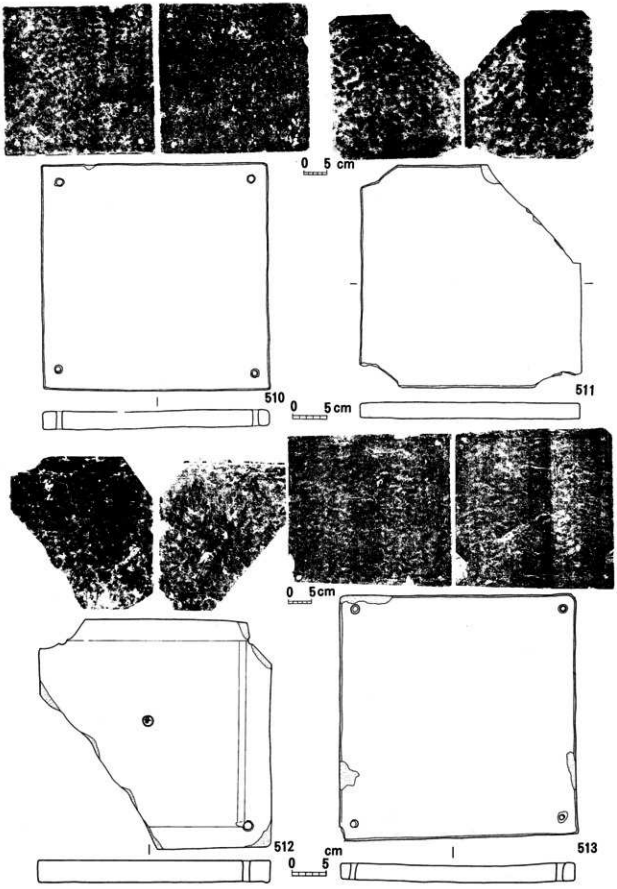


第68図　桟軒平瓦(2)

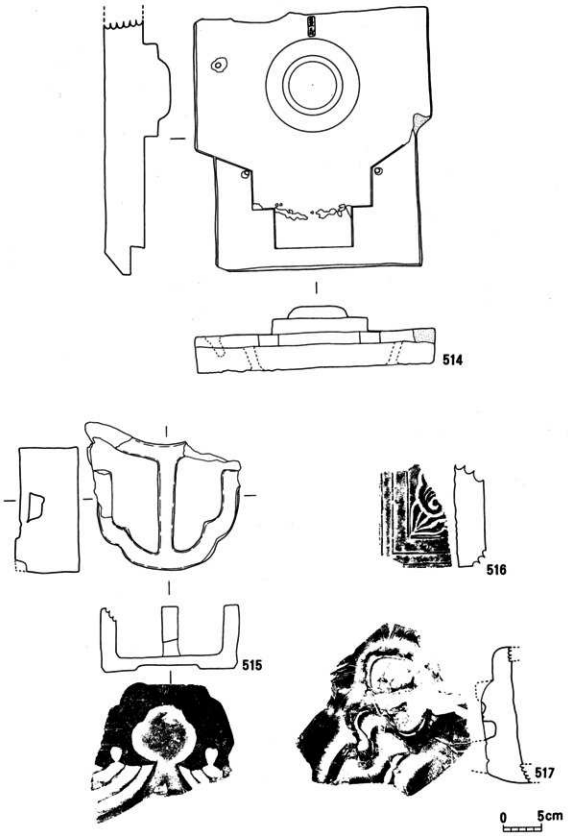


第69図　鎌瓦・桟瓦

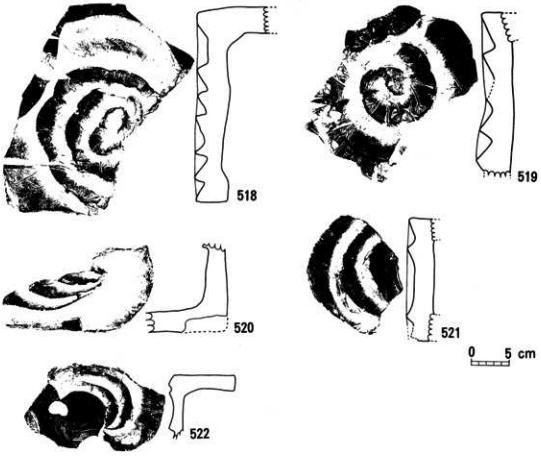
第70図　埴瓦（1）



第71図　埴瓦（2）



第72図　鬼瓦（1）



第73図　鬼 瓦 (2)

第6節　石製品

1　鬼瓦石 (524・525)

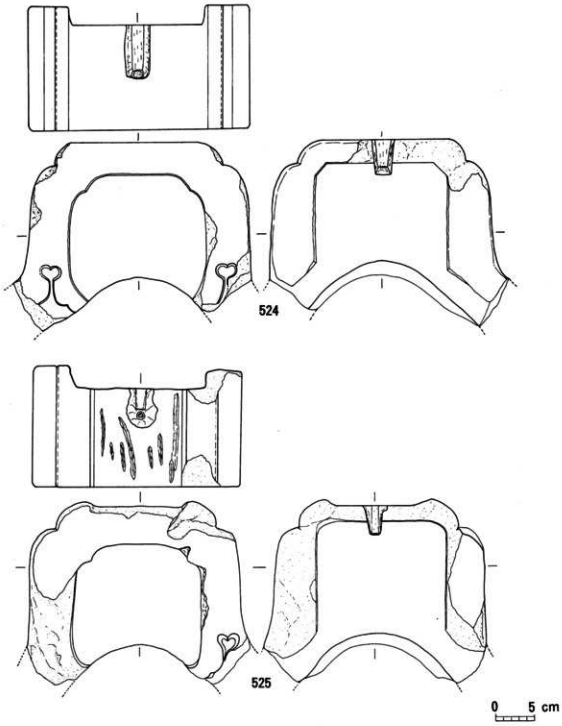
これは鬼瓦を石で作ったものである。石は凝灰岩で頂上中央に鉄物を差し込んだ跡がある。下部は股になっている。

2　硯石 (526～536)

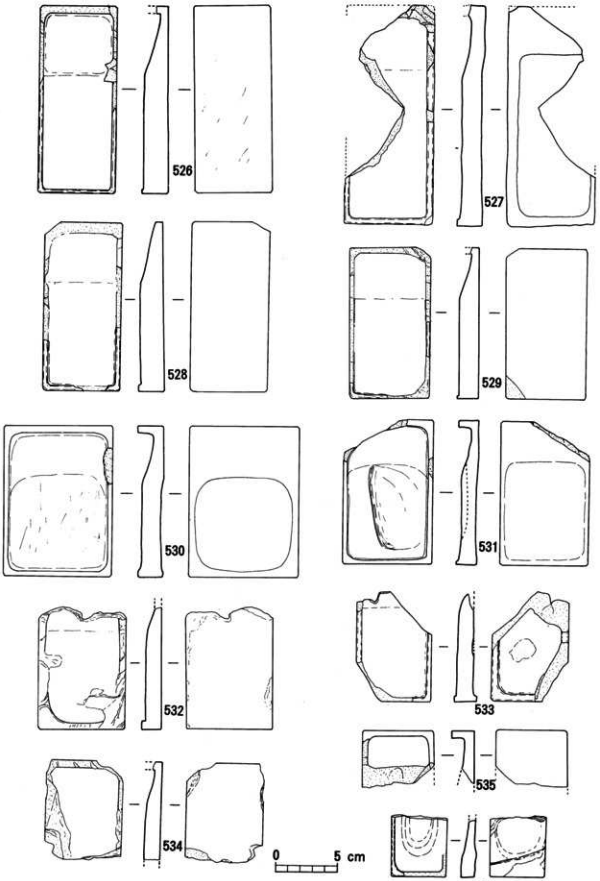
これらは硯石である。硯石の形態では526～529は細身で長い。533・534・535は細身で短い。530は幅広く大きい。531は幅広く短い。色は526～528・536は黒色で，529・532・534は灰色で530・531・533・535は茶褐色である。531は部分的に擦り込んでいる跡がみられる。

3　砥石 (537～541)

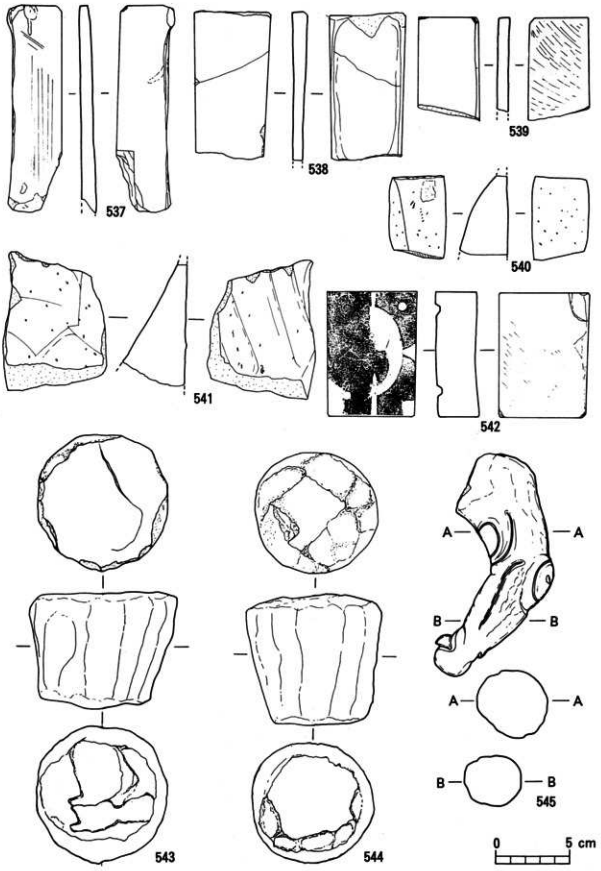
537～539は頁岩の砥石である。これらは細身で薄い。540・540は天草石で厚い。



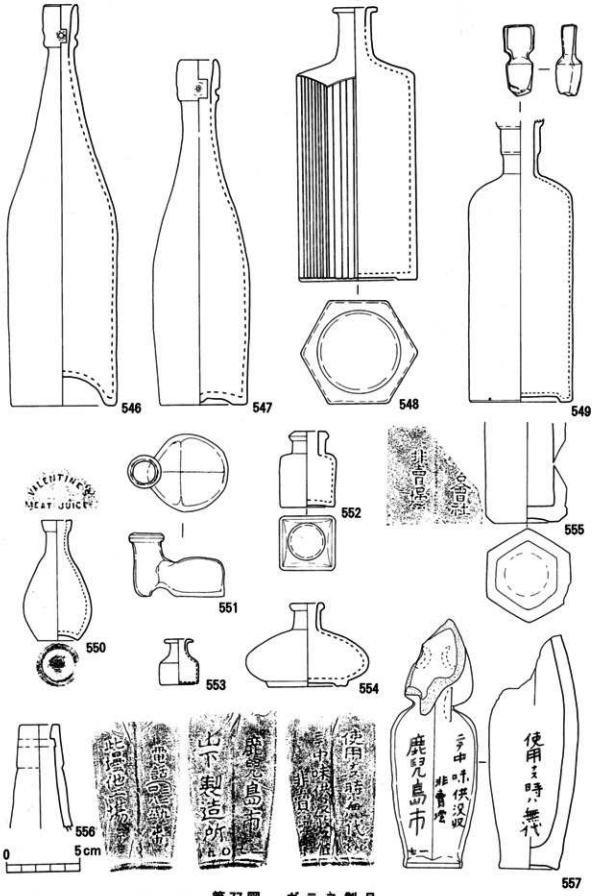
第74図　石製鬼瓦



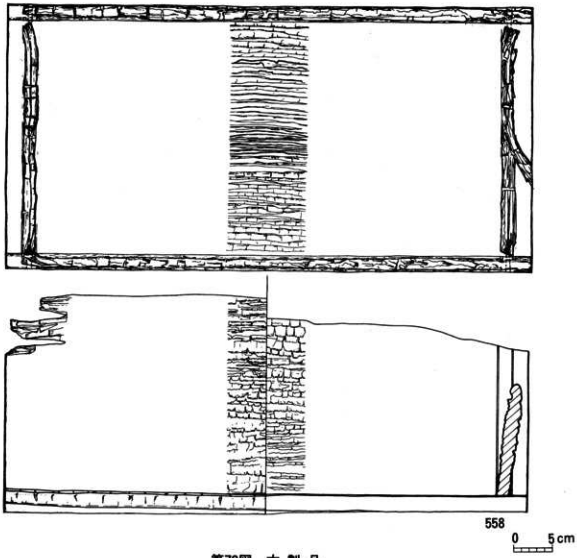
第 75 図　硯



第76図　砥石・鋳型・石栓・仁王像の腕


546
547
548
549
VALENTINE'S
MEAT JUICE
550
551
552
553
554
555
556
557
0
5cm
鹿兒島市
山下製造所

第77図　ガラス製品



第78図　木 製 品

4　鋳型（542）

これは頁岩製のものである。「C」字型のものを作るものと思われる。

5　石管水道の栓（543・544）

これは凝灰岩で石管水道の栓である。石管水道上面の取水穴の栓で漆喰で止めるものである。

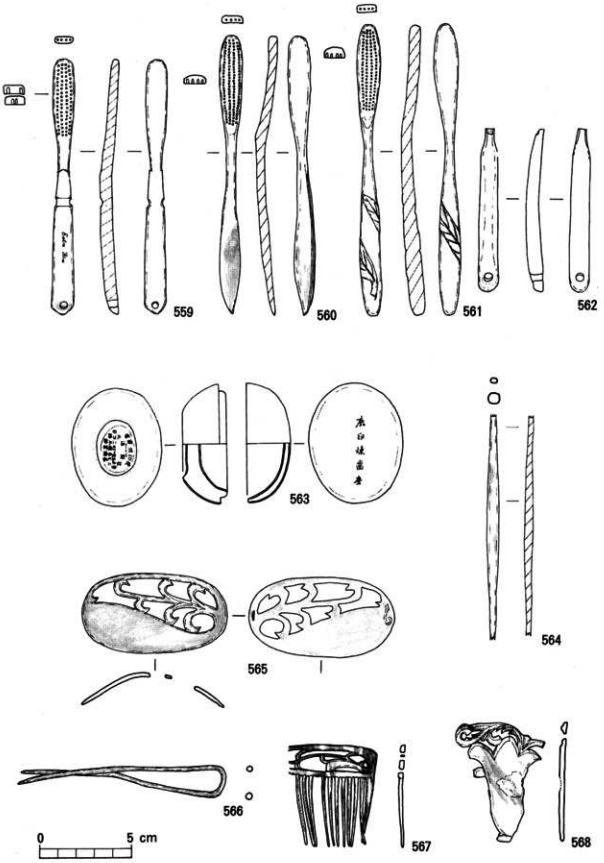
6　仁王像の腕（545）

これは凝灰岩製で仁王像の腕である。部位は左側である。

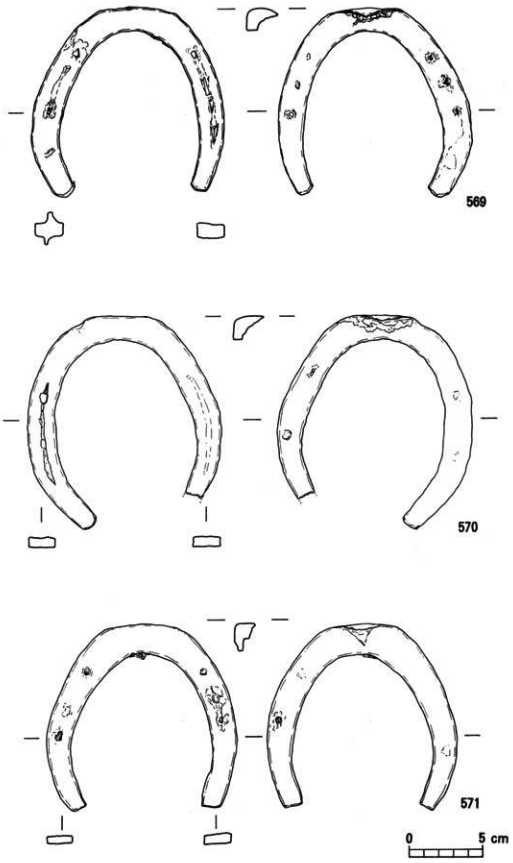
第7節　ガラス製品（546～557）

この類は瓶類である。

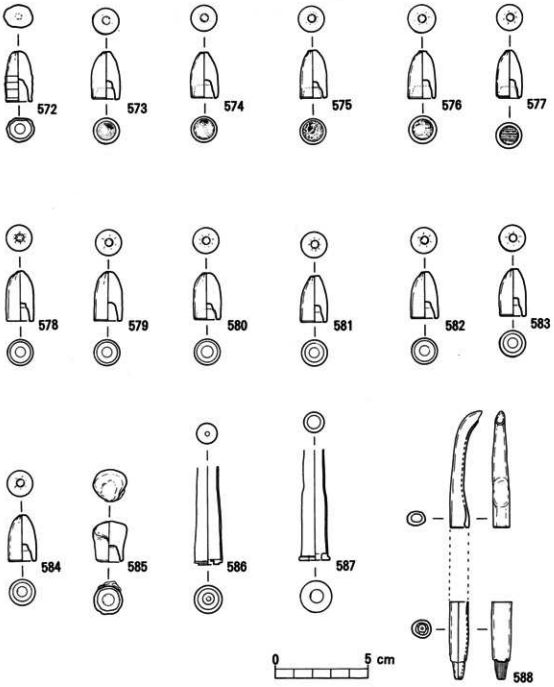
546・547は牛乳瓶である。特徴は口縁部にあり，栓を止める止金穴がある。色は青緑色の透明である。



第79図　洗面具・髪止め・耳かき



第80図　馬蹄



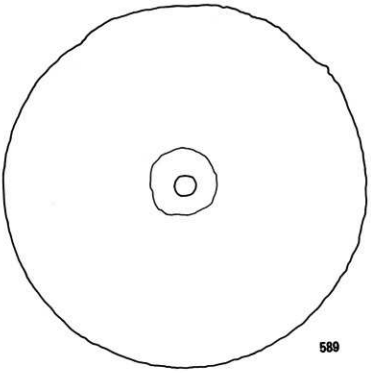
第81図　銃弾・薬キョウ・キセル

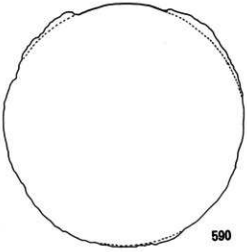
548は，六角の茶色をしたもので「TANABEYA」の文字がみられる。

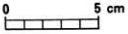
549は，円形の紫色をしたもので栓もある。

550は，茶色の小瓶で「VALENTINE, S　MEAT　JUICE」がみられる。

551～554は透明の小瓶である。小学館発行の「サライ」にて，明治のインクのポスターがあり，その中に小出し用の瓶があり，それらと同じ形に類似している。もちろんインク瓶も出土している。





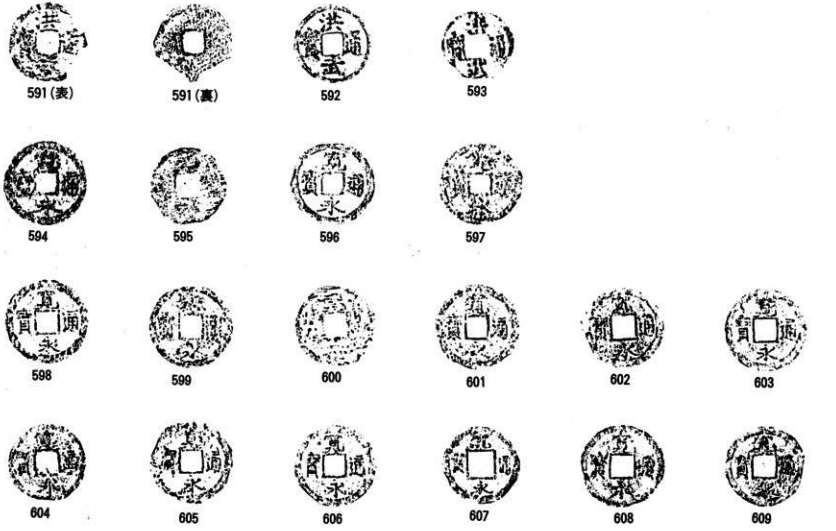


第82図　砲　弾

555～557はラムネ瓶である。555は六角の底部で，556は口縁部である。557は六角で，肩部・底部が締まっている。瓶胴部には「此壜他工場ニテ使用ナス時ハ無代ニテ中味供に没収ス　非売壜　鹿児島市　山下製造所　五〇七　電話（三二五・四八九）番」の文字がみえる。ちなみに，この時期は明治39年の頃である。(これは県立図書館で資料をいただいた。)

第８節　その他特別品

1　木製品（558）


591(表)
591(裏)
592
593
594
595
596
597
598
599
600
601
602
603
604
605
606
607
608
609
0
5 cm

第83図　古銭

これは50×25×21cmの木枠である。出土した所は雨ろ樋の排水を一時溜める所であった。木の質は杉質であり，一枚の板で組み作っている。

2　洗面具（559・554）

559～552は歯ブラシである。全て象牙で光沢があり，部分的に緑色がみられる。**559**は柄部分に「Ｅｘｔｒａ　Ｆｉｎｅ」が掘り込まれている。柄の端はＶ字状に尖り，穴をあけている。頸部は溝と段で装飾を施している。毛穴は18・19・19・18穴と四列平坦部にあり，先端部に４穴ある。毛穴の列は中央の二列と外側の二列は少しずれている。**560**は柄が葉の形をしている。毛穴は29・30・30・29穴と四列平坦部にあり，先端部に４穴ある。毛穴の列は中央の二列と外側の二列は少しずれている。**561**は柄に葉の装飾をしている。毛穴は24・25・25・24穴と四列平坦部にあり，先端部に４穴ある。毛穴の列は中央の二列と外側の二列は少しずれている。**562**は柄の部分である。

563は歯磨容器である。二つ合わせるとたまご形になる。蓋には「鹿印煉歯磨」，身の裏には「鹿印煉歯磨　製造　発売元　東京馬喰町二丁目　花王石鹸本舗　長瀬富郎」の印刷がある。容器は白い磁器である。

564は象牙の耳掻きである。中央部は角張っている。

3　髪止め（565～568）

これらは，鼈甲製である。**565**は茶色で透かしのある髪飾りで，**566**は髪刺しである。**567**は茶色の透かしのある櫛である。**568**は緑のもので髪飾りである。

4　馬蹄（569～571）

これらは２ないし３穴の釘打ち部分がある馬蹄である。**570**の釘打ち穴の所は溝が掘られている。また，馬蹄の先端は折り曲げてある。

5　銃弾類（572～587）

527～585は鉛の銃弾である。径は15mmで長さは25mmで後ろは凹になっている。そして，その中には固形物がはめてある（**574・575・580**）。なお，**572**には溝が３本あり，**585**は先が押し潰されている。重さは30ｇである。

586・587は薬きょうである。かなり新しい時期と思われる。

6　キセル（588）

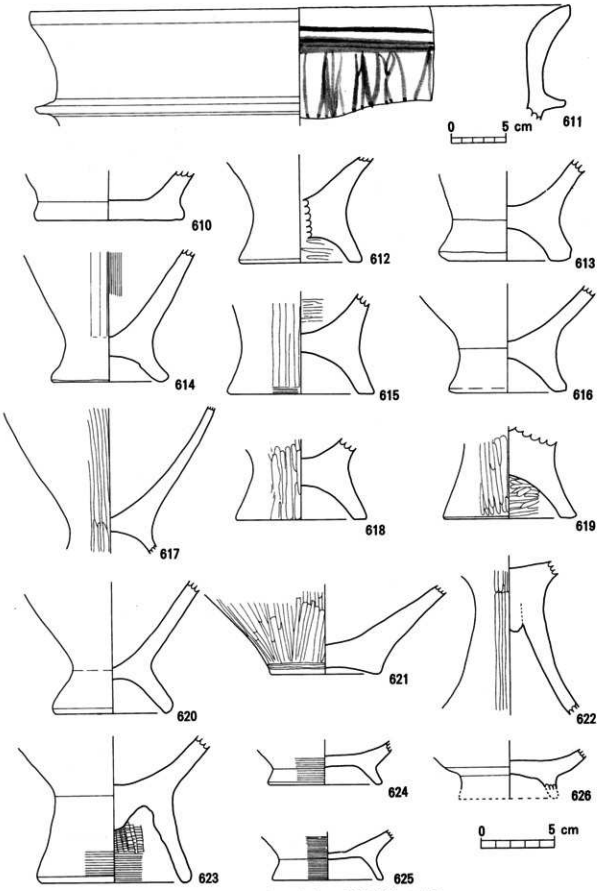
真ん中を竹で継ぐものである。

7　砲弾（589・590）

589は径19.5cmで19.5kgある。信管部は3.5cmで円形である。これは炸裂弾である。**590**は径13.0cmで5.3kgある。これは炸裂弾ではない。

8　古銭（591～609）

591～593は洪武通寶である。**594～597**は寛永通寶で古い時期のものである。**598～609**は寛永通寶で新しい時期のものである。なお，**591**は加治木銭で裏にも浮し字がある。



第84図　縄文・弥生・古墳時代の土器

第9節　縄文・弥生・古墳・奈良時代の遺物（610～625）

610は縄文時代の土器で，網代底の底部である。胎土は荒く黒褐色で，器面は茶褐色をしている。

611～622は弥生時代の土器である。

611は甕の口縁部で，大形の突帯を持ち，内面に黒色彩色が診られる。胎土は茶褐色をしている。

623～620甕の底部である。脚台の部分は全体的に浅く，充実高台の底を抉り込んだかんじである。胎土は**617**が黒褐色で他は，茶褐色をしている。焼成は全体的に，指宿地方のものと類似している。

621は壺形土器の底部である。器面調整は篦磨きで丁寧である。器面は茶褐色と一部黒褐色をしている。胎土は黒褐色である。

622は高坏である。器面の色は茶褐色で，調整は縦研磨で丁寧である。胎土は茶褐色をし，焼成も良い。これも，指宿地方のものと類似している。

623は成川式土器の底部である。器面の色は茶褐色で，胎土は茶褐色をしている。脚台の部分は深い。

624～626は土師器の坏である。底部で高台が高い。器面の色は明るい茶褐色である。

出土遺物の計測　1

(単位：cm)

No.	出土区	器高	口径	高台高	高台径	底径	底径	つまみ径	特徴	No.	出土区	器高	口径	高台高	高台径	底径	底径	つまみ径	特徴
1		6.2	12.0	0.8	4.5					41	15'-J	3.9	9.0			7.5			
2	16'-17'-de	6.5	13.5	10.1	5.3					42	15'-J	4.4	9.2	0.3	7.0				
3		5.4	10.3	0.7	3.3					43	a-11'-1	2.5	7.2			5.8			
4	7'-17'-e	6.0	8.8	0.6	4.0					44	9'-10'-A	4.1	8.0			6.2			
5		4.9	13.8	0.4	5.5					45	B-17'-1	2.8							
6	D-8'-1			0.5	3.5					46		3.4	10.5			5.0			
7	D-21'-1	4.1	7.7	0.5	3.2					47	C-10'	4.6	22.0	1.0	9.0				
8	11'-B	4.0	8.0	0.5	3.2					48		7.5	33.5	0.9	19.0				
9	K-20'			0.6	3.0					49	D-9'	11.6	36.0	1.2	10.0				
10	G-20'	8.7	9.3	0.6	6.0					50		5.0	11.0	0.6	3.0				
11	M-15'-1	7.9	7.5	0.7	4.8					51			11.0						
12	N-23'-24'									52	I-22'-1		6.5				8.2		
13		4.2	6.3				9.0	2.0		53									
14		4.5	6.4	脚高 2.9	脚径 5.2					54			5.5						
15	大建No.1 基礎No.5の下	5.1	7.6	脚高 3.4	脚径 4.8					55			7.0						
16	大建No.1の下E-7'	6.4	7.2			6.0				56						5.0			
17	1R-2'				脚径 7.5					57	中央井戸小組			脚高 1.3	脚径 7.4				
18	D-5'(下)			脚高 11.0	脚径 9.4					58				0.8	11.0				
19		2.3	9.0				10.4			59			24.0						
20			8.2				9.0			60			12.0						
21		3.4	10.2			9.4				61									
22	布基礎No.1の下A-7'	4.0	10.2			9.0				62									
23		19.0	35.0	1.0	16.0					63									
24			10.0							64				0.8	3.8				
25			14.4							65	11'-B	4.5	13.5	0.7	5.6				
26				0.9	5.2					66	D-8'-1	5.2	12.8	0.6	4.7				
27	大建8'			0.4	6.0					67	C-19'-1	2.2	10.0			5.0			
28	21'-23'-HK									68	E-17'-1			脚高 2.3	脚径 4.4				
29	J-23'			脚高 4.5	脚径 10.5					69	布基礎No.1の下A-7'	3.8	10.6			10.0			
30	L-21'-1		13.0							70	大奥排水	3.8	8.8			4.4			
31				0.5	8.4					71	大奥10'-a					9.0			
32	M-15'-1	7.1	7.2	0.7	4.5					72	布基礎No.1の下A-7'	4.3	11.0			9.8			
33	C-7'-1	7.6	12.0	1.2	4.5					73	15'-K	3.9	11.0			8.0			
34	F-10'	5.0	10.8	0.7	2.5					74	18'-C	7.2	18.8			17.5			
35	a-12'	5.7	12.0	0.7	4.3					75	溝	8.0	20.5			19.5			
36	大奥排水	5.2	19.0	0.6	3.5	10				76	H-10'-1			0.7	4.5				
37		5.0	10.0	0.5	3.8					77	b-23'-1		4.0				6.2		
38		5.7	9.5	0.7	3.5					78			6.2						
39	大奥a-10'	5.6	10.0	0.6	3.8					79	D-9'								
40		5.9	8.0	0.9	3.3					80	L-11'-1		41.0						

出土遺物の計測　2

(単位：cm)

No.	出土区	器高	口径	高台高	高台径	底径	底径	つまみ径	特徴
81	M-2′-1		29.8						
82	E-9′-1								
83				1.3	10.8				
84	D-9′		16.7						
85				1.5					
86				0.8					
87				1.0					
88	L-9′							6.5	
89	L-8′-1								
90			4.2						
91	K-23′-1 O-10′-1		36.6						
92				1.4	19.3				
93	O-23′	5.0	10.4	0.7	4.6				
94	M-17′	2.7							
95		2.5	11.0			4.6			
96	大建No.-1	2.4	10.3			4.3			
97	M-K-21′-23′	2.1	11.0			4.4			
98	D-5′(下)	4.3	8.2	脚高 1.5	脚径 4.0				
99		5.6	8.2			4.4			
100	D-23′-1	5.2	5.2			4.8			
101		5.2	6.4			5.0			
102		3.3	5.0				7.5	1.2	
103		3.3	4.2					1.2	
104		3.3	4.3					1.2	
105		4.0	4.6					1.4	
106	E-21′-1	3.0	4.6					1.9	
107	9′-C		9.0						
108			8.2						
109	D-22′-1		7.1						
110		8.0	5.5						
111		10.0	6.0						
112	L-13′-1								
113	G-19′-1	9.8	13.2			4.7			
114		7.2	7.8						
115		6.7	2.7			4.0			
116	H-23′	6.5	7.2	0.7	3.8				
117	大建No.1の F, F-7′	4.8	4.7	2.3	3.8				
118		5.2	4.7	2.3	3.5				
119	F-22′	5.6	6.0	2.0	3.8				
120	I-23′	6.0	12.2	1.0	4.4				

No.	出土区	器高	口径	高台高	高台径	底径	底径	つまみ径	特徴
121	a-21′-1			1.1	4.4				
122	E-18′-1	2.4	5.8	0.9	4.6				
123		2.4	7.0	0.6	3.4				
124	a′-23′-1			脚高 2.0	脚径 4.6				
125		3.4	6.4			3.4			
126	b′-10′-1	3.9	7.6	脚高 3.6	脚径 4.0				
127	J-23′-1	5.2	2.4	0.9	3.9				
128		8.8	2.4			4.4			
129	M-15′-1	5.5	2.0	0.8	3.2				
130			3.0						
131	L-19′-1			脚高 6.8	脚径 7.6				
132	O-10′-1	8.9	1.9	1.0	8.6				
133	溝			1.2	9.2				
134	M-16′	2.2	6.2						
135		5.7	11.2	0.8	4.8				
136	R 1			1.3	4.8				
137				0.8	4.4				
138	10′-a	5.1	12.0	0.8	4.4				
139	大建No.1下 9′-B			1.3	5.2				
140	E-9′-1			0.9	3.6				
141	井戸小組			1.0	5.0				
142									
143			8.6						
144		7.5				4.2			
145	脚台所	7.0	12.0	1.2	5.0				
146		2.5	12.0			5.0			
147	大集10′-a	2.9	4.9	0.5	3.8				
148		4.2	8.0				11.0	1.6	
149	·C-23′-1		10.1				13.0	1.7	
150	F-22′	3.8	7.7				9.5	1.5	
151	21′-23′HK	4.4	8.8				11.8	1.8	
152		4.5	6.2				9.1	1.8	
153		3.5	6.5				8.8	1.5	
154		3.8	6.2				8.3	1.2	
155		12.4	12.0				8.0		
156	11′-a								
157		3.2	2.5				7.4	1.6	
158		9.5	8.5						
159			5.2						
160			8.4						

出土遺物の計測　3

（単位：cm）

No.	出土区	器高	口径	高台高	高台径	底径	底径	つまみ径	特徴
161			76.5						
162			48.5						
163			33.0						
164		27.5	32.0			18.0			
165			14.5						
166			27.0						
167						20.0			
168	A-17′					16.0			
169			19.0						
170			16.0						
171	H-19′-1		19.5						
172	L-19′-1	12.4	9.0			6.0			
173	G2′-1					18.5			
174	I-6′-1					22.2			
175	H-K-21′-23′					26.4			
176	a-22′		46.0						
177	18′-C		39.5						
178			37.0						
179		11.6	23.5			8.8			
180		15.0	32.5			13.0			
181	a-22′		36.0						
182		12.5	29.2			16.0			
183	M-22′-1	12.5	28.0			15.5			
184		13.0	24.0			15.0			
185	G-22′-1		29.5						
186	C-22′		29.0						
187		10.0	24.0						
188	a-21′-1	11.0	25.8			15.5			
189		6.1	23.5			17.6			
190	M-K-21′-23′	7.1	24.0			18.5			
191	A-21′-1	7.9	25.0			15.6			
192		5.7	25.8			20.5			
193	22′-24′ F-N		4.0						
194	L-24′-1		3.0						
195			5.8						
196			5.8						
197	C-20′					11.2			
198	C-20′-1					12.0			
199									
200	P-25′-1	1.6	6.6				8.0		

No.	出土区	器高	口径	高台高	高台径	底径	底径	つまみ径	特徴
201	HK21′-23′	1.6	6.8				8.5		
202	22′-24′FN	1.9	6.0				8.0		
203	H-K-21′~23′	1.8	6.5				8.5		
204	H-K-21′~23′	4.2	6.0	1.2	2.5				
205	P-25′-1	4.5	6.0	0.7	2.2				
206		3.6	5.2	0.6	2.8				
207	P-25′	3.8	5.0	0.4	3.5				
208	P-25′-1	3.7	5.6	0.6	3.0				
209	22′-24′FW	3.1	4.2	0.3	2.0				
210	11-B	3.1	4.2	0.5	2.0				
211	P-25′		3.0						
212	K-20′		2.4						
213	A-23′-1	3.0	5.0				6.6	2.0	
214	J-17′-1	2.6	4.2				5.6	1.5	
215	G-22′-1	3.0	3.5				5.2	1.5	
216	K-20′	2.8	3.5				5.2	1.4	
217	15′-F	26.5	4.0			7.5			
218		29.1	4.2			7.0			
219	K-9′-1		13.0						
220	C-24′-1		15.0						
221						19.0			
222	a-12′		27.0						
223	B-3′-1	7.5	12.0	1.0	4.5				
224	I-22′-1	7.1	11.5	0.8	5.5				
225				0.8	4.2				
226	21′-23′-K	2.6	11.0	0.5	5.5				
227	D-22′-1	4.0	14.5	0.5	4.6				
228	B-18′-1	3.5	14.5	0.2	4.5				
229	C-11-1	3.5	11.0	0.3	4.5				
230		3.4	13.5	0.6	6.6				
231		3.3	13.0	0.5	6.5				
232	L-23′-1	1.6	7.5			2.8			
233	D-23′-1	7.5	22.0	0.7	9.5				
234	a-20′-1	7.0	14.0	1.0	6.4				
235	市基礎No.1 下A-7	4.5	9.0	0.7	5.2				
236	社殿No.2 西側3m	7.3	4.0			5.0			
237						25.0			
238						21.5			
239		21.0	3.5			8.0			
240		19.3	3.2			9.0			

出土遺物の計測　4

（単位：cm）

No.	出土区	器高	口径	高台高	高台径	底径	底径	つまみ径	特徴
241	J-2'-1層					9.0			
242						7.0			
243	22'~24'-FN	19.0	4.0			7.0			
244									
245		置2.7 11.0	6.8 3.6			8.0	7.0	0.8	
246		7.2	12.0	0.8	7.0				
247	HK-21~25	8.4		1.0					
248	R~K-21~23	9.0		1.2					
249						22.0			
250			31.2						
251			34.0						
252	C-7'-1		38.0						
253	K-5'		38.0						
254						12.0			
255			15.0						
256			15.4						
257	10'-a	長さ 5.0	外径 2.4	内径 0.9					
258		長さ 4.4	外径 1.7	内径 0.7					
259	大鳥11'-C	長さ 5.0	外径 1.8	内径 0.7					
260	B5'-1	長さ 4.5	外径 1.3	内径 0.5					
261		長さ 2.0	外径 1.1	内径 0.4					
262	A-11'-1	長さ 3.8	外径 1.4	内径 0.4					
263	A-12'-1	長さ 3.5	外径 1.7	内径 0.7					
264		長さ 3.8	外径 1.1	内径 0.7					
265	D-10'-1	長さ 4.0	外径 1.7	内径 0.5					
266	M-17'-1	長さ 3.2	外径 2.0	内径 0.9					
267		長さ 4.8	外径 1.2	内径 0.4					
268	22'~24'-F~N	長さ 6.5	外径 4.8	内径 2.2					
269			29.0						
270			32.0						
271	A-17'			0.8	9.2				
272	大鳥入口	2.6	9.6	0.7	3.6				
273	d-8'-1			0.7	13.6				
274	2-11			1.0	5.0				
275	22'~24'-F~N	6.0		0.7	5.6				
276	22'~24'-F~M			1.2	11.0				
277	大鳥4a溝	9.8	19.6	1.4	6.6				
278	24'-F~N	5.3	6.0	脚高 2.4	脚径 4.0				
279	B-23'-1	5.4	1.2	0.5	2.8				
280	16'-17'd'd		36.4						

No.	出土区	器高	口径	高台高	高台径	底径	底径	つまみ径	特徴
281	C-7'-1	3.7	6.4	0.5	2.2				
282	A-17'-1					26			
283		5.8	12.0	0.8	3.4				
284	K-21'-1			0.7	3.0				
285	布基礎No.3	1.0	3.0						
286	大建No.1の FE'-E'-E'-9'								
287		3.3				9.4	10.4	3.3	
288	H-10'-1	3.2	10.4					4.3	重
289	M-10'-1	2.6	9.4					4.3	重
290	L-9'-1	2.4	11.0					5.4	重
291	b-23'-1							4.6	重
292	18'-1	3.0	9.2					3.4	重
293	F-22'	3.0	9.4					5.2	重
294		2.0	10.4	0.6	6.0				
295	E-21'-3	2.3	10.0	0.6	5.6				
296		5.2	25.6	0.5	14.2				
297		5.0	28.8	0.8	16.0				
298	12'-a			1.0	4.6				
299	23'-24'-FN		2.2						
300	K-21'-1		2.2						
301	K-9'-1		3.2						
302									
303	D-23'								
304	L-11'-1			0.6	2.6				
305									
306	I-23'-1								
307						5.6			
308	L-9'-1			1.2	5.2				
309	L-9'-1			1.3	8.6				
310		6.5	9.8	1.0	3.2				
311		3.7	19.2	0.3	9.8				
312	H-11'-1	3.5	13.4	0.6	6.0				
313	O-23'	4.3	13.4	0.4	7.6				
314	溝	置3.2 脚5.2	5.8 5.6	0.5	3.4			5.2	
315	溝	6.0	9.8	0.8	3.6				
316		7.0	3.6	1.2	3.6				
317	溝	7.0	3.7	0.7	5.0				
318		7.0	7.4	0.7	4.4				
319		23.5	29.6	2.4	15.0				
320		28.1	30.8	2.5	18.4				

出土遺物の計測　5

(単位：cm)

No.	出土区	器高	口径	高台高	高台径	底径	底径	つまみ径	特徴	No.	出土区	器高	口径	高台高	高台径	底径	底径	つまみ径	特徴
321	M-15′	18.9	18.0			18.0				361	G-20′	5.7	2.0	0.3	6.0				
322	M-15′	21.5	16.0			18.0				362	G-19′-1	4.0	7.4	0.5	3.2				
323	M-15′	18.0	16.0			17.5				363		5.0	5.4	3.0	4.3				
324	溝					17.0				364									
325	M-15′	8.3	9.5			10.0				365	H~K-21~23	1.7	11.5			8.5			
326	M-15′	18.0								366	大奥11′-C	2.3	12.0			8.5			
327	G-22′-1	7.3	13.0	0.9	5.5					367	大奥	2.4	12.4			9.5			
328	M-15′-1	5.7	10.5	0.8	3.7					368	大奥11′-1	2.5	11.8			9.0			
329		7.0	8.0	0.8	4.4					369	H-23′	2.4	11.5			8.5			
330		7.0	8.0	0.8	4.4					370		2.1	10.4			8.8			
331		3.5	8.4				9.8	1.0		371		2.2	11.5			9.3			
332		3.5	8.8				9.6	1.2		372	御台所	2.5	12.5			9.0			
333	H-22′-1		8.8				10.0			373	C-22-1′	2.1	11.5			9.0			
334	H-21′-22′		8.0				9.2			374	H~K-21~23	2.0	12.5			9.5			
335	C-19′	5.1	2.0	0.7	3.6					375		2.2	11.4			8.5			
336	16-17 d-e	4.3	13.5	0.6	3.0					376		2.5	11.4			8.8			
337		3.3	13.0	0.8	7.0					377	大奥8′-a	2.5	12.5			7.5			
338		5.8	30.0	0.8	19.5					378	F-7′	2.2	11.0			8.0			
339	M-17′	4.0	21.0	0.5	11.0					379		2.2	9.2			6.4			
340		7.3	14.5	1.2	7.0					380	O-1′	2.3	8.8			5.4			
341	16′-17′ a~e	6.0	13.5	0.8	6.6					381		2.0	9.0			6.4			
342	O-22′-1			1.6	10.0					382		2.4	8.2			5.0			
343	I-21′-1			1.6	9.4					383	N·M-3′	2.0	8.0			4.5			
344	L-9′-1	5.5	9.8	0.9	3.5					384		2.0	7.0			5.0			
345	O-21′	5.6	14.0	1.2	3.2					385	16-17-a~e	2.2	8.0			5.0			
346	K-19′-1	3.4	12.5	0.8	6.4					386	H-19′-1	2.1	7.2			4.8			
347		4.4	13.5	0.6	6.4					387	E-20′-1	1.4	6.2			4.6			
348		4.9	14.0	0.9	6.5					388	A-22′-1	1.5	5.2			4.0			
349	22′-24′-F·N	1.3								389	b-10′-1	3.0	7.0			3.4			
350	11′-B	5.7	6.4	脚高 3.3	脚径 4.0					390	H-9	1.8	6.8			5.5			
351	M-2′~1′	3.0	8.8				9.8	4.0		391		2.0	14.0			11.5			
352	G-10′-1	11.3								392		4.5	19.0			11.0			
353	O-18′-1	3.9		1.0						393	御台所	3.5	13.8			8.0			
354		4.6	31.0	0.9	18.5					394	C-24′-1	3.0	15.0			9.5			
355				0.7	15.5					395	HK-21′-23′	2.9	16.0			9.5			
356				0.8	12.0					396		2.7	12.5			8.0			
357	L-21′-1	6.5	11.0	1.1	4.4					397	T-21′-23′	2.5	14.0			8.0			
358	22′-24′-FN	3.5		0.9						398	F-7′-1					6.0			
359	M-15′	2.1	10.5	0.3	6.4					399		2.2	15.8			9.0			
360	M-15′	2.0	10.5	0.3	6.6					400	16′-17′-d′f	2.6	15.0			9.4			

出土遺物の計測　6

（単位：cm）

No.	出土区	器高	口径	高台高	高台径	底径	底径	つまみ径	特徴	No.	出土区	器高	口径	高台高	高台径	底径	底径	つまみ径	特徴
401	16′-17′-d・f	3.3	15.6			10.0				441					径 16.5				
402		2.5	12.4			7.6				442					径 17.0				
403	16′-17′-e	2.5	10.6			6.4				443					径 17.5				
404		5.5	23.0			20.2				444					径 15.0				
405		3.9	16.8			12.2				445					径 16.0				
406										446					径 16.5				
407										447					径 16.0				
408										448					径 16.5				
409	J-23′	長さ 9.7	幅 9.2	厚さ 2.1						449					径 14.0				
410		長さ 9.5	幅 5.1	厚さ 1.8						450					径 14.0				
411	10′-F	長さ 7.5	幅 6.5	厚さ 1.5						451					径 14.5				
412	10′-D	長さ 10.2	幅 7.8	厚さ 1.5						452					径 17.5				
413	720	長さ 9.5	幅 8.5	厚さ 1.9						453					径 15.0				
414	J-11′-1	長さ 9.5	幅 5.7	厚さ 2.0						454					径 15.0				
415	C-22′		35.0							455									
416	御台所	10.0	40.2			15.0				456									
417				脚高 5.2	脚径 19.0					457					径 9.0				
418	L-11′-1			脚高 5.1	脚径 17.0					458					径 9.3				
419	E-21′-1									459					径 9.0				
420	F-7′-1		16.6							460					径 9.5				
421	J-22′-1									461					径 9.0				
422			16.4							462					径 9.2				
423	K-1		13.0							463					径 9.0				
424		6.5	9.6							464					径 8.3				
425	12′-a									465					径 9.3				
426	20′-9	12.0	14.0							466					径 9.2				
427		厚み 1.2								467					径 9.3				
428	J-24′	14.3	40.0	2.2	23.0					468									
429	H-23′-1			2.4	26.0					469		長さ 31.5	幅 15.5	厚さ 2.3					
430										470		長さ 32.5	幅 15.0	厚さ 2.2					
431										471		長さ 32.0	幅 14.3	厚さ 2.0					
432										472									
433										473									
434	L-11′-1	7.0	24.5	5.0	18.0					474									
435					20.0					475									
436					16.5					476									
437					18.5					477									
438					18.0					478		縦 28.0	横 23.0	厚さ 2.0					
439					18.7					479		縦 25.6	横 20.3	厚さ 1.9					
440					20.0					480		縦 25.2	横 22.5	厚さ 1.8					

出土遺物の計測　7

(単位：cm)

No.	出土区	器高	口径	高台高	高台径	底径	底径	つまみ径	特徴	No.	出土区	器高	口径	高台高	高台径	底径	底径	つまみ径	特徴
481		縦 27.4	横 20.4	厚さ 1.9						521									
482		縦 27.6	横 20.3	厚さ 1.5						522									
483										欠番									
484										524	H-19'-1	縦 15.1	横 18.1	厚さ 7.5					
485										525									
486										526	22'~24'-F~N	縦 15.2	横 6.2	厚さ 2.1					
487										527	H-20'-1	縦 17.8	横 7.1	厚さ 2.1					
488										528		縦 13.8	横 6.2	厚さ 2.1					
489										529	H-23'-1	縦 12.2	横 6.4	厚さ 1.8					
490										530	L-9'-1	縦 12.3	横 8.8	厚さ 2.0					
491										531	御台所	縦 11.8	横 7.2	厚さ 1.7					
492										532	F-20'		横 6.9	厚さ 1.6					
493										533	D-19'-1			厚さ 1.8					
494										534	L-9'-1		横 6.2	厚さ 1.8					
495										535	F-20'		横 5.8	厚さ 1.8					
496										536	I-30'-1		横 4.4	厚さ 1.1					
497										537	J-24'	縦 14.2	横 3.4	厚さ 1.0					
498										538	F-9'-1	縦 10.1	横 5.2	厚さ 10.1					
499										539			横 4.1	厚さ 0.7					
500										540		縦 5.4	横 3.9	厚さ 3.3					
501										541		縦 8.3	横 6.9	厚さ 4.2					
502										542	a-22'-1	縦 8.5	横 5.8	厚さ 2.7					
503		縦 2.8	横 28.8	厚さ 2.0						543	大集11'-C	7.8	8.8						
504										544	J-20'-1	8.6	8.3						
505										545									
506										546		27.2	2.3	胴径 7.3		7.3			
507										547		23.4	2.8	胴径 6.2		6.5			
508										548		18.5	3.0	胴径 8.0		8.0			
509										549				胴径 7.0		7.1			
510		縦 33.1	横 32.8	厚さ 2.5						550		8.2		胴径 4.6		3.0			
511		縦 32.6	横 33.0	厚さ 2.3						551									
512										552						3.7× 3.7			
513		縦 35.5	横 34.4	厚さ 2.4						553		3.1	2.0	胴径 2.2					
514										554		5.7	2.4	胴径 8.4		5.7			
515										555									
516										556			2.8						
517										557						4.2			
518										558		縦 6.7	横 3.4	厚さ 1.4		高さ 27.8			
519										559		長さ 13.8	幅 0.7						
520										560		15.3	0.5						

出土遺物の計測　8

(単位：cm)

No.	出土区	器高	口径	高台高	高台径	底径	底径	つまみ径	特徴	No.	出土区	器高	口径	高台高	高台径	底径	底径	つまみ径	特徴
561	M-17′	長さ 15.7	幅 1.0							601		径 2.45	孔径 0.6×0.6		重さ(g) 3.78				
562	M-17′		幅 1.0							602	F-20′-1	径 2.3	孔径 0.6×0.6		2.98				
563		4.7								603	F-2′	2.4	孔径 0.6×0.6		2.97				
564			幅 0.5							604		2.3	孔径 0.6×0.65		2.96				
565										605		2.4	孔径 0.6×0.6		3.93				
566										606		2.4	孔径 0.6×0.6		3.72				
567										607	J-22′-1	2.3	孔径 0.7×0.7		2.20				
568										608	a-13′	2.4	孔径 0.7×0.7		2.75				
569										609	E-12′	2.3	孔径 0.65×0.65		3.07				
570										610	I-9′-1					10.0			
571										611	b-23′-1		49.4						
572	D-23′-1	2.8	1.4							612					6.80				
573	A-9′	2.6	1.4							613	D-19′-1			2.2	6.00				
574	A-9′	2.5	1.4							614	D-19′-1			2.7	6.40				
575	A-9′	2.6	1.4							615	D-19′-1			2.8	8.00				
576	A-9′	2.6	1.4							616	D-19′-1			2.3	6.40				
577	A-9′	2.7	1.4							617	D-19′-1								
578		2.7	1.4							618	D-19′-1			2.3	7.00				
579		2.7	1.4							619				2.9	7.20				
580	A-9′	2.6	1.4							620	D-19′-1			2.3	7.20				
581	A-9′	2.5	1.6							621	K-11′砂下					7.6			
582	A-9′	2.5	1.4							622	D-19′-1								
583	A-9′	2.6	1.4							623				3.6	9.60				
584	A-9′	2.5	1.4							624	D-9′-1			1.2	7.60				
585	A-9′	2.2	1.6							625				1.5	7.40				
586			1.6							626	F-7′								
587			1.7																
588			1.0																
589			底径 19.6																
590			底径 13.0																
591	P-13′	径 2.2	孔径 0.6×0.6		重さ(g) 1.80														
592	N-11′	径 2.3	孔径 0.6×0.6		2.63														
593	L-17′	径 2.1	孔径 0.7×0.7		1.84														
594	N-8′-1	径 2.4	孔径 0.6×0.6		3.50														
595	J-22′-1	径 2.2	孔径 0.7×0.7		2.04														
596	I-9′	径 2.4	孔径 0.5×0.5		3.36														
597	I-9′	径 2.3	孔径 0.6×0.6		3.11														
598	L-11′-1	径 2.4	孔径 0.6×0.6		3.04														
599	d-16′	径 2.4	孔径 0.65×0.7		2.72														
600	e-16′	径 2.4	孔径 0.7×0.7		2.74														

第3章　まとめ

出土遺物は，鹿児島城二之丸跡の遺構編の中に遺構より検出した遺物と，表層や埋土に出土した遺物とに分けてまとめ，後者を遺物編とした。

出土遺物は多種類にわたり，陶器・磁器・ガラス製品・石製品・その他特別品があった。

1　陶器

陶器は主に薩摩焼が出土し，他に肥前唐津焼等がみられる。

薩摩焼は，俗に言う白薩摩・黒薩摩の他に蕎麦釉や象嵌・宗胡録写，それに今回取り上げた灰ものを含め多くの種類がみられた。

白薩摩は現代の白薩摩と違って全般的に白っぽいものである。これは竪野冷水窯類次の色調である。白薩摩の流れは，江戸期でいえば，初期の竪野冷水窯の色白から幕末の磯御庭窯の黄色の強いものまであるが，本遺跡で出土したのは冷水窯のものと類似した色を呈している。

灰ものは，胎土が灰色を呈し，透明釉を施したものである。これは，象嵌のものを象嵌を施さずにつくられたものであろう。

象嵌ものは，灰やものに白粘土を象嵌するものであり，菊や梅等いろいろな文様を象嵌してあり，三島暦を模した三島手等がある。冷水窯にも出土している。

麦パ釉は，灰色ものに唐津焼の蕎麦色の釉を施したものと思われる。これは肥前唐津焼の施釉が伝わったと思われる。冷水窯にも出土している。

宗胡録写は，タイのスワンコローク地方のものを模したもので，白さつまに黒茶・茶褐色の釉で文様を描くものである。文様は独特で同心円文や格子目文等を大きく描いている。これは冷水窯・稲荷窯にもみられる。

黒薩摩は竪野系のものや，龍門司系・苗代川系のものがある。

竪野系のものは目砂の粒子が大きく，龍門司系のものは小さい。また，元立院系のものは極粒子を使用しているのが特徴である。また龍門司系の元である山元窯類似のものも出土している。

(山元窯は加治木町の山元窯採集品と比べた。)

(元立院焼は姶良町歴史民俗資料館のものと比べた。)

苗代川系は主に甕・半胴甕等が主である。

また龍門司の二彩も出土している。これは二種類あり，緑に白と，白と茶のものがある。

薩摩焼以外では，琉球焼・唐津焼・関西系・瀬戸・美濃系も出土している。

2　土師器

土師器は皿・坏・鍋が出土している。

皿は灯明皿に使用される場合が多い。鍋は取っ手付きである。

3　瓦器

瓦器は鉢や火舎の類が多い。

4　瓦

瓦は軒丸瓦，軒込瓦，丸瓦，平瓦，桟軒平，鬼瓦，専瓦が出土している。この中で，軒丸瓦では牡丹文と巴文と菊花文の３種類が見られた。軒平瓦は唐草文であった。

5　石製品

この中には硯，砥石，鋳型，石栓，仁王像の腕が見られた。

6　ガラス製品

この中には，牛乳瓶，インク瓶，ラムネ瓶等が出土している。

木製品は木箱が出土している。

7　洗面具

この中には，歯ブラシ，練歯磨容器，耳掻きが出土している。

8　髪止め

この中には髪刺し・櫛が出土している。

9　鉄製品

この中には，馬蹄・銃弾・砲弾・薬キョウ，キセル，古銭が出土している。

縄文～奈良時代

この中には，深鉢，甕形土器，高坏，坏が出土している。

10　磁器

磁器は薩摩地方で焼かれた平佐焼および苗代川系と，肥前系有田と肥前系佐波見と，瀬戸・美濃系と中国製のものが出土している。

青磁は中国の竜泉窯系・肥前系・薩摩系があり，多種にわたっている。

白磁は薩摩焼の系統と思われる。

染付は肥前系有田，平佐系，苗代川系が出土している。本遺跡では平佐系が主体であった。（平佐焼は川内市歴史資料館の資料と比べた。苗代川系は御定式窯採集品と比べた。）

色絵では肥前系有田の鯉の置物や蓋物の蓋が出土している。また，瀬戸・美濃系も出土している。

以上が出土遺物である。

遺物で言えることは，江戸時代から明治時代および大正時代まであり，多期にわたってあることが分かった。

それは，鹿児島城江戸時代から第七高等学校の明治・大正時代までの遺物が出土したことになる。

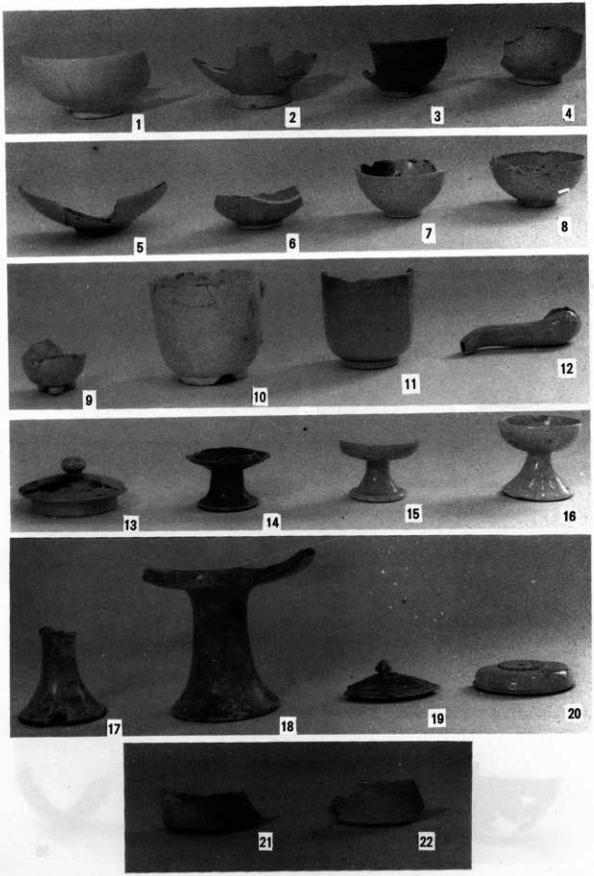
参　考　文　献

・鹿児島城本丸跡	鹿児島県教育委員会	1985年３月
・鹿児島城二之丸（遺構編）	〃	1991年３月

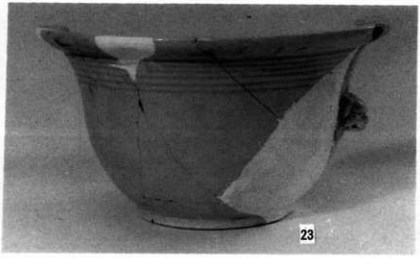
図

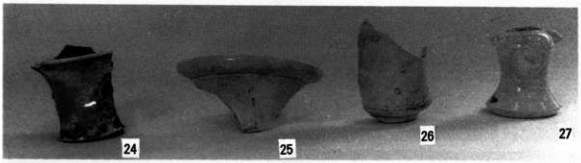
版

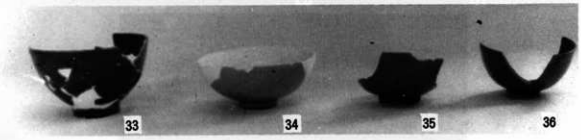
図版 1　白薩摩 1



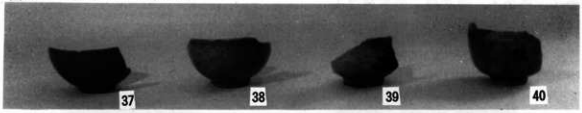
図版2　白薩摩2・灰もの1

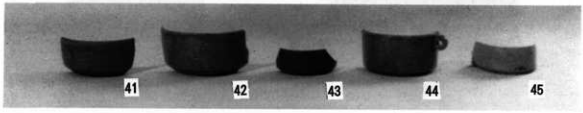


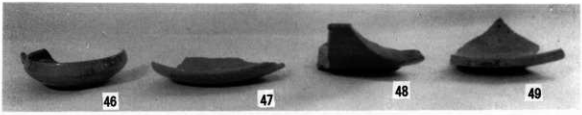


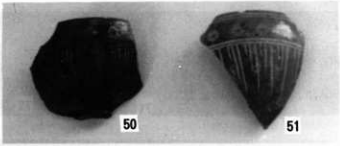


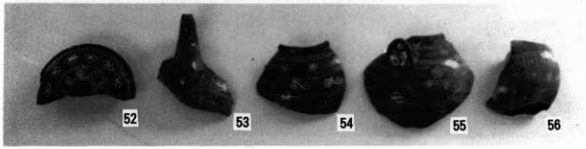
図版3　灰もの2・象嵌1

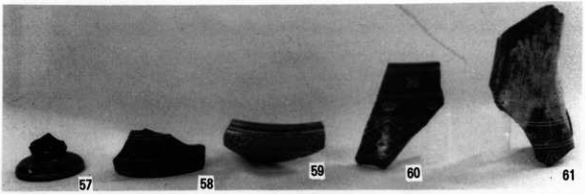

37
38
39
40


41
42
43
44
45

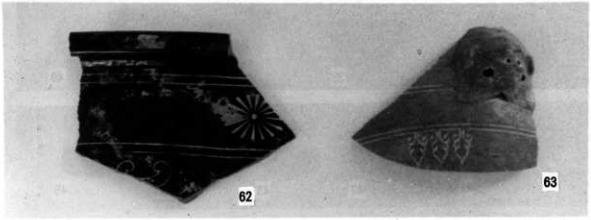

46
47
48
49

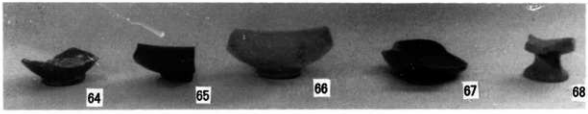

50
51

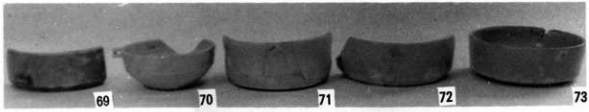

52
53
54
55
56

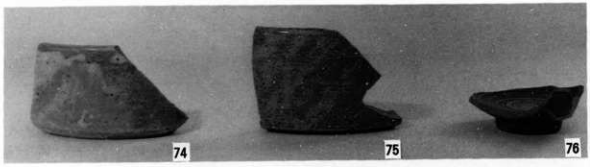

57
58
59
60
61

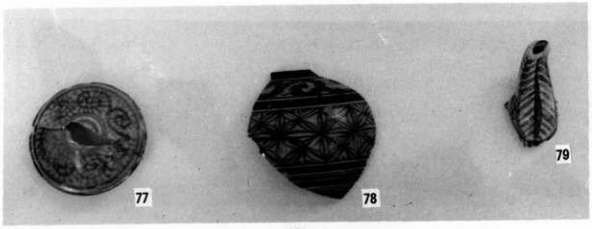
図版4　象嵌2・蕎麦釉・宋胡録写1



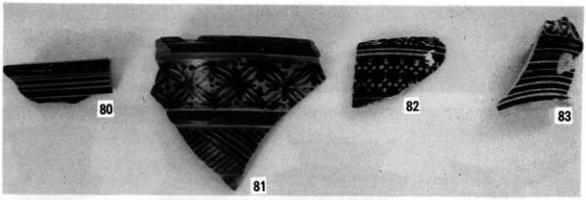


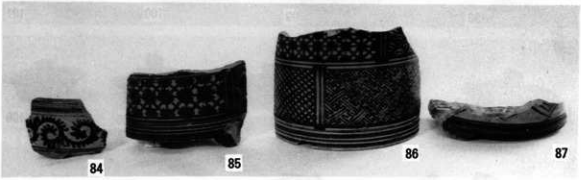


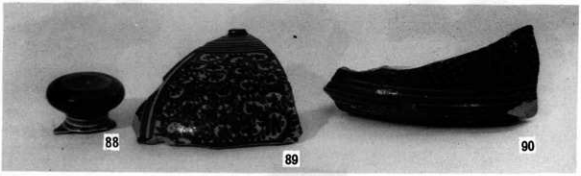


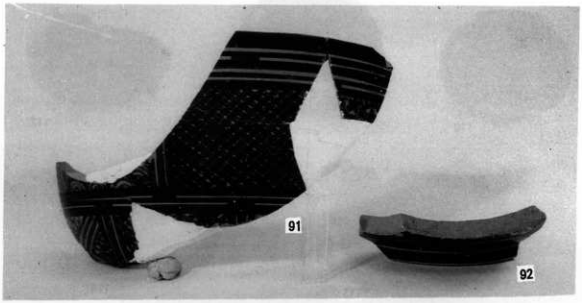


図版5　宋胡録写2





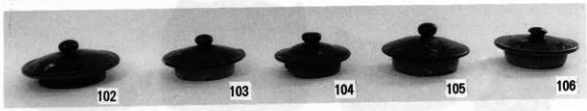


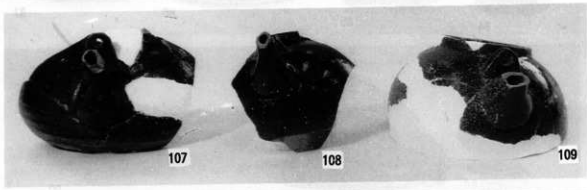


図版 6　竪野黒薩摩 1

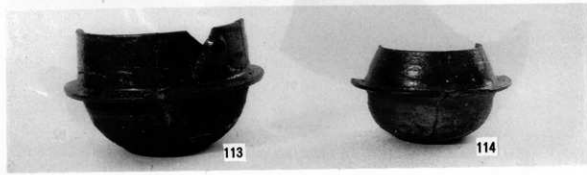
93
94
97
95
96

98
99
100
101

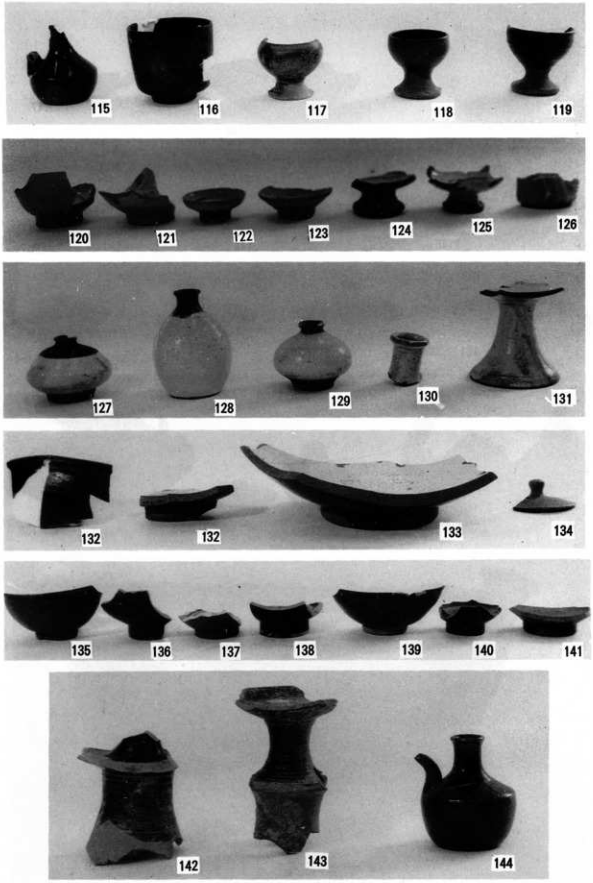

102
103
104
105
106


107
108
109

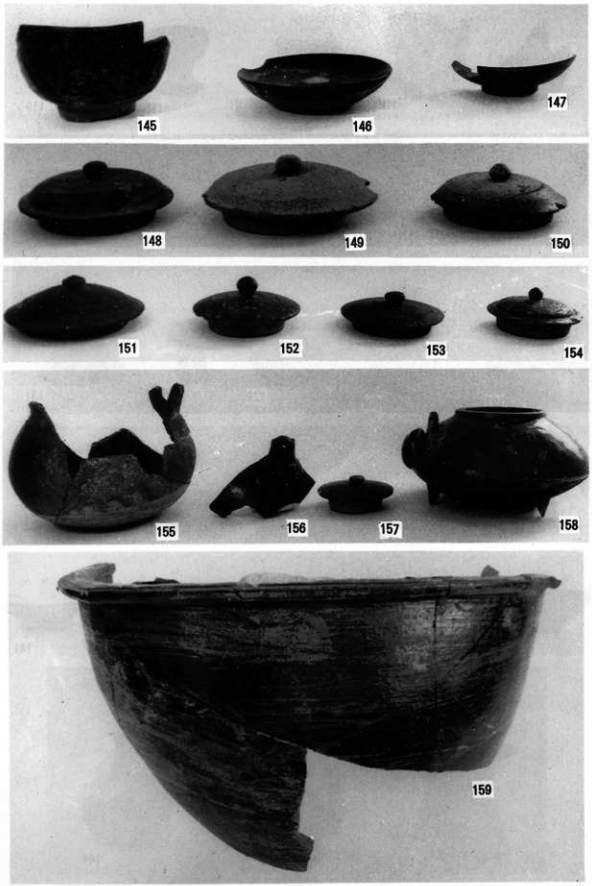
110
111
112


113
114

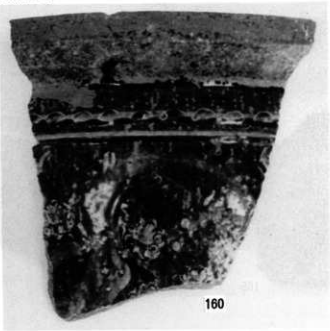
図版7　堅黒薩摩2・龍間司二彩・黒薩摩

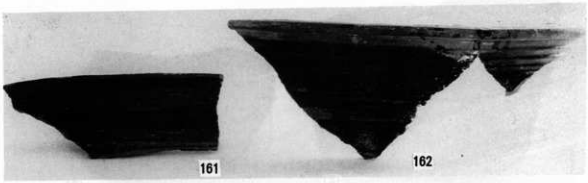


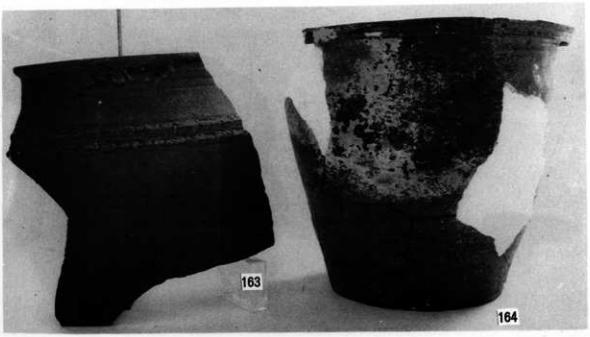
図版 8　元立院黒薩摩・苗代川黒薩摩



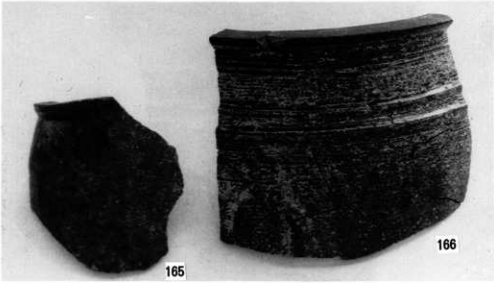
図版 9　苗代川黒薩摩 2

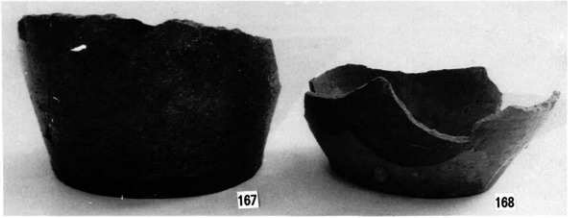


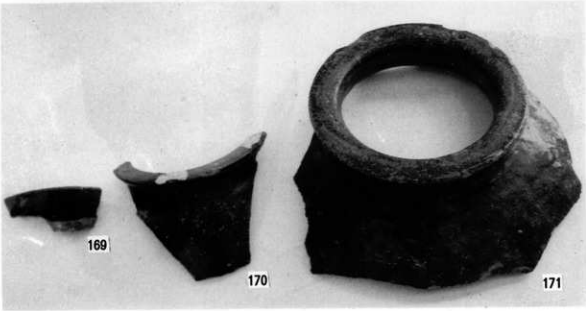




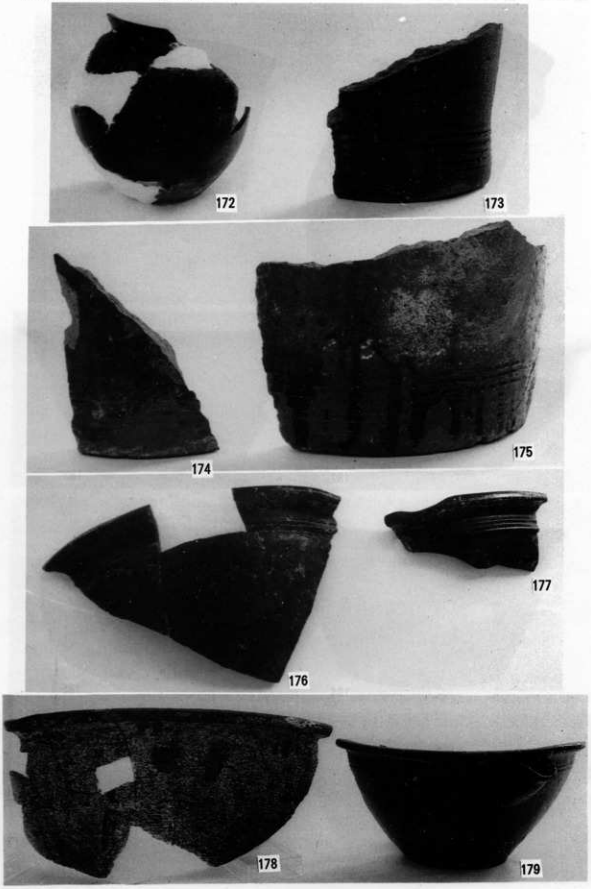
図版10　苗代川黒薩摩 3



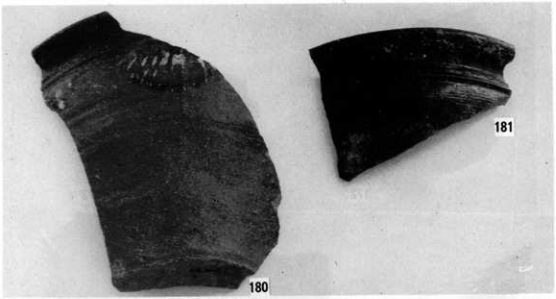




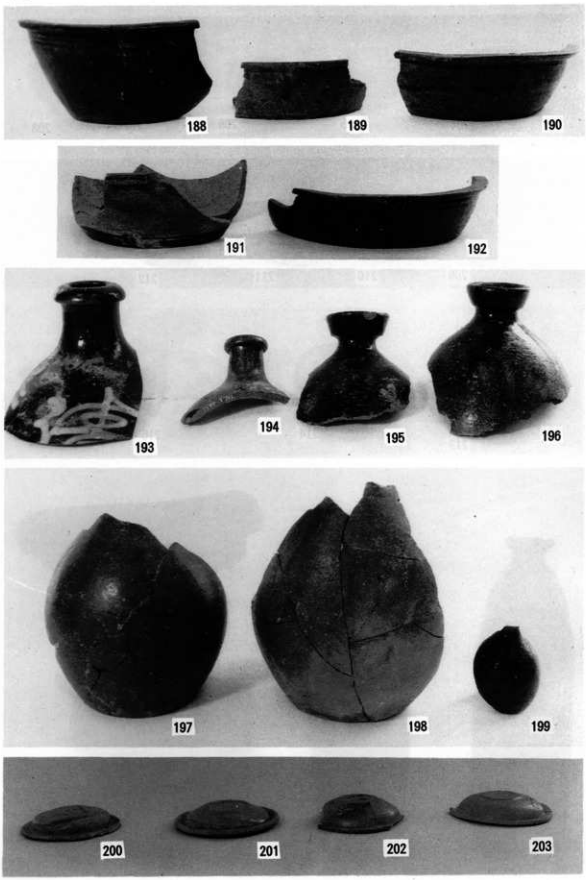
図版11　苗代川黒薩摩 4



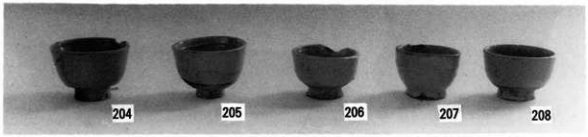
図版12　苗代川黒薩摩 5

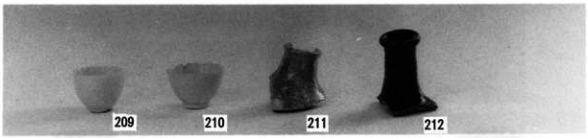


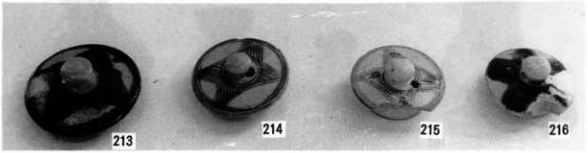
図版13　苗代川黒薩摩6，その他の陶器1

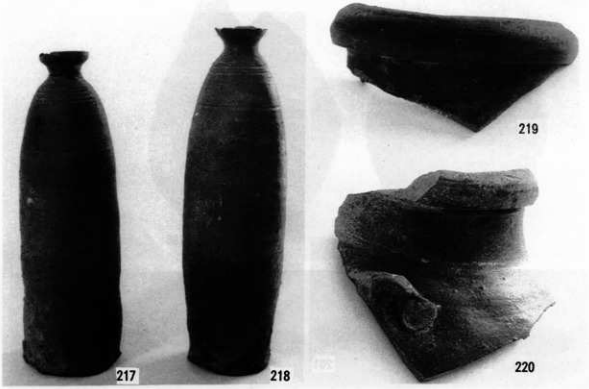


図版14　その他の陶器2，琉球焼1

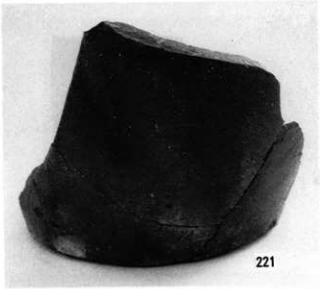




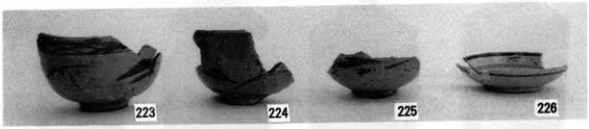


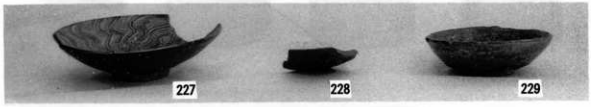


図版15　琉球焼2・唐津焼・瀬戸・美濃焼系1


221

222


223 224 225 226


227 228 229

230 231 232

233 234 235 236